【Ｇａｔｅ】～若き門番達の物語～

剣狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【Ｇａｔｅ】～若き門番達の物語～

【Ｎコード】

Ｎ３７５８Ｔ

【作者名】

剣狐

【あらすじ】

普通の高校生活から突然異世界に飛ばされた高校２年生、渡辺（わたなべ）守武（もりたけ）、彼の飛ばされた世界ではＧａｔｅ　Ｓｋｉｌｌと呼ばれる古の力を操る人々が支配する世界であった・・・・。

第1話　門【Ｇａｔｅ】Ｓｋｉｌｌ！？（前書き）

はじめまして！
友達に紹介されて少し前に書いていた小説をＵＰすることになりました・・・・。
とても下手で面白くない話かもしれませんが、一度目を通していただければ幸いです。
よろしくおねがいします！！！！

第1話　門【Ｇａｔｅ】Ｓｋｉｌｌ！？

？？「起きろ貴様ら！！！私は、本日より貴様ら新兵に「ゲートスキル」の定義と基礎を叩き込むよう雇われた教官だ。」

教官殿「私のことは教官殿と呼べ。私語は許さん、勝手な行動をとるものには容赦無く体罰を与える。」

教官殿「いいな？わかったら全員さっさと着替えて８時までに中央広場に集合するように。時間厳守だ、遅刻は許さん。以上。」

と言い残し教官殿とやらは嵐のように部屋から去っていった。

しかし、ひとつ疑問がある・・・・いやふたつかも・・・・・・いや数え切れないほどに・・・・・・。

まずひとつ、なにこの状況。

自分の他にもなにやら唖然として状況がつかめないというような表情をした人物が男女合わせて７人ほどいた。

俺の名前は渡辺（わたなべ）守武（もりたけ）（１７）俺は確か昨日まで・・・・・朝、いつものように１０時頃起床し、いつものように高校へ通い、いつものように遅刻し、いつものように夢の中で授業を受け、帰宅し、風呂に入り、飯を食って・・・・・寝たはずだが。

なのに目が覚めてみればどこぞのファンタジー作品のようなハイテクな造りの堅苦しい集団雑魚寝場のような場所で目が覚めた。

起きると同時に自分を教官殿と名乗る気の強そうな女性にどやされ・・・命令までされた・・・・。

しかし落ち着いてみると意味の分からない状況に陥っているのは自分だけではないようだ。

周りにいる7人の男女はよく見れば自分と同年代、または一つ上か下くらいの年齢の男女ばかりで、みんな驚いた表情で自分がどのような状況なのかを探っている様子。

大丈夫、俺もだ。

しかし考えても見ろ、あの教官殿、体罰とか言ってたよな・・・・こんなわけのわからない映画とかでしか見たことないような軍事施設みたいなとこで、体罰？

危険すぎる・・・・・・。

とりあえず今は状況把握のためにあの教官殿の言うとおりにするしかなさそうだ・・・。

こういう危機的状況や異世界にきたようなシチュエーションは中2病の抜けきらない高校2年生には最高の状況であった。

こうなると守武は行動が早い。まるでハリウッド映画の主役気分のような雰囲気で眠たそうに「ここは・・・・・どこだ・・・・？」などと言ってみる。

男とは、そういう生き物なのだよ。

しかし守武が言葉を発したおかげで周りの連中もきっかけが出来たようだ。

口々に「ここはどこ？」「え？私さっきまで家の布団で・・・・」などと言っている。

答えはそう！ファンタジー！！！だと守武は勝手に一人ごちするのであった。

第1話　門【Ｇａｔｅ】Ｓｋｉｌｌ！？（後書き）

どうも！剣狐です！
いかがでしょうか、第１話。
正直、ガクガクブルブルの状態ですｗ
自分の作品がネットで晒されてるとおもったらあああああああああ・・・・。
ま、自分で投稿したんですがねｗ
とりあえずここまで読んでくれた方に感謝（ＴωＴ）
誤字、脱字、不審点、クレーム等ありましたらお願いします＞＜

第2話　これから

守武は部屋の隅で一人、なにやら頭を抱えていた。

その理由といえば・・・・・『いかにこの7人の中で中心的人物になれるか、そしてリーダー的行動をどのような形で起こすか、であった』なんとも狭き心境である。

そして決心がついたように守武は立ち上がる。

守武「みんな、君達も俺と一緒で突然こんなとこに連れて来られたんだろう？」

すると、剣徒「そうですよ、私の名前は橋口（はしぐち）　剣徒（けんと）　けんとって呼んでください。」

討魔「俺もだ・・・。俺は討魔（とうま）　よろしく。」

真癒「私も目が覚めたらこんなとこに・・・・、私の名前は真癒（まゆ）よろしくね。」

優菜「みんなも一緒なんだ・・・・私もよ、優菜（ゆうな）よろしくっ！」

尚矢「やっぱみんなもか！　俺は尚矢（なおや）！　よろしくな！」

夜雲「名前は夜雲（やくも）・・・・よろしく。」

やっぱみんなも寝て、起きたらここに飛ばされていたようだ。

尚矢「しっかしこまったなぁ、ここは一体どこやねん？」

守武「俺もわからない・・・・しかし、ここは何やらいかれた野郎どもの軍事施設のように見える。」

と守武がハリウッドスターを意識した台詞を気にした風もなく吐く。

尚矢「軍事施設やて！？　なんでそないなけったいな場所にわいらは連れてこられたんや！？」

討真「わからない、でもさっきの教官殿とやら・・・ゲートスキルがどうとかいってなかったか？」

その言葉で守武はあることを思い出した。

守武「おい！いま何時だ！？」

その言葉で部屋の空気が凍る・・・。

尚矢「そういや・・・・あの教官殿体罰とかいっとったな・・・・・。」

夜雲「・・・・まずい。」

どうやら夜雲とやらは某ツンデレラノベの長〇さん的ポジションのようだ。いいね！

真癒「軍事施設の体罰ですって！？　それって相当ヤバいんじゃないの！？」

と真癒が騒ぎ出す、それに優菜も続いて。

優菜「たたた体罰ですかっ！　それってあんなことや・・・・こんなこと・・・／／／」

と頬を染める。待て、その反応は色んな意味で危ないぞ。

剣徒「とりあえず部屋の隅々を調べましょう。」

みんながきょろきょろ周りを見回し始めた。

すると一人がなにかを発見した。討魔だ。

討真「とりあえず、急いだほうがよさそうだな。」

「「「「「「え？」」」」」」

みんながきょとんとしていると討魔は部屋の１点を指差した。

そこには壁に掛けられた怪しげな文字の躍る時計らしきものがかかっていた、しかし造りは長針と短針があり、１２箇所に点が打ってあるつくりだった。

そして時計で言う１２時であろう位置に太陽のマークと月のマークが刻まれていた、３時の位置に夕方の太陽、深夜の夜空、６時の位置に夕焼け、朝焼け、９時の位置に日の出、夜更け、が刻まれている。

そしてその時計らしきものは自分達の世界で言う午前７時５０分を示していた。

尚矢「おい・・・・わいの感が正しけりゃあと１０分ないで・・・・・。」

夜雲「・・・・ない。」

真癒「ないわね。」

優菜「あと１０分で・・・・・／／／」

討真「まずいな。」

剣徒「いろんな意味でですね。」

守武「とりあえず教官殿は着替えろとかいってたけど、着替える？」

真癒「でもなにに～？」

夜雲「・・・・・あっち。」

といって夜雲が部屋の隅のほうを指差す。

なるほど、そこには男女別に分けられた更衣室が律儀に用意されていた。

守武「よし！　５分で着替えて集合だ！　遅刻は許されない！」

守武はいまだハリウッドスター気分のようだった。

第2話　これから（後書き）

とりあえず2話目を更新しました！

1日1話を目処にしていきたいですね＞＜

感想や修正点、意見や誤字脱字等あればおねがいします＞＜

第3話　ここは地球ですか？

5分後・・・・・。

「ほう、全員時間通りに着替えたな」といまだ抜けきらない守武。

着替えた、と一口にいえどその服装は明らかに軍事施設の服装とはかけ離れたものであった。

いってみればヨーロッパの中世の法国騎士のような容姿であった。

男子は長い、膝上くらいまでの深い、蒼いマントに白い手袋、女子は深い、紅のマントに漆黒の手袋という、どこぞの魔法使いのような感じだった。

マントの下には男子は胸の前あたりが開いた黒いブレザー、その下にカッターシャツ、そして白い足首までの長ズボン、女子も同じ服装だ。

尚矢「あと5分しかないで？　早めに集合したほうがええんちゃうかぁ？」

剣徒「そうですね、5分前行動は基本ですから。」

優菜「ええっ！　ちょっと遅刻するとかもいいじゃないですかぁ？　んふふ・・・・／／」

討魔「つべこべいわず行くぞ。」

といって討魔が歩き出す。それに続いてみんなぞろぞろと部屋を出て行った。

一人取り残された守武は・・・・。

守武「あぁーーーー！！！！　なんで討魔がクールでリーダー的な感じになっているんだあああぁぁぁぁ・・・・。」

と叫び、とぼとぼ歩き出すのであった。

尚矢「さてさて、中央広場とやらはどこやぁ？」

部屋を出ると並びにいくつも扉のある廊下にでた。

守武たちの部屋は一番奥の部屋のようでとりあえず進む方向には迷わなかった。

やはりそこも軍事施設のような造りで、機械的な壁面に対し自動で開くドアなどがある。そこを歩くブレザーにマントを羽織った7人はとても不釣合いな光景であった。

しばらく道なりに歩くと渡り廊下に出た。そこに外を見渡せる窓が付いていた。

尚矢「お！　あの渡り廊下から外見れるで！　中央広場とやらがどこかわかるかもしれへんなぁ！」

討魔「そうだな。　ここがどんな場所なのか分かるかもしれない。」

その会話をリーダーを奪われ落ち込み、とぼとぼ歩いていた守武は

とたんに元気になり・・・・。

守武「なに！？　窓だと！？　おい見せろ！！！」

と強引に窓際に迫った2人を追い抜き窓を覗き込んだ。とたんに守武は息を飲み、黙り込む。

そこにはこの機械な廊下からは絶対に想像もつかないであろう光景が広がっていた。

見渡す限り続く横幅１５メートルはあるかと思う大通り、その脇には多くの草木が生い茂り。

その終点近くにまるでガウディの未完の世界遺産、サクラダファミリアを思わせる４本の高い尖塔に、その周りを囲むように壮大、かつとてもスケールの大きい大聖堂のような建物があった。

守武「なんてこった・・・・。　ここは・・・・いや、俺達はもしかして・・・・。」

討魔「おい、どうした。」

尚矢「なんやなんやぁ？　裸の姉ちゃんでも歩いてたんかぁ？」

守武「お前らも・・・・見たらわかると思う。」

そう言われ６人が順番に窓を覗いていく。

覗くたびにみんなそれぞれ息を飲み、言葉を失うのであった。

しかし、大切なことに気づいた人物がいた。夜雲だ。

夜雲はぼそっと、「・・・・時間。」とつぶやいた。

みんなの顔が恐怖に染まる。

尚矢「まずいで・・・・かんっぺきに遅刻や・・・・・。」

優菜「余りに壮大すぎて時間をわすれてました・・・・・。」

真癒「でもまずいわね。　こうなったらいち早く中央広場とやらにいかないとね。」

討魔「とりあえず行こう。」

優菜「遅刻ですか！！！　あぁ・・・・／／／／　お母さんごめんなさい・・・・私お嫁に行けなくなります／／／」

討魔「・・・・とりあず行くぞ。」

といって6人はまた歩き出した。

そしてまたまた取り残された守武は・・・・。

守武「なぁあぁんでぇなぁんだあぁぁぁぁぁ！！！！！　いつのまにか討魔がリーダーじゃねえかぁ！！！」

守武「ぐふ、ぐふふふふふ。こうなったらぁ・・・・・一番役に立って一番目立ってやるぅ・・・・・。」

と、不審者１２０％でなにやら呪詛のようにブツブツなにか言いながらとぼとぼ歩き出すのであった。

第3話　ここは地球ですか？（後書き）

さぁさぁ、調子に乗って3話目を更新しますたぁ♪

いまだ本題に触れないというのはどうかとおもうね。自分でも。

次話でちゃんとメインにふれますから！！！

とりあえず3話を読んでわくてかしてくださいw

感想、意見、誤字脱字等ございましたらお知らせください。

第４話　～【Ｇａｔｅ】Ｓｋｉｌｌ～

教官殿「遅い！！！！」

やっとのことで中央広場に着いた7人は怒りのオーラＭＡＸの教官殿に説教されていた。

教官殿「８時までに集合といっただろう？　なぜ１０分も遅れるのだ。　死にたいのか？　いっそ殺してやろうか？」

尚矢「ひぃぃ！！・・・それだけは勘弁してくださいな教官殿～・・・・・。」

教官殿「ふむ、まぁ体罰と言うのはただの脅しだが、このお前らからすれば危機的状況でよくもまぁのこのこと遅刻できたものだ。」

教官殿「大丈夫だ、殺しはしない。　お前達にはこの世界でしてもらうことがたくさんあるからな。」

といって広場の中央の方へあるいていく。

よくみると中央広場の真ん中に半径１５メートルはあろう巨大な魔方陣が地面に描かれている・・・。

剣徒「あんなものが・・・・・中央広場が広すぎて気づきませんでしたね。」

真癒「あれはなにかしら？」

など言っていると、教官殿が魔方陣の前に立ち。

教官殿「よし、これからゲートの契約と属性石の契約を行う。」

契約？　なにを意味のわからない事を。

契約といえばファンタジーの世界で幻獣や世界の理などの力を借りるあれではないのか？

教官殿「よし、１人ずつこの魔方陣の真ん中に立て。」

守武「ちょ、ちょっとまて！！　契約ってどういうことだ！？」

教官殿「ここに来たら初めに契約するのが普通だ。　なにか問題でも？」

尚矢「いやいや！　いくらなんでもおかしいっちゅーねん！　わいらはいきなり意味わからん世界に連れてこられたんやで！？」

真癒「そうよ！　それなのにいきなり契約とか、もう意味わからないわ！」

教官殿「貴様らは第２，０００回ゲートスキル継承者に選ばれた存在だぞ？」

教官殿「２，０００年に１回の記念ということだ。　喜べ、民も期待しておる。」

夜雲「・・・・・意味がわからない。」

尚矢「そうやで！　２，０００回記念だかなんだか知らんけどさっきから意味わからんこと言い過ぎやで！！！」

教官殿「そういえば・・・お前らさっきからゲートスキルの事をなにも知らないような言い草だな。」

教官殿「おい、お前、名乗ってみろ。」

守武「え？　渡辺　守武だけど・・・・・。」

教官殿「ワタナベ　モリタケ？　なにをふざけている・・・・・いや・・・・もしや・・・・。」

尚矢「なんやなんやぁ？　もしかして不具合とかちゃうやろなぁ！？」

教官殿「いや、いま思い出した。　１，０００年前の記述に思い当たるものがある・・・・。」

真癒「その内容って？」

～我等ゲイトストーンの民～

～今年は契約暦１，０００年を示す年なり～

～しかし召喚されし人ゲートスキルを知らず別世界より参ったと申す～

～召喚の力、１，０００年に１度亜人を呼び寄せリ～

～その力壮大にして異常～

教官殿「という内容のはずだ・・・・そうなると貴様らはこのゲイトストーン法国ならず、この世界の人間ではないのか！？」

討魔「ああ、俺達は地球の日本からきた。」

剣徒「ここはどういう世界なんですか？」

教官殿「チキュウ？　ニホン？　よくわからないがこの世界ではなさそうだな・・・。」

教官殿「この世界はゲートスキルという世の理の力を借り、世界に散りばめられし９９の門を解放軍から守る民だ。」

教官殿「しかしそれは悪魔で伝承の話で、実質確認されている門は９０、残りの９門などただの伝説だとか数合わせだなど、ひどい言われようだ。」

討魔「要するに、俺達は２，０００年に１度の召喚とやらに運悪く選ばれちまったってことか。」

教官殿「私も伝承にたいしては半信半疑だったから信じられなかったが、現状では信じざるをえまいな。」

教官殿「まぁ、これも巡り会わせだ、さぁ、契約しろ。」

なんとも無理やりである。

７人は考え込む・・・・ある１つのことを。

どうやったら元の世界に戻れるか。

剣徒「あの、この世界から元の世界に返ることはできるんでしょうか？」

教官殿「わからない、しかし伝説では残りの９門には異世界につながる門もあるという伝説がある。　かなり怪しい伝説だが、考えうる限りではこの方法いがいないだろうな。」

こうなるとこの７人は早かった。

尚矢「じゃぁさっさと契約すっか。」

剣徒「そうですね、じっとしてても始まらないし。」

真癒「そうよね、いつまでもいじいじしてられない。」

優菜「お仕置きないんですかっ？？」

夜雲「・・・・・無い。」

優菜「ないんですかぁ・・・・」

討魔「なんでちょっと残念そうなんだ・・・・。」

教官殿「さて、誰から契約するんだ？」

７人は相談を始める、それぞれが、僕は何番でもとか、私ちょっとこわいわ、とか、どうなっちゃうんだろう／／とか言っている。

そして1人、蚊帳の外でプルプル震えている人物がいた。

守武であった。

散々無視され、リーダーを奪われ、自分を無視ししどんどん話は進み、今に至るのであった。

しかし守武はこのチャンスを逃さなかった。　勇者になるチャンスを。

守武「よおぉし！　ここはおれがぁ～行こう！」

と歌舞伎役者のような謎のタメを入れながら言い放つ。

あとの6人は、ああ、いたんだ。という雰囲気である。

守武は次の瞬間には走り出していた。

あっという間に魔方陣に入り中心に立つ。

その瞬間、魔方陣がぼんやりとした光から、マグネシウムリボンを燃やしたような眩い光になり、そしてスタングレネードのように目を暗ませた・・・・。

第４話　～【Ｇａｔｅ】Ｓｋｉｌｌ～（後書き）

書き始めて２時間、いろいろと気が散ってなかなかできなかったｗ

やっと本題に触れはじめたぁｗ

また次もがんばります！

誤字、脱字、意見、感想等ありましたらよろしくです！

第5話　それぞれの力

一瞬、目の前が真っ白になったと思った次の瞬間には視界は元に戻っていた。

しかし、守武は確実に、自分に与えられた力、そしてその能力を理解していた。

教官殿「お前の能力はなんだ？　もう既に頭ではわかっているだろう？」

守武「ああ・・・。俺の能力は・・・・・。」

守武「オブシディアン＝ブラッドストーン　退魔の門」

教官殿「なに！？　2属石だと！？」

教官殿「私は　カーネリアン　正義の門　だ、2属石などありえない！！！」

教官殿「この世界では召喚されし人間1人につき1つの属性石、所属する1つの門と契約を交わすはず・・・・そうなると・・・・これはやはり選ばれし亜人の力なのか？」

教官殿「しかし・・・・それ以外考えられんな・・・・。　よし、次の者、契約しろ。」

次に入ったのは剣徒だった。

守武と同じく魔方陣に入るやいなや眩い光に視界を奪われる、そしてその光は唐突に消え、そこに新たなスキルマスターが生まれる・・・。

教官殿「さて、能力は？」

剣徒「これは・・・・すごい・・・・・頭のなかに初めからあったかのように知識が入ってきます・・・・手に取るようにわかります・・・・。　僕の力は・・・・。」

剣徒「ローズクォーツ＝アゲート　神授の門」

教官殿「また2属性か・・・・・。　こうなると全員2属性なのだろうな。」

そして残りの5人も次々と契約していった。

討魔は「ホークスアイ＝ムーンストーン　決意の門」

真癒は「ラピスラズリ＝アクアマリン　治癒の門」

優菜は「アズライト＝スモーキークォーツ　活力の門」

尚矢は「ロードナイト＝クリスタル　浄化の門」

夜雲は「サファイア＝オニキス　孤独の門」

教官殿「これは・・・・・本当に7人とも2属石1門に目覚めるとは・・・・・。」

7人はそれぞれの中に目覚めた力を実感していた。

体の中を巡る膨大な魔力、それに比例する力・・・・。

心の悪しきものが持てば一瞬で魅了され悪用するであろう力を体に感じながら、一同はゲートスキルの全てを悟っていた。

教官殿「どうだ？　もう疑問はないだろう？　なにが自分に出来るか。　全てわかったはずだ。」

教官殿「しかし貴様らはまだ全11階級あるうちの下位三隊の最下位、エンジェルズのスキルマスターに過ぎない。有り余る魔力を使いこなすなどもってのほかだ。」

教官殿「なので明日からスキルマスターとしての実用訓練を1週間行う。　私は放任主義なのであとは自由にしてやるから1週間の我慢だ。」

この言葉に全員とぼけた表情をしている。

教官殿「なんだ？　その顔は。　お前、口がぽかーんと空いておるぞ。」

尚矢「い・・・いや、放任主義ってどういうことですかいな??」

教官殿「その名の通りだ。　1週間の訓練のあとはお前達はこの世界のスキルマスターとして生活する。」

教官殿「まぁなんだ、非常勤門番ってとこだろうか。」

教官殿「いまこの世界ではこの世に散らばる伝説の魔獣を閉じ込めた９０の門と未確認の門が９つある、いまその門を破壊し魔獣を従え世界を牛耳ろうとするやからの動きが活発化している。」

教官殿「ここまで言えばなんとなくわかるだろう？」

尚矢「あぁ、要するに世界征服しようっちゅうやからを倒して、ついでに残りの９門を発見してそれも守りんしゃいって命令に聞こえるなぁ・・・。」

教官殿「ほう、さすがに分かるか。」

教官殿「その通り、やつらに先に残りの９門を発見されては困る。」

教官殿「他の門は既に手だれのスキルマスターが厳重に守っている、しかし見つかっていない未知の門の魔獣など解き放たれたらたまったものじゃない。」

教官殿「そういうわけでお前達には残りの９門も発見してもらう。」

教官殿「発見した場合直ちに連絡しろ、すぐに護衛のスキルマスターを派遣する。」

教官殿「そして奴等に出会った場合、または開放された魔獣に万が一出会った場合だが・・・・。」

一同が緊張する。

教官殿「討伐し封印、奴等の討伐もついでに行ってくれ。」

尚矢「いやいや！！　さすがにそれはきついんちゃいまっか！？」

教官殿「大丈夫だろう。　貴様らは2属石のスキルマスター。　1週間も訓練すればそこらの下位門のスキルマスターなどとは比べ物にならないほどの実力になるはずだ。

7人はそう言われて気分は悪くなかった。

自分達を認められた気分になったからだ。

教官殿「とりあえず今日は自由行動だ。　このスキルマスター養成所も見てまわるといい。」

教官殿「明日の朝8時までにこの中央広場に集合、消灯は１０時だ。　さっきの部屋に布団を用意してあるので各自１０時までに戻り就寝するように。」

教官殿「これを守らなかったら・・・次こそ体罰だからな。」

7人の背筋に冷たいものが流れた。

尚矢「食事はどうするんでっかぁ？」

教官殿「食事は食堂があるのでそこで取れ。　バイキング制なので自由に食べるといい。」

では明日の8時に。といって教官殿は立ち去っていった。

取り残された7人の間にはしばし沈黙が流れた。

尚矢「さてと・・・とりあえず部屋に戻りますかね。」

7人は集団雑魚寝部屋に向かって歩き始めた。

第5話　それぞれの力（後書き）

続けて5話投稿！！

さすがに疲れた・・・・。

1人でも面白いとおもってくれるかたがいたら恐縮です＞＜

感想、意見、誤字脱字等ございましたら感想欄などにご連絡ください＞＜

第6話　食堂

部屋に戻ってきた7人は自分達に宿った力を実感しつつ話し合いをしていた。

尚矢「正直、契約とかようわからんかったけどやってみたら実感するなぁ～。」

剣徒「そうですね。　初めはどんなオカルト集団かと思いましたよ・・・・。」

真癒「でもこれからどうするの？　ほんとにこの世界で生きていくの？」

夜雲「・・・・そうするしかない。」

優菜「お仕置きなかったですぅ・・・・。」

討魔「こうなったらこの世界で帰る方法を探すしかない。　明日しっかりこの力の使い方を知って、くれぐれも死なないようにしないとな。」

するとお約束のように蚊帳の外の守武が。

守武「ソウダヨ、ココハファンタジーノセカイナンダカラ。　タノシマナイト。」

と水を差す。　一人ぼっちにされて完全に壊れている守武であった。

しかし他の6人も残酷である。　そんな守武を無視しちゃくちゃくと話を続ける。

尚矢「しっかしみんなの言うとおり状況的にこの世界でのルールに従って行くしかなさそうやなぁ。」

剣徒「そうですね、一種のゲームだと思えば意外と楽しいかもしれませんね。」

真癒「ゲームって・・・・。　まぁ確かに毎日勉強してるよりドキドキワクワクがいっぱいあったほうがいいわね！」

尚矢「さて、そろそろ飯食いにいきますか！」

時計らしきものは地球でいう午後7時半を指している。

優菜「こっちの世界ってどんな料理が出るんでしょうか・・・・。」

尚矢「ドラゴンの肉とかやったらおもろいなぁ！」

真癒「ありそうでこわいわ・・・・。」

7人は部屋を出て食堂を探しながらそんな他愛もない話をして歩いた。

すると廊下の角に地図らしきものをみつけ立ち止まる。

真癒「なんて書いてあるかわからないわ・・・・。」

剣徒「でも現在地がわかりますし、ナイフとフォークの絵があると

ころが食堂でしょう。」

真癒「あなた・・・・頭いいのね！」

尚矢「それくらい分かってもらわなこの先心配やねんけどな・・・・・。」

地図に書いてある食堂らしきとこを目指して2分ほど歩くと案の定食堂に出た。

そこには豪華（に見える）な料理とその前に皿やナイフ、フォークが置かれてた。

その近くには客席も見える。

１００人は確実に入るであろうホールであった。

尚矢「おおー！　広いなぁ！　しかもうまそうな料理も食べ放題やでえ！」

すると奥の厨房の方から料理長らしきコックがやってきた。

サロール「やぁ！　食堂へようこそ！　私はコック長のサロールだ、教官殿から話は聞いている、楽しい夜を過ごしてくれ！」

そういってサロールコック長は奥へ消えていく。

尚矢「さて、それじゃとりあえず食べますか！」

7人はそれぞれ皿を取った。

そして料理を取りに行く、一番初めに料理にたどり着いた守武の動きがピタリととまる。

尚矢「おーい！　守武はーん！　後ろつかえてまっせー！」

守武「お、お・・・」

尚矢「お？」

守武「おさきにどうぞ・・・。」

尚矢「なんやつれへんなぁ・・・んじゃお言葉にあまえてぇ～・・・・・おおぅ。」

尚矢「わいも後でええわぁ。」

そう、そこには見たこともない、はっきりいってグロテスクといっても言いすぎじゃないような肉（？）料理が並んでいた。

守武「おおぅ・・・・。　これはまた・・・・。」

真癒「き・・・気持ち悪いです。」

優菜「いやぁ？　もしかしたら食べたらおいしいかもですよぉ？」

ここで優菜の天然が開花する。

平気な顔で料理を皿に盛ると一人席に座りパクパクと食べ始める。

尚矢「お・・・おい譲ちゃん、それ、うまいんか？」

優菜「んん～？　ふふーにおいひーでふおー？」

討魔「なんとか食べれるみたいだな。」

真癒「食べないと、ってか食べれないとこっちの世界で生きていけなさそうね・・・。」

しかたなく6人は見た目のよさそうな料理を取り、席に座り食べ始めた。

尚矢「お？　意外と味はいけるやん！」

剣徒「確かに！　なかなか美味ですね。」

真癒「見た目さえなければ完璧ね！」

その中で夜雲は一人悩んでいた。　それに気づいた尚矢は。

尚矢「どないしたんやぁ？　食べな元気つかんで！」

夜雲「・・・・お風呂入りたいな。」

お風呂とは。　考えてもいなかった。

しかし自分達は旅をするのだからお風呂は諦めるべきでは？

尚矢「でもまぁ旅にでるんやし、たまに川とかで洗う程度ちゃうかぁ？」

真癒「旅に出たらしかたないけどここでは入っておきたいわ！！！」

尚矢「まぁ確かに1週間の訓練やし汗かくやろうしなぁー・・・。」

討魔「じゃあサロール料理長に聞いたらどうだ？」

と、いうことで。　7人は食事を食べ終わり、サロール料理長にごちそうさまのついでにお風呂の事をたずねることにした。

尚矢「サロールはーん！　めっちゃおいしかったわ！　ごっそーさん！」

サロール「おう！　律儀にあいさつとはえらいな、口にあってなによりだ！」

サロール料理長がそういうと優菜がすかさず。

真癒「ねぇ料理長？　この施設って体洗うところってあるの？」

サロール「ああ、体を洗うなら水浴び場がお前達の部屋にもあるはずだが・・・・。」

真癒「水浴び場かぁ・・・・まぁ仕方ないわね。」

尚矢「あるだけマシっちゅーこっちゃろ。」

そうね、料理長ありがとう、と優菜がお礼をいい、7人は部屋に向かって歩き始めた。

第6話　食堂（後書き）

ひとつの事を書き始めたらその部分ばっかになって、初めにつけたサブタイトルを変更しなければならなくなる。

こまった性格です・・・。

今日はもう訓練のところをかこうとおもってたのにい・・・。

結局次の次くらいになりそうだ・・。

いつも見てくださってるかた申し訳ない・・。

感謝です＞＜

第7話　訓練開始

部屋に戻って水浴び場とやらを探してみたらそれはトイレと同じ場所にあった。

討魔「サロールの野郎・・・・どこが水浴び場だよ・・・・。」

剣徒「ああ・・・・これは完全にアレですね・・・・。」

真癒「でもいいじゃない、思った以上じゃない。」

はたしてそれはいわゆるユニットバスであった。

しっかりとシャワーと浴槽がある、7人は自分達が想像していたひどく薄汚い水浴び場と対照的すぎてしばし唖然としていた。

剣徒「あの言い方だと水瓶みたいなのがあってそこからすくって水を浴びるイメージをしてましたよ・・・・。」

そのとおりである、いやもしかしたらサロールの部屋はそういう水浴び場なのかもしれないと思う7人であった。

尚矢「まぁ、悪いよりマシやなぁ、むしろ結果オーライやで！」

真癒「じゃあ誰からはいる？」

その後7人は順番に風呂に入り眠りについた。

～翌朝～

教官殿「おい・・・・。」

男性陣「「「「ぐがー」」」」

女性陣「「「すーすー」」」

教官殿「おきんかぁ～～～～！！！！！！！！」

7人が跳ね起きる。

尚矢「うわっ！　な、なんやぁ！？」

真癒「うるっさいわねぇ～・・・。」

優菜「んんーーっ！　はぁ～、ねむー・・・・。」

などと愚痴っている。

教官殿は怒り狂うを通り越しあきれていた。　先日あれだけ釘を刺し体罰まで持ち出したと言うのに。

7人は8時を過ぎても広場に現れず見に来て見れば全員仲良く寝ているではないか。

教官殿は本能的に感じていた。　こいつらは本当に1からは、人間的生活から変えていかないといけないと。

教官殿「いま、何時かわかるか？」

尚矢「じかん～？　んんー・・・・。　８時３０分ですなぁ・・・・・。　あ。」

教官殿「そうだ、よく思い出したな。　えらいぞ、上出来だぞ。」

尚矢「よし、いまから着替えて集合やぁ！！！！！」

教官殿「３分間まってやる。　３分後に広場に現れん場合は私のカーネリアン【Ｇａｔｅ】スキルで灰にしてくれる。」

尚矢「いそげええぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

～３分後～

７人は中央広場に集まり正座していた。

教官殿「ほう、やればできるんじゃないか。　では今日の訓練時間は１時間追加だ。　貴様らが寝ているぶんな。　覚悟しろ。」

７人はそのオーラに圧倒された。　いわゆる鬼教官の空気が溢れんばかりに出ている。

そして地獄の訓練という名の基礎演習が始まった。

第7話　訓練開始（後書き）

はい、時間がなかったのでちょっとサボタージュしましたすいませんw

次からついに本格的になりますね！！！

感想とか意見等あったらいってください！

第8話　～五大門～

教官殿「さて、初級スキルマスター、基礎訓練【基礎知識変】を始める。」

これはまったく予想していなかった展開だ。

7人は地獄の訓練と言うからには血の滲む様な悲惨な訓練を予想していた。

しかし教官殿は違った。

なんと長々とこの世界の成り立ちについてとスキルマスターの活動方法など、頭から足のさきっちょの細部まで話し始めたのだ。

それはなんと5時間を越える長期戦に及び、7時間を過ぎた頃、やっと守武達は開放された。

とある任務と供に。

教官殿の7時間に及ぶ長話を簡単に要約するとこうなる・・・・。

とりあえず、スキルマスターは基本的に近接戦闘を行わないので、筋力トレーニングは行わない。

あと、スキルの出し方は契約したときに覚えたはずだから説明しない。

正式にスキルマスターになるには【五大門】と呼ばれる試練をクリ

アしなければならない。

【五大門】にはそれぞれ特色を持った魔物が潜んでおり、それらを蹴散らすと正式にスキルマスターになれる。

とまあこんなところである。

そして教官殿の任務は・・・。

教官殿「よし、まずは手始めに【炎の門】に行って【古龍・バーニングドラグーン】を倒してこい。以上だ。」

当然7人は激しく反論した。　どこが手始めだと。

返ってきたのはかの有名なあの言葉だった。

教官殿（イーOック）「大丈夫だ。問題ない。」

7人はすごすごと【炎の門】に向かい始めた。

7人は深い森の中を歩いていた。

尚矢「しっかし・・・ひどいやっちゃなぁ・・・・・露骨に台詞パクリよるし、スキルもまともに練習せんままドラゴン退治なんて・・・・。」

剣徒「そうですねえ・・・・。ま、なんとかなるでしょう。」

尚矢「討魔〜〜〜、あとどれくらいやぁ？」

討魔のスキルはホークスアイ＝ムーンストーン、主に風属性のスキルを得意とする分野であった。

それゆえにホークスアイの力を使い頭の中に簡易マップのような物を作り、半径５キロ以内の地形と大まかな建物が分かるのである。

討魔「ん、あと3分くらい歩いたところにある分かれ道を右に抜けると大きな広場みたいなのがある・・・【Ｇａｔｅ　Ｏｆ　Ｆｌａｍｅ】と書いてある。」

剣徒「この世界の主言語は英語んですか・・・・？」

討魔「いや・・・・俺達が分かりやすいように要約されてるんだろう。」

真癒「へぇ～、便利ね！」

尚矢「なんでわざわざ英語やねん・・・・。」

それから3分ほど歩くと、なるほど二手に分かれる道があった。

しかし6人はあえて左を選ぶ。

討魔「貴様ら、右だ。」

そう、左は綺麗な並木道、右は薄暗い獣道であった。

尚矢「明らかに右は怪しいやろおお！！！」

討魔「だが目的地は右にある。　貴様らもスキルマスターだろ、諦

めろ。」

そういってすたすたと獣道に入っていく。

６人はすごすごとその後ろについて歩き始めた・・・・。

第8話　～五大門～（後書き）

お久しぶりですｗｗｗ

さぼりまくりましたｗｗｗ

しばらくぶりに更新しときまぁす♪

第9話　【炎の門】

獣道を5分ほど歩くと大きな岩山のある広場に出た。

その雲に届くかと言うような巨大な岩山には、赤と黒で色付け去れた高さ２０メートルはある扉があった。

尚矢「ここが【炎の門】かぁ～、でっかい門やなあ・・・・・」

真癒「そうね・・・・思ったより大きいわ・・・・」

守武「ふふふ・・・・・これからが本当のファンタジーだ・・・・」

などと各々感想を漏らしていると、案内役らしきスキルマスターが近づいてきた。

??「おう！　貴様らか！　うわさの2属石を持つ新米スキルマスターとは！！」

剣徒「うわさかどうかは知りませんが、確かに2属石です。」

チェスター「私はチェスター、君達と同じ下位三隊の第七階級、プリンシバリティーズ所属のスキルマスターで、属石はタイガーアイ　邪気払いの門　だ、よろしくな！」

真癒「あのぉ～・・・教官殿も言ってたんですけど、階級とか所属とかって詳しくはどんな感じに分けられてるんですかぁ??」

チェスター「なんだ、聞いてないのか、ふむ、なら教えてやろう。」

チェスター「この世界のスキルマスターは主に１１の階級の隊に振り分けられる。」

チェスター「最下位が貴様らエンジェルス、詳しくは、下級【第九階級】エンジェルス　だ。」

剣徒「ちょっとまってください、最下位が第九階級って、１１っこあるんじゃないんですか？」

チェスター「人の話は最後まで聞け！」

チェスター「次に下級【第八階級】アークエンジェルス、そして俺が所属する下級【第七階級】プリンシパリティーズ　だ。　ここまでが主に下級と呼ばれる階級だ。」

チェスター「そして次にくるのが中級【第六階級】パワーズ、中級【第五階級】ヴァーチャーズとくる。　この次だが・・・。」

討魔「ん？　次は【第四階級】じゃないのか？」

チェスター「いや、ここは普通のスキルマスターは所属しないんだ、まぁ特殊部隊ってところだな。　ある一定の条件を満たして、運よく選ばれたら実質上から３番目くらいの実力派階級だ。」

討魔「運よく選ばれる？」

チェスター「そうだ、中級【第四階級】ドミニオンズ　この広い世界で選ばれるのはたった１２名だけだ。」

剣徒「１２名！？　それはすごい確立ですね・・・・。」

チェスター「さて、次だがここからが上級だ。　一つ目は上級【第三階級】トロウンズ、上級【第二階級】ケルビムとくる。」

チェスター「そして上級【第一階級】セラフィム、ここはスキルマスターでも最強クラスの者が揃う精鋭中の精鋭だ。」

討魔「で、いま出たのは９つだが、あとの２つは？」

チェスター「ああ、実質なれる階級としてはセラフィム最高位でね、あとは私達が崇めるべき者を、最上位二階級として呼んでるんだ。」

討魔「その二階級とは？」

チェスター「一つは最高天使、有機天使有機天使アレクシエル（姉）、無機天使ロシエル（弟）だ。」

チェスター「そして最高位が、聖人　～アダム・カダモン～　６枚の羽を持つ大天使様さ。アレクシエルとロシエルにはそれぞれ３枚の羽があるが、これは聖人の羽を半分に分けて生まれたと言われている。」

真癒「へぇ～なんか奥が深いわね・・・・。」

チェスター「難しい話だったな、さて、無駄に時間を食ってしまった、本題に移ろう。」

剣徒「ええっと、古龍　バーニングドラグーンの討伐ですっけ？」

チェスター「まぁ、討伐は無理だろうが（ボソッ）そうだ、その通りだ。」

討魔「ちょっとまて、いまボソッと卑劣なこと言わなかったか？」

チェスター「いやいや！　そんなこと言う訳ないじゃないか！　さ、中へ！　健闘を祈るぞ！」

するとチェスターは門の前に立ち、なにやら黙りこくる。　集中しているようだ。

チェスター「我、炎の門を任されし下級【第七階級】プリンシバリティーズ所属、チェスター・グラウゼラ、今此処に試練に挑みし若者を連れてまいらん。」

すると、炎の門がぎぎぎぃと重い音を立てながら少しずつ開き始める。

ぎぎぎぎぎぃ・・・・どぉん！

チェスター「さぁ、これより新米スキルマスターを対象に炎の門の試練を開始する！　死なぬようにな。」

剣徒「ちょ、不吉なこと言わないでくださいよ！」

チェスター「ははっ！　冗談さ！　ま、がんばりたまえ！」

「「「「「「「はい！」」」」」」」

7人は門の中に向かって歩き始めた・・・・・。

第9話　【炎の門】（後書き）

お久しぶりですw

またさぼってましたw

またちょこちょこ書きます！

第１０話　【炎の門】　～バーニングドラグーン～

門の中にはいるとそこは左右のところどころにたいまつが置かれた少し暗い通路になっていた。

迷宮というイメージは無く1本道が続く道を7人は歩いていた・・・。

真癒「ねぇ～・・・・歩き始めて１０分くらいたったけどなにも変化がないわよ？」

尚矢「って言われてもなぁ～、あ、そや！討魔のホークスアイでマップ開かれへんのか？？」

討魔「ああ、試してみるか。」

そう言って討魔が小さくスペルを唱える。

【風の精霊たるシルフよ、我に精霊の奇跡を与えよ】

討魔の頭の中に門の中の構図が流れ込んでくる・・・。

討魔「なんだ、もうそろそろ終点だ。　その先に巨大な広場のような物がある、そこが決戦の場だろう。」

尚矢「ほんまかいな！！　ってことはなんの実戦経験も無く本番か・・・・。　まぁみんな頑張ろう・・・・。」

真癒「こわいわね・・・・ちゃんとスキル使えるかしら・・・・。」

優菜「さすがにそれは大丈夫ですよ！　契約したときにみんなそれがわかってるはずです！」

討魔「そうだな、実際俺は使えたしな。」

そんなことを言ってる間にすぐに大量の鎖で縛られた入り口の門と同じくらいの巨大な扉が現れた。

守武「なんだこの扉・・・・どうやって開けろってんだ！？」

尚矢「うおっ！？　守武が喋った！？　初めのほうに空気になったはずじゃ！？」

守武「ふふふ・・・・俺は空気になったんじゃない、再登場するタイミングを計ってたと言ってほしいね。」

尚矢「で？　出てきたからにはこの扉開けれるんやろうな？」

守武「・・・・・・・はは っ！　頑張ってくれたまえ諸君！　僕は高みの見物と行こう！！！」

剣徒「糞ですね・・・・・。」

尚矢「糞や。」

討魔「糞が。」

真癒「死ね。」

優菜「ドラゴンの生け贄にしましょう。」

夜雲「・・・・・・死ぬといい。」

守武はひでえ言われだ、どっちが糞だ、とぶつぶつ言いながら最後尾に戻っていった。

尚矢「さて、この扉どーやって開けよ・・・・・。」

など考えていると頭の中に声が響いた・・・・。

『試練を受けし者達よ』

討魔「なんだ!?」

剣徒「頭の中に声が!?」

『そう慌てるな、若造どもよ』

『我が名はバーニングドラグーン、炎の門の守護者なり』

討魔「バーニングドラグーン・・・・お前を倒せと言われてきた。」

尚矢「せや!　とっとと勝負せい!」

『フン、血の気の荒い薄汚い人間どもめ』

『そこまで言うのなら我が業火で焼き尽くしてくれる!!!』

すると大きな地響きを立てながら扉に絡み付いていた鎖が外れ始め

る・・・・・。

ガシャァァアアンという大きな音と供に、扉がきしみながら開き始める・・・・。

扉が大きく開かれた・・・・。

『いま扉は開かれた・・・・・・。』

『さぁ、入って来い。』

7人は扉の中に入った・・・・・。

討魔「暗くて何も見えないな・・・・・。」

尚矢「でもヤバそうな臭いがプンプンするで・・・・しかも熱い・・・・。」

7人が広場の真ん中辺りに着くと、後ろで扉の閉まる音が聞こえた・・・・。

それと同時に円形の部屋の四方八方にあったたいまつに炎が灯る・・・・。

炎で明るくなった部屋の奥に巨大な影が現れた・・・・・。

『ようこそ炎の試練へ・・・・。』

『世紀の2属石スキルマスターよ、歓迎しよう・・・・。』

皮肉の篭った声でバーニングドラグーンが語りかけてくる・・・・。

尚矢「そんな奥におらんでとっとと姿みせいな！」

すると巨大な影が立ち上がる・・・・。

そして地響きを立てながら進み、明るみにでた・・・・。

そこには体長１０メートルはあろうかと言う巨大な『龍』としか形容の仕様の無い者が存在した・・・。

尚矢「おおっと・・・・でっかいなぁ・・・・・これはこれは予想外・・・・。」

討魔「でももう戻れないぞ？　怖くなったなら端で見ててもいいぞ？」

尚矢「ははっ、そんな訳あらへんやろ・・・・ゾクゾクしてきたで・・・・・。」

尚矢の顔がドＳとか通り越して邪悪な顔になった・・・・。

『ほう・・・・それはハンターの目だな・・・・・。』

『貴様は私が思ってる以上にやりそうだ・・・・・。』

尚矢「さぁ、そろそろ初めよか・・・・・・・。」

『ふふ、ふはははははははは！！！！　いいだろう！！！！』

『どこからでもかかってこい！　世紀のスキルマスターよ！！！！』

7人は身構えた。

刹那、龍が炎を吐き出す・・・・。

直撃、と思われた6人の前で剣徒が土の巨大な壁を造りだし炎を防いでいた。

剣徒「先手必勝とは、ドラグーン殿・・・・中々鬼畜ですね。」

剣徒「でも、侮ってもらっては困りますよ・・・・。」

剣徒の目に、怒りの光が宿る・・・・。

壮絶な戦いが始まった・・・・・・。

第１０話　【炎の門】　～バーニングドラグーン～（後書き）

ついにきました戦闘シーン♪

あと、見直してたら討魔と剣徒の立場ミスってたｗｗｗｗ

修正済みですｗ

またすぐ１１話にとりかかります。

第１１話　【炎の門】　～決戦～

『中々やりおる・・・・。』

その瞬間、飛んできた斬激によって土の壁が引き裂かれた。

７人は散った、全員思った以上に自然と体か動いていた。

それは新たに植えつけられた感情ではなく、人間に秘められた９０％もの潜在能力がそれを実現していた。

龍が巨大な火球を放つ・・・。

１人１人に向かって追尾する火球は当たる寸前に掻き消えた・・・。

【エアブレイド】

討魔の風のスキル・・・。

それは龍に向かっても同時に放たれていた・・・・。

『小ざかしい・・・・・。』

龍は巨大な腕を虫を払うように振った・・・。

それだけで討魔の【エアブレイド】は掻き消える・・・・。

討魔「やはり下級スキルでは効かんな・・・・。」

討魔「ならこれはどうだ！！！」

【ムーンライト＝エアブレイド】

２属石スキルマスターだからこそ使える、チェインスキルである。

三日月の形をした淡い光を放つ風の刃がすさまじい速度で龍の腕を切り裂く・・・。

『っく・・・・私がこんなにも早く血を流す事になるとは・・・。』

『ふふふ・・・・・これからが本番だぞ？　若造共ぉ！！！！』

剣徒「結構いらいらしてますね・・・・。」

尚矢「なんや小物臭がするなぁ～・・・・。」

真癒「油断しちゃだめ！！！　来るわ！！！」

巨大な炎の刃が討魔目掛けて飛んでくる、咄嗟に回避行動を取るが避けきれない・・・。

ズバン！！！

討魔の肩を激痛と熱が襲う・・・。

討魔「ぐあぁっ！！！　クソ・・・・流石に舐めすぎたか・・・・・。」

負傷した討魔を逃すまいと次から次へと炎の刃が襲いかかる・・・・

。

その瞬間、氷の刃が飛び。炎の刃を消し去った・・・。

【オニキス＝アイシクル】

夜雲の氷属性を得意とするスキルであった。

直後、水晶でできた槍のような物が四方八方から龍を射抜いた・・・。

【クリスタル＝バニッシャー】

尚矢の聖属性のスキルである。

しかしそれほど深手は与えなかったようだ。

龍はその槍を掴み、７人に投げつける・・・・。

そのような互角の攻防が３０分以上続いて行った・・・・。

７人「はぁ・・・・はぁ・・・・。」

『なんだ？　もう終わりか？』

『私はまだまだ戦えるぞ・・・・。』

『そちらが手詰まりならいまから楽にしてやろう・・・・・。』

そういって倒れ込んで体に限界の来た７人に向かって炎を吐き出し

た・・・・・。

刹那・・・・・。

その炎は突然掻き消えた。

『なんだ？　まだスキルを使えるものがいたとはな・・・・・。』

『まぁ、いまのが最後のあがきだろう・・・・・。』

その瞬間、龍に巨大な漆黒の剣が刺さる。

『ぐっ・・・・・・。　なんだこの力は・・・・・・。』

『いままでのスキルとは威力が違いすぎる・・・・・。』

守武「お遊びはここまでだよ・・・・・。　バーニングドラグーン・・・・。」

そこに立っていたのは守武であった。

尚矢「守・・・武・・・・・？　お前なんでそんなに体力が・・・・・・。」

守武「黙って見ておれ・・・・・。　これからこいつを八つ裂きにするところだ・・・・・。」

真癒「八つ裂きって・・・・・あたなが八つ裂きになるわ！！」

守武「うるさい！　黙っていろ！！！」

真癒「ぅ・・・・・。」

『なんだ？　仲間割れか？』

オプスキュリア「違う、俺は守武ではない・・・・。　我が名はオプスキュリア・・・・・。」

『闇・・・・・か。』

オプスキュリア「貴様にはもう話す事はない、おとなしく死ね。」

直後、何十本もの黒い鎖が龍を縛り上げる・・・・。

『なにを・・・・こざかしい・・・・・。』

龍が力を込める・・・・。

しかし何も起こらない・・・・。

『なぜだ！？　なぜ力が入らぬ！！！』

オプスキュリア「だから喋るなっつってんだろ？」

守武、もといオプスキュリアが漆黒の槍を放つ・・・・・。

漆黒の槍は龍の喉元深くを貫き、龍は大きな鳴き声を出す・・・・・。

オプスキュリア「だからうるせえって。」

漆黒の槍が４本、龍の腕と足を壁に縫い付けた・・・・。

オプスキュリア「気分はどうだ？　さぁ、あがいてみせろよぉ！！！　フハハハハハハハハ！！！！！！！」

何百本という漆黒の槍が、龍の全身を赤き血で染め上げた。

龍はついに動かなくなり、守武も糸が切れたようにその場に倒れこんだ・・・。

他の６人は既に体力の限界で気絶していた・・・。

第１１話　【炎の門】　～決戦～（後書き）

戦闘シーンって難しい♪

でもまぁ、次も頑張ってかきます！

第12話　その後

守武達は目覚めると7人ともベッドで眠っていた、みんな包帯を巻かれたりしている。

守武「んんっ・・・・ここは・・・・・。」

チェスター「お！　目覚めたか、ったく丸一日寝てやがったぞお前ら！」

尚矢「チェスターはん・・・・なんでわいらここに？　ってかここどこや？」

チェスター「ここは兵舎だよ、門の近くの茂みにある駐屯所だ。」

尚矢「そおかいな・・・・ほなチェスターはんがここまで？」

チェスター「そうだ、スキルを使ってここまで飛ばしただけだがな。」

尚矢「そんなこともできんのかいな・・・・。　って龍はどうなったんや！？　ってかわいら生きてるで！！！」

チェスター「なに？　貴様らが龍を倒したんじゃないのか？」

剣徒「いえ、覚えていません、途中まで必死の攻防が続きましたがさすがにこちらが手詰まりで・・・・。」

チェスター「気づいたら意識を失ってたってわけか・・・・。」

チェスター「確かにスキルは大量の精神力を消費する、気絶などまれにあるだろう。」

チェスター「しかし私が駆けつけた頃には龍は既に死んでいたぞ？」

尚矢「死んでいた！？　一体だれや！？」

しかし7人の誰もなぜ龍が死んだかわからなかった。

尚矢「せや！！　守武！！　お前最後めちゃくちゃ強なかったか！？」

守武「え？　なんだよ、俺はずっと気絶してたよ・・・・。」

真癒「いえ、あれは間違いなく守武だったわよ！？　漆黒の大きな剣を投げていた・・・・。」

守武「覚えてないって・・・・。」

チェスター「ふむ、お前達は2属石だからなぁ・・・・自我にない新たな感情、第二の感情とかが存在するのかもな。」

チェスター「まぁ、あくまで仮説だが。　とりあえず今日は一日休んで、明日は教官殿のところへ帰るといい、報告もあるだろう。」

チェスター「ま、異例ではあるが【炎の門】の試練は合格だ！　おめでとう！」

7名やどうやら試練に合格したようだ。

7名はなにがなんだかわからないまま、その日を過ごし、翌日教官殿の待つ訓練所に帰っていった。

～バーニング・ドラグーン～

～又の名を不死龍～

～【炎の門】を守護する者～

～もしその命燃えつきしとき～

～新たな幼龍となり3日で元の姿を取り戻さん～

教官殿「これがバーニング・ドラグーンの言い伝えだ。」

教官殿「もし貴様らが本当に殺したと言うのであればいまごろ中型の龍くらいまでになっているころだろう。」

尚矢「それで？　何回も生き返るから試練に利用してるっちゅーことですかいな・・・・。」

教官殿「それは違う。　まずやつの試練を乗り越えたものなどいままでに存在しない。」

「「「「「「「はい？」」」」」」」

教官殿「いや、普通はスキルを使い倒して気絶するまでまって、そのあと回収して、どれだけ戦ったかをあいつに聞いて判断するのだがな。」

尚矢「あいつとは？」

教官殿「決まっておろう。　バーニングドラグーンだ。」

尚矢「グルかいな！！！！！」

教官殿「フフッ」

尚矢「ふふちゃうわ教官殿！！！　わいらがどんだけ死ぬ思いして戦ったか・・・・。」

教官殿「ああ、その件だが明日じっくり聞こう、今日は長旅で疲れただろう。」

教官殿「飯を食って、部屋に戻って休むといい。」

そう言われ7人は自分達の部屋に帰っていった。

～　開闘の章　終　～

第１２話　その後（後書き）

やっと一章おわったあああ

次から第二章をお送りします☆

第1話　第二の試練

あれから1週間がたった。

7人はあの日疲れの余りさっさと風呂に入り夕食を取って床に就いた。

あれから1週間、教官殿に次の試練の内容を聞いたり、【炎の門】の中での出来事などを話した。

たっぷり休暇を取り、実戦経験も積み、準備を整えた7人は訓練所から南、徒歩で約3日のところにある【水の門】を目指していた。

それぞれ試練の門は炎、水、土、風と東西南北に分かれており、訓練所から、北に炎、南に水、東に風、西に土という具合である。

試練は全てが戦闘ではないらしい。　教官殿によれば・・・。

～炎は戦を司りし門～

～水は癒しを司りし門～

～風は知恵を司りし門～

～土は感情を司りし門～

～最後の試練は全ての洗礼を受けし者にのみ与えられん～

だそうなのだ。　以上、守武心のナレーション。

尚矢「討魔～今日で3日目やけどあとどれくらいや??」

討魔「うむ、それほど遠くは無いようだ。」

真癒「それほどってどれくらいなの?」

討魔「あと15分程度というところだ。」

優菜「もう私足が棒ですよぉ～・・・・。」

剣徒「ま、あと少しですから、頑張ってください。」

討魔の言うとおり15分程度歩くと大きな滝が見えてきた。

教官殿に言われ7人は川に沿って歩いてきたのだ。

真癒「わぁ～滝だ!」

尚矢「でかっ!!!　エンジェルの滝より高いんちゃうか!?」

エンジェルの滝は地球で一番落差の大きい滝だが、それよりも遥かに高く、水量も尋常ではなかった。

尚矢「で?　門はどこにあんねん?」

討魔「うむ・・・・見る限りあの滝の奥に大きな洞窟があるようだ。」

優菜「あの滝を突っ切るんですか・・・・?」

討魔「それ以外なかろう。」

尚矢「明らかに深いやろ！！！　しかも水量尋常やないで！？　ちょっとでも触れたら水の中でもみくちゃやで！！」

真癒「まぁそうよね。　でも私達スキルマスターだからなんかやり方があるんじゃない？」

剣徒「確かに、ただ突っ切るだけでは入れない設定でしょう。」

尚矢「とりあえず滝の正面に行ってみよか！　また龍が話しかけてくれるかも知れんしな！」

７人は滝の正面まで行った。　いろいろ並んで見たりしたがどこぞのＲＰＧのようには行かないようだ。

すると真癒がなにかに気づいたように滝に向かって進み始めた。

真癒「聴こえる・・・・・歌声が・・・・・。」

尚矢「なんや？　どうかしたか？　真癒？？」

真癒「聴こえるでしょ？　綺麗な歌声・・・・・聴こえないの？」

尚矢「いや、なんも聴こえへんで？？　空耳ちゃうんか？」

討魔「いや、まて、真癒は水系統のスキルマスター、治癒の門だ、なにか関係してるのかも知れん。」

～奏でよ・・・・水流の歌・・・・・・～

～目覚めよ・・・・・治癒の力・・・・・～

～我が試練・・・・・治癒の力にて顕現せん・・・・・～

～治癒の門よ・・・・・滝の水に触れよ・・・・・～

そして真癒にも聴こえなくなった。

真癒は決心したように滝に向かって突き進む。

尚矢「待て！　危ないで！？　滝に巻き込まれる！！！」

しかしその様子は無かった。

滝が真癒を求めるかのように、水が避ける・・・。

やがて巨大な水柱が巻き起こり真癒を飲み込んだ・・・・。

尚矢「真癒！！！！！！」

６人は立ち尽くすしかなかった。

刹那・・・。

その水柱は光り輝き弾け飛んだ・・・・。

そこにはいつも通りの真癒が立っていた。

しかしその雰囲気は少し大人びたものに見える・・・・・。

尚矢「だ・・・・大丈夫か？　真癒？」

ウンディーネ「大丈夫・・・でも私は真癒じゃない・・・・・。　私の名前は・・・・。　ウンディーネ・・・・・。」

討魔「水の精霊の名か・・・・。」

尚矢「これは守武ん時と同じちゃうか？　守武も人が変わった様に様子がおかしくなったで・・・・。」

ウンディーネ「さぁ・・・・水の試練へ行きましょう・・・・。」

パチン、と真癒が指を鳴らすと6人が立っていた水際の水が避け、滝も二つに割れた・・・・。

そこには1本の道が出来ていた。　そして割れた滝の先に、巨大な蒼き門が見えた・・・・。

第1話　第二の試練（後書き）

第二章更新！

皆さんの感想を聞きたい＞＜

面白と思ってもらえてるか心配ですw

評価でもいいので気が向いたらお願いします＞＜

誤字、脱字等ございましたらそちらもお願いします。

第2話　【水の門】　～第一回廊～

水の道を進み、門の前に立つと懐かしい感覚に襲われた。

『炎の試練を乗り越えしスキルマスターよ・・・・・。』

『我が同士たる治癒のウンディーネよ・・・・・。』

『水の試練を乗り越え我が元へたどり着け・・・・・。』

すると門が静かに開き始めた・・・・。

水が流れるかのように、するすると開く。

7人は門の中に入った。

そこはさながら氷の宮殿であった、壁が全て透明な水晶のようなもので出来ており、それらが反射してキラキラと光っている。

とても幻想的な空間だった。

『これより水の試練を開始する・・・・・。』

『心してかかるがよい・・・・・。』

ウンディーネ「さぁ、行きましょう・・・・・。」

尚矢「水の試練って、なにをすればいいんや!?」

ウンディーネ「ここには水系統のスキルを操る魔物が多く出てきます、それらを倒しながら水の回廊を進めとのことです。」

討魔「その物言いはなんでも知っている感じだな、ウンディーネよ。」

ウンディーネ「いえ、全ては分かりかねます。　分かるのは魔物と長い道のりのみ。」

要するにダンジョンであった。

剣徒「とりあえずすすみますか。」

7人は水の回廊を歩き始めた。

初めは1本道で、魔物も出てこなかった。

すると20メートルほど先に扉が見えた。

剣徒「あの扉は？」

ウンディーネ「第二の回廊への通路でしょう。　ここでこのフロアを守る守護魔獣が現れるはずです、気をつけてください。」

尚矢「守護魔獣・・・・魔物のワンランク上ってことかいな・・・・これは気合いれなあかんな！」

門の5メートルほど手前まで来たときに地響きがした、それと同時に守護魔獣が現れた。

ウンディーネ「来ます！！！」

ぺちゃっ・・・・・・。

7人「・・・・・ぺちゃ？」

地響きの後にしてはスケールの小さい音がした。

ウンディーネ「これが初めの守護魔獣のようです、まだ第一フロアなのでそれほどレベルも高くありません。」

そこには少しゼリー状の水の塊がうごめいていた。

尚矢「あれは・・・・・敵なんかいな？？」

ウンディーネ「はい、守護魔獣です。」

尚矢「じゃあ、攻撃してみていい？　襲ってくる気配ないけど・・・・。」

ウンディーネ「どうぞ。」

尚矢は十字架の形をした水晶の槍を造りだし投げた。

【クリスタル＝バニッシュ】

刺さる、直後、尚矢のお腹辺りに水晶の矢が突き刺さり血が吹き出た・・・。

尚矢「ぐあっ・・・・・・なんで・・・・・や・・・・・。」

ウンディーネが【アクアヒーリング】を使って尚矢の傷はすぐに消えた。

ウンディーネ「どうやら特殊な体質のようです。」

優菜が突然出てきて何かスキルと唱え始めた。

【スペクタクル＝アズライト】

優菜「分かりました、やつは下級の水属性魔獣ですが、弱点属性以外は受けた攻撃の対象を術者に入れ替える能力があるようです。」

尚矢「優菜・・・・お前守武より空気かと思ってたわ・・・・。」

優菜「ひどいです・・・・放置プレイなんて・・・・／／／」

剣徒「さて、弱点属性となると電気系統の攻撃じゃですか？」

尚矢「そやな、誰か電気系使われへんの？　討魔は風属性やから使えるんちゃうん？」

討魔「そうだな。試してみよう。」

討魔がスキルを詠唱し始める。・・・・完成。

【ルナ＝ライトニング】

眩い光の白き稲妻が魔獣を貫いた。

魔獣はその攻撃で消え去った。

そこに小さな宝箱が現れた。

尚矢「お！　宝箱やぁん！　いいな！　ファンタジーやな！」

宝箱を開けると小さな鍵が入っていた。　その奥の扉には小さな鍵穴が付いていた。

討魔「フロアを守る魔獣を倒して鍵を手に入れて先に進む単純なシステムか。」

尚矢「まぁ実戦経験積めるしちょうどいい腕鳴らしやな！」

ウンディーネ「では先に進みましょう・・・。」

尚矢は手に入れた鍵を扉に差し込んだ。

するすると滑るように扉は開き、第二回廊へ向かう階段が現れた・・・。

7人はその階段を降り始めた。

第2話　【水の門】　～第一回廊～（後書き）

さあて、がんがん更新しますよお♪

お気に入り件数が2件に増えてた！！！

めっちゃうれしいいいい＞＜

毎回読んでくれてる皆様ありがとうございます＞＜

これからも頑張ります＞＜

第3話　【水の門】　～第二回廊～

階段を下りると次は分かれ道になっていた。
そこで討魔のマップを使い地図を出してみるとどうやら左には宝箱があり、右は次に進む通路のようだった。
門の中はとても明るく、視界に困ることは無かった。
尚矢「ここは宝箱とろうや！」
剣徒「しかし無用なリスクは避けるべきですよ。」
尚矢「鍵が入ってたらどうすんねん？」
討魔「それもないとは言えんな。」
ウンディーネ「なら宝箱を優先しましょう。　ただで得られるものは戦闘で役に立つかもしれませんし。」
尚矢「お、ウンディーネはんもそう思いますやろー！」
剣徒「仕方ない・・・・じゃあ行きますか・・・・。」
左の道を歩いていると前方から水の槍がもの凄いスピードで7人目掛けて飛んできた。
剣徒が即座に土の壁を造りだしその水の槍を受け止める。

水の槍は壁に当たると水しぶきとなり飛び散った。

剣徒「なんでしょう・・・敵ですかね・・・。」

ウンディーネ「どうやら宝箱を守る魔物がいるようです。」

尚矢「それなら倒すまでやな！」

討魔「そうだな、行こう。」

7人が通路を進むと少し広い場所にでた。

まるで小さな古代ローマの円形闘技場のようである。

円は半径15メートルほどもあるからり広い広場であった。

ウンディーネ「どうやらフロアボスでありながらこの門の副守護魔獣のようです。」

尚矢「ってことは宝箱無視で進んでたらここまで戻る羽目にはったってことか・・・。」

剣徒「今回は宝箱を選んで正解みたいですね・・・。」

ウンディーネ「来ます・・・・。　それもかなり強力です。」

地響きが起こり、巨大な何かが振ってきた。

『貴様らか、新たな試練の挑戦者は』

スラリとした、長身の半魚人の騎士のようだった。

『さぁ、私を倒し水龍様のところへ行って見せるがいい！！！』

激闘が始まる。

騎士の動きは早かった、目にも止まらぬ速さで手に持った三叉の矛で討魔を突き刺したかと思うと矛の先が爆発し討魔は吹っ飛んだ。

尚矢「討魔！！！　大丈夫か！？　てめ・・・・ぇ・・・・・」

ズバン！！！　尚矢が吹っ飛ぶ。

『2属石など、スキルを使わせなければこの程度か・・・・・。』

次に騎士は真癒を狙った。

やはり目にも止まらぬ速さで距離を詰め、矛を真癒のはらわたを突き刺す。

しかしその瞬間騎士の動きが止まる・・・・。

ウンディーネ「私にも手を掛けるとは・・・・貴様も偉くなったものだなガラハッド卿。」

『その声は・・・・ウ・・・・・ウンディーネ様・・・・・？』

『なぜ・・・・あなたがここに・・・・・。』

ウンディーネ「私は彼女に憑依している。　彼らは選ばれし存在、

後ろにいるあの男、すでに一度オプスキュリアが顕現している。」

『闇の精霊が・・・・・。』

ウンディーネ「ガラハッド卿・・・・この場を通してはくれんか・・・・。」

『それは・・・・出来ません・・・・・。』

『そうしたいのは山々です・・・・しかし今は水龍様の配下・・・・・。』

『騎士は与えられた命を全うするのみ!!!』

『しかしあなたを殺すことなど出来ませぬ・・・・ここで私を殺してください・・・・・。』

ウンディーネ「ガラハッド卿・・・・貴様いつからそんな弱い男になった・・・・・。」

ガラハッドは気づいた。

さっきこの女を刺した筈の矛が自分のはらわたに刺さっていることに・・・・・。

ウンディーネ「水は妖美なもの・・・・私に矛を刺そうなど自分を刺すような物だろう？　ガラハッド卿・・・・・。」

ガラハッドはその場に静かに倒れた。

ウンディーネは【アクアヒーリング】を使い討魔と尚矢の傷を治してやった。

ウンディーネ「立て、もう傷は癒えている。　さっさと水龍の元へゆくぞ。」

尚矢「ウンディーネ・・・・お前も守武と同等か・・・・・。」

ウンディーネ「ほう、貴様は守武のもう一つの人格を見たか。」

ウンディーネ「この状態はそのうち貴様らにもくる、そして手を取り合う時もな。」

ウンディーネ「それはこの先の長い旅で知っていけばいいことだ。」

尚矢「自分の知らない人格がそれぞれに宿ってるってことか？」

討魔「それはいつ顕現するか分からないのか？」

ウンディーネ「わからんだろう、顕現している間は自分でもなにが起こってるかもわからず、その間の記憶も無いだろう。」

尚矢「わかった。　まだ顕現もしてないからようわからんけど、今は先に進むことを考えよう・・・・。」

他の４人はウンディーネの強さを目の当たりにし、言葉を失って立ち尽くすのみであった。

宝箱を開くと、少し大きめの鍵が入っていた、来た道を戻り、右の道を進んだ。

２分ほど進むとすぐに大きな扉を見つけた。
その扉に鍵を差し込むと静かに扉は消えた。
階段の両端のたいまつに灯がともり、階段を照らした・・・・。
７人は水龍の元へ歩き出した・・・・。

第3話　【水の門】　～第二回廊～（後書き）

今日は自分の小説に始めて感想がついた感想記念日なのです♪

初めて自分の作品が評価された日はとても幸せです・・・・。

この喜びを糧にまた書くことができる。

そしてその感想で治すべき点も見つかり、さらに作品の質の向上になりました＞＜

皆さんも、思っていることや感じたことを感想に乗せてくれるととても助かります＞＜

これからもよろしくおねがいします！！！

第4話　【水の門】　～最深部～

とても長い階段であった。

もう降り始めて5分ほども経つ。

さらに3分ほど降りると下のほうにほのかな明かりが見えた。

尚矢「やっとゴールが見えたぁ～・・・。　ったくどんだけ長い階段やねん！！！」

剣徒「確かに長すぎますね・・・。」

ウンディーネ「この階段を下りたら水龍がいるはず。」

尚矢「水の試練って、また龍と戦うことになるんか？」

ウンディーネ「いえ、水龍は戦いを望まない。　我々の戦の試練はガラハッド卿までだ。」

尚矢「じゃあなにすんねん？」

ウンディーネ「水龍に水の洗礼をしてもらう。　たったそれだけだ。」

剣徒「試練にもいろいろあるんですね・・・。」

ウンディーネ「この世界は腕っ節だけで生きてゆけるほど甘くはないと言うことだ。」

そうこう話しているうちに階段を抜けた。
そこは大きな廊下だった。　５０メートルほど先に巨大な扉がある。
バーニングドラグーンの時と同様、大量の鎖で封じ込められている。
７人は門の前に立った・・・・。
『来たか・・・・。』
『懐かしい友もいるようだな・・・・。』
『まぁ入るがいい。　話は中でゆっくりと・・・・。』
澄んだ、透き通るような声だった。
扉の鎖が解き放たれ、扉が開いた・・・・。
バーニングドラグーンの時の用に暗くは無く、中は水晶の宮殿のような広い空間だった。
その先に、とても綺麗な水色の肌を持った龍が鎮座していた・・・。
『ようこそ【水の門】へ・・・・。』
『我が名はこの門を守りし龍、アクアラグーン』
『この門を守護するものなり。』

ウンディーネ「久しいな、アクアラグーン。」

『ウンディーネか。　そいつらが今世紀の選ばれし者達か？』

ウンディーネ「ああそうだ。　しかし異世界から飛ばされたらしい。」

『筋はいいのか？』

ウンディーネ「ああ、こちらの同世代の者が契約してもこうすぐにはスキルを使いこなせん。」

『バーニングドラグーンがやられたと聞いたが。』

ウンディーネ「私が顕現する前にオプスキュリアが顕現している・・・・。」

『ほう・・・奴か。　性懲りも無くこの世界を牛耳ろうと言うのか。』

ウンディーネ「そうでも無いらしい。　珍しく契約するつもりらしい。」

『どういう風の吹き回しだ？　煉獄で聖人の垢でも飲まされたか。』

ウンディーネ「まあ何かたくらんでいるとしても他の5人もいずれ顕現する・・・・。」

ウンディーネ「いくら奴と言えど顕現した6人相手にはさすがに無

理がありすぎる。」

『そうだな。　では本題に移るとしようか・・・・。』

『さっさと詔をしろ。　私とて貴様らの相手を長々するほど暇ではないのだ。』

ウンディーネ「よく言うわ・・・。　相変わらずだな水龍よ・・・。」

そういってウンディーネは跪く。

～我ら第一の試練を乗り越え第二の試練を受けし者なり～

～いま守護者たる水龍の洗礼を受けるべくここに参った～

～水龍よ、その溢れんばかりの力を持って我らに水の洗礼を～

水龍の口からキラキラ光る息が吐き出される・・・。

その息が7人の体を取り巻く・・・。

尚矢「なんやこれ・・・すごく・・・気持ちええで・・・。」

剣徒「心が洗われるようです・・・。」

優菜「とっても気持ちいいですぅ～／／／」

討魔「ほう・・・これは・・・。」

夜雲「・・・・・・。」

『さぁ、これで洗礼は終わりだ。』

『さっさと次の試練へ向かうがよ・・・・・ん？』

ウンディーネ「なんだ？　どうかしたのか水龍よ。」

『やつはなんだ・・・・この気配・・・・まさか・・・・・。』

みると守武の様子がおかしい。

なにやらぶつぶつ呟いているように見える・・・。

守武「・・・ぜぇ・・・・・。」

尚矢「なんや？　どうかしたんか守武？？」

守武「うぜぇ・・・うぜぇうぜぇうぜぇうぜぇうぜぇってんだよおおぉぉぉぉ！！！！！」

守武「俺は洗礼とかそういうのが大嫌いなんだよぉ！！！　殺す気か！？　水龍うううううう！！！」

『貴様・・・・オプスキュリアか・・・・・。』

ウンディーネ「さすがに一度顕現したら本体の感じたことがそのまま感じるようだな。」

剣徒「これが・・・守武さん・・・？」

優菜「怖いですぅ・・・。」

夜雲「・・・・・・・邪悪。」

尚矢「おい守武！！！　正気を取り戻せや！！！」

『何が狙いだ？　オプスキュリア・・・・。　その男に顕現して何とする・・・・？』

オプスキュリア「この男は自分が一番であることを望んだ・・・・。
　我はそれに賛同する。」

オプスキュリア「だから俺はこの男を乗っ取り世界を滅亡へ導くのだ！！！」

ウンディーネ「ほらな？　水龍よ、やつはなにも懲りていなかった。」

オプスキュリア「黙って死ねやあああぁぁぁぁ！！！！！」

オプスキュリアが漆黒の槍をウンディーネと水龍に向かって機関銃のように放つ・・・・。

ウンディーネ「小ざかしい・・・・・。」

ウンディーネは水龍と自分の周りに水の結界を張りその結界に触れた漆黒の槍は消えていく。

ウンディーネはすかさず攻撃に転じた。

【アクア＝カットラス】水の剣を造り出し守武に切り掛かった。

オプスキュリア「私に接近戦？　いい度胸だ・・・・。」

水の剣から激しい剣戟が繰り出される。

全ては命中、しかし守武の体は煙のようになるばかりでダメージは見受けられない。

ウンディーネは気づいた、自分は包囲されたことに・・・。

オプスキュリアが自分の周りに８人立っていた。

それぞれ漆黒の双剣を持っていた。

ウンディーネ「っち。　まずいことになった。　しかし貴様の弱点は知っている！！！」

ウンディーネは水の波動を放った。　この波動でオプスキュリア本体がどれか体で感じることが出来る。

ウンディーネ「そこだぁ！！！」

一体のオプスキュリアに水の剣を飛ばした。

しかし・・・・。

そこにあったのは偽者だった。

オプスキュリア「私が煉獄に落とされて今の今まで大人しくしていたと思うのか？」

オプスキュリア「甘い！！！　甘いぞウンディイネェエ！！！　これだから三下の精霊は雑魚なんだよおぉぉ！！！」

オプスキュリア「いいだろう・・・・死ね・・・・・。」

第４話　【水の門】　～最深部～（後書き）

怒涛の展開ですな♪

自分で書いてて次の話を考えるのがとても楽しい今日この頃ですｗｗ

また次も頑張ってかきまあす！

第5話　【水の門】　～異変～

～オブシディアン＝ブラッドストーン～

～【幻想奇襲・シャドウスレイヤー】～

目にも止まらぬ速さでウンディーネに斬激が襲い掛かる。

ウンディーネ「っちぃ・・・！！！」

【アクアオーラ】

体を強力な水のオーラでダメージを軽減する・・・。

しかしそれでも斬激の威力は桁違いでウンディーネから鮮血が飛び散る。

オプスキュリア「ヒャハハハハ！！！　どうだウンディーネ！！！」

オプスキュリア「俺は煉獄で変わった！！！　あの日と同じ戦い方で勝てると思ってる方がおかしいんだよ！！！」

斬激が止む、ウンディーネはすかさず【アクアヒール】で自分の傷を回復し始める。

オプスキュリア「回復の時間なんて与えねえよおおぉぉぉ！！！！」

数百はあるかと思われる漆黒の槍がオプスキュリアの周りに現れる・

・・・。

『なんと展開が速く邪悪な力・・・・・。』

『まずい！！！　ウンディーネ！！！　避けろ！！！！』

槍は放たれた。

回避を取るウンディーネをホーミングし当たる！！！と思った刹那。

突如漆黒の槍が掻き消えた・・・・・。

オプスキュリア「！？！？！？　なんだ！？　なにが起こった！？
うぉ・・・・・。」

オプスキュリア「・・・・・・い・・・・・・お・・・・い・・・・・。」

『体の主か・・・・。』

守武「おい・・・・・お前俺の体でなにしてやがる・・・・・・。」

オプスキュリア「貴様か・・・・・。　俺は貴様の夢を叶えるために
貴様の体に顕現してやってるんだ。　おとなしくしてろ。」

守武「あ？　なに調子こいてんだ？　俺の夢？　お前なんかがしっ
てる訳ねえだろ。　お前がひっこんでろ。」

オプスキュリア「貴様の夢はこの世界の頂点に立ち牛耳ることだろ
う？　なにが違う。」

守武「それは俺の夢をお前がいい様に解釈しただけだろう。　むしろ自分の野望を人のからだで勝手に遂行してんじゃねえよ。」

オプスキュリア「力もねえガキが調子こいたこと言ってんじゃねぇ！！！　ぶっ殺すぞぉ！！！」

守武「人の体借りねえと姿も見せられねえ老いぼれがナメた口聞いてんじゃねえ！！！」

守武の怒りは頂点に達したようだ。

『そうだ、このままこの少年に奴と契約させるってのはどうだ？』

ウンディーネ「ほう、それはいい。」

ウンディーネ「守武、そいつを封じ込め、無理やり契約しろ。　そうすれば嫌でも従順になる。」

守武「契約？　それってどうすりいいのよ！！」

ウンディーネ「そいつに契約するように言え。」

守武「おい！　お前俺と契約しろ！！！」

オプスキュリア「あ？　誰がてめえ見たいなガキと契約するかよ。」

守武「なぁ、ウンディーネさんよ、こんなこと言ってますが？」

ウンディーネ「契約しないなら体から追い出してやれ、いまのそいつはお前の体がなければ存在もままならぬ。」

守武「てめぇ、契約しないなら俺の体から追い出すぞ？」

オプスキュリア「・・・・・っけ、やってみやがれ。」

守武「ウンディーネさん、どうやって追い出せばいいんですか？」

ウンディーネ「じゃあ私が引きずりだしてやろう。」

そういって魔方陣を描き始める。

その瞬間、守武の頭の中にオプスキュリアの明らかな不安が流れ込んできた。

それと同時にそのオプスキュリアの持つ知識や、その力が流れ込んでくる。

守武は無意識に空に陣を描いていた。　そして・・・。

～我に潜みし闇の精霊よ～

～いまこそ我と契約する時～

～その偉大なる力を我に共有したまえ～

守武の体が光り始める。

そして光が止む。　そこにはいつも通りの守武が立っていた。

守武「オプスキュリアは完全に俺の一部になったみたいだ・・・・。

」

ウンディーネ「精霊とは相手が弱ったときや不安を見せたときに一番契約しやすい。」

『あえてその状態を作り出せば勝手に体が動くものよ。』

守武「あえてそれを狙って・・・。」

守武「しかし・・・もの凄い力だ・・・。　体中に奴の力が巡ってる・・・。」

ウンディーネ「これからお前は奴の力を自在に操れる。　実力派は霊クラス、要するにその辺にいるスキルマスターとは桁違いと言うことだ。」

ウンディーネ「間違っても、その力に溺れないことだ。」

守武「そうなのか・・・・。　力に飲まれない用に用心する。」

その後守武だけもう一度水の洗礼を受け、7人は【水の門】を後にした・・・。

第5話　【水の門】　～異変～（後書き）

さぁ、守武が初めの契約をしましたね！

次の話悩みますががんばります！

第6話　精霊と実力の模擬戦

3日かけて訓練所へ帰ってきた7人はへとへとであった。

しかし休む間も無く7人は教官殿に呼び出された。

教官殿「よくぞ帰った諸君、水の試練はどうだった？」

尚矢「水の試練自体は大したこと無かったけど守武が大問題やったで！！！」

剣徒「よくいいますよ尚矢さん・・・。　ガラハッド卿に討魔さんと仲良くぶっ飛ばされてたくせに・・・。」

討魔「言うな。　殺すぞ剣徒。」

剣徒「あはは！　冗談ですよ！　冗談！」

剣徒「ウンディーネさんがいなかったら正直かなりやばかったですよ。」

尚矢「そやなぁ～確かにウンディーネはんがおらんかったらわいらあそこで全滅やったなぁ・・・。」

ウンディーネと言う言葉に教官殿が反応する。

教官殿「ウンディーネ？　なぜお前達の口からこう毎度のように精霊の名がでるのだ？」

尚矢「前回の守武がそやったように今回は真癒にウンディーネが顕現してたんや、まぁ守武はすでにオプスキュリア同然やけど。」

教官殿「オプスキュリア同然！？　まさか契約したのか！？」

守武「はい、契約しましたよ。」

教官殿「フフフ、人生で一度出会えることが出来れば幸運と言われる精霊と契約した男か！！！」

教官殿「久しぶりにゾクゾクしてきたぞ！！！　おい、守武私と勝負しろ。」

尚矢「な！！！　いくら教官殿かて精霊の力を自在に操れる2属石なんて無茶でっせ！！！」

教官殿「いいのだ！　死をかけた戦いではない！　これは模擬戦だ、かなり実戦に近いな。」

教官殿「それに私をあまり甘くみるなよ？」

その一言で尚矢は今の自分と教官殿の力量の差を気迫だけで悟った。

教官殿「それに守武、契約してからまだ一度も戦闘してないんであろう？　物は試しだ、やってみようじゃないか。」

守武「オプスキュリア、どうする？」

オプスキュリア「いいねぇ！！！　あの女かなりやるぜい、俺の力が無かったらお前ら7人がかりでも5分もありゃあ締め上げられる

ほどだ！！！」

守武「そんなに！？　じゃあやっとくに損は無さそうだな。」

オプスキュリア「ああ、より強力な者との実戦がスキルマスターをより強くする。」

教官殿「ＯＫのようだな。　ならば闘技場へ移動しよう。」

闘技場は守武達が契約した場所から北の広い広場にある円形闘技場である。

教官室を出て８人は闘技場へ向かった。

闘技場についた教官殿は尚矢に審判を命じた、模擬戦の形式などを簡単に教えられたようだ。

尚矢「で、ではこれより守武ＶＳ教官殿の模擬試合を始めます！」

尚矢「互いに、礼！！！」

教官殿と守武が礼をしあう。

そして名乗る。

守武「我は下級三隊　第九階級　エンジェルス所属　オブシディアン＝ブラッドストーン　退魔の門　であり闇の精霊の契約者、守武！」

教官殿「我は中級三隊　第四階級　ドミニオンズ所属　第１位　カ

ーネリアン　正義の門　名をフローレンス！」

「「「「「「「ドミニオンズ！？！？！？」」」」」」」

第6話　精霊と実力の模擬戦（後書き）

遅れてすいませんw

余りにたくさん更新しまくったせいで完全にもういいだろみたいな感じになってましたwww

でも読んでくれる皆様がいるので更新します＞＜

これからもよろしく！

第7話　力と経験

尚矢「ドミニオンズの第1位やて！？」

教官殿「なんだ？　私の正式な階級を聞くのは初めてだったか・・・。」

教官殿「しかしその反応はドミニオンズが何かを知った上での反応のようだな。　誰に聞いた？」

守武「【炎の門】のチェスターさんです、ただそのときはこの世界のスキルマスターの階級制度のことについて教えてもらっただけです。」

教官殿「チェスターか・・・・ッフ、まあいい、さっさと初めようじゃないか。」

守武が少し身構える。

教官殿「来ないならこっちから行くぞぉ！！！　小童がぁ！！！！！」

【ヘルファイア】炎の一番基礎のスキルが守武目掛けて飛ぶ・・・。

守武「小手調べってとこですか？　教官殿！！！」

守武が軽く回避しようとした・・・。

が、その小さな炎の球は恐ろしいことに避けようとした守武恐ろしいスピードでを追尾した。

守武「っく！！！　【ヘルプロミネンス】」

守武の放った闇の炎が教官殿の火球と衝突し爆発する・・・。

教官殿「技など使えるだけでは意味が無い、どこまでその力を自在に操ることが出来るか、それだけだ。」

守武「確かに・・・、下級スキルと思い油断しました・・・。　オプスキュリアの力が無かったらあぶなかったな・・・。」

オプスキュリア「しっかりしてくれよ相棒！！！　いまから俺が言うとおりに動いてみろ、物は試しだ、いまのお前の力だけじゃ絶対勝てねえ。」

守武「わかった、いくぞ！！！」

【ダーク・ネット】

闇の網が教官殿の周りを取り囲む。

【ダーク・イノセンス】

漆黒の巨大な刃が四方八方から網に包囲される教官殿目掛けて飛ぶ・・・。

教官殿「小ざかしい！！！」

【鏡花炎・バーニングフィールド】

網の中から巨大な火柱が巻き起こる、教官殿目掛けて飛んでいた刃は網もろとも消え去り、同時に戦いの終焉をもたらした。

守武「グフッ・・・・・。」

教官殿は3つのスキルを同時に発動していた。

それは属に言う無心スキルという方法であり、一つの技を掛ける際に最適なコンボを自然と発動させる方法である。

火柱が巻き起こり守武の目暗ましを行い、同時に攻撃を防御。

その際発動した残り二つのスキルは、【バーニングランス】・【ダーク・ネット】

結果守武は動きを拘束され、大量の炎の槍を全身に浴びることになった。

教官殿「私が一つの属性しか使えないとでも思ったか？　その力がお前を麻痺させる、今のうちに力を使いこなせるようになるんだな。」

【ヒールフィールド】

教官殿は守武を治癒のオーラで包んだ、すぐに守武の傷は塞がり、立ち上がる・・・。

守武「ここまでとは・・・まさかちょっと前に自分が使ったスキルに襲われるとは思いもよりませんでしたよ。」

教官殿「属石とは自分が最も得意とする属性を現す、その他の属性が使えないというわけでわない。」

教官殿「さぁ、ジャッジを。」

尚矢があわてて旗を揚げ、「勝者！！！　教官殿！！！」

教官殿「さぁ、疲れただろう、みんなで飯でも食いに行こう。」

他の６人は壮絶な戦いにただただ息を飲み、言葉を失うだけであった・・・。

第8話　目指すは【風の門】

壮絶な模擬戦のあと教官殿と7人はサロールの食堂で見た目はグロいが味はいける飯を食いながら様々な話をした。

7人が元いた世界の話や、次に行く試練の話しなど、話のバリエーションは様々であった。

8人はサロールに礼をいい、教官室に招かれた。

教官殿「さ、その辺の椅子に座っててくれ、私は少し用事がある。」

そういって教官殿は部屋を出て行った。

部屋はかなり広く超高級ホテルのスイートルームといった仕様である。

尚矢「豪勢な部屋やなー！　これにプールとかついとったらビバリーヒルズの一流ホテルやで！！！」

真癒「確かに・・・・綺麗な部屋ねー・・・・・。」

優菜「あれれぇ？　真癒さんなんか元気ないですね！」

討魔「そりゃあそうだろう、守武の時もそうだったが相当眠いんじゃないか？」

真癒「とても眠いわ・・・・・。　2秒あったら寝れる自信があるわ。」

守武「変なとこ自信もつね・・・・。」

オプスキュリア「契約していない状態で精霊が顕現すると無駄に精神力を食っちまうんだよ、さっさと契約しないと疲労がたまる一方だぜ？」

尚矢「あのなぁ～そんな簡単にもいかんやろう！！！」

などと話していると教官殿が険しい顔で戻ってきた。

尚矢「なんやなんやぁ！？　怖い顔して！」

教官殿「それがだな・・・・。」

教官殿の話をまとめるとこうである。

次の目的地は【風の門】なのだが少し問題が発生している。

それは自分達がスキルマスターになったときに教えられた『奴ら』と呼ばれる者達が【風の門】付近で怪しい動きをしているということだった。

【風の門】は幻獣【麒麟】が守護しており、知恵の試練を司っているらしい。

『奴ら』はその【麒麟】を捕獲しその膨大な風の力を手に入れようとしているらしい。

教官殿「と、いうわけだ。」

尚矢「で、どうしろと？」

教官殿はその言葉を聞いてにやにやしはじめる。

教官殿「正直、察しがついてるだろう？」

夜雲「・・・・・・・討伐。」

教官殿「大正解だ。」

教官殿「今回の任務は『奴ら』の討伐、及び【麒麟】の保護だ、万が一逃げられた場合一旦戻って来い。」

尚矢「でももし【麒麟】が『奴ら』とやらを蹴散らしたらどうなんねん？」

教官殿「まぁ、【麒麟】もそれほど簡単に捕まりなどしないだろうが『奴ら』はかなりのやり手で数も多い、多勢に無勢は分が悪いであろう。」

討魔「要するに加勢だな。」

教官殿「まぁそういうことだ、それに時間も限られている、明日の明朝出発しろ。」

「「「「「「了解！」」」」」」」

7人は部屋に戻り明日に備えて就寝した。

～水花の章　終～

第8話　目指すは【風の門】（後書き）

お久しぶりです！

最近忙しくてぜんぜん更新できませんでしたあ＞＜

申し訳ないw

またちょこちょこ更新します！

第1話　襲撃

7人は広い野道を進んでいた。

7人は朝5時過ぎに訓練所を出発し約2時間ほど歩いていた。

尚矢「討魔〜？　あとどれくらいやぁ？」

討魔「あと2〜30分と言ったところだ、しかしさっきから誰かに見られてる気がしてならないんだが。」

オプスキュリア「え？　今頃？　お前らを狙ってる奴らが3人一組でお前達を包囲してるじゃねえか。」

守武「え！？　なんでもっと早く言わないんだよ！！！」

オプスキュリア「そんなこ事とっくに気づいてると思ってたぜ！ただ錬度は高いから気配を消してるのは確かだ。」

7人は少し集中して周りを見た、それだけで7人は敵の位置を測れるほど、2つの門で成長していた。

尚矢「どうする？　どこか広い場所でやってまおか？」

剣徒「それもいいですね、敵が『奴ら』なのかそれともただの賊なのか知りませんが腕試しには持って来いでしょう。」

7人は少し開けた草原に出た。

そこで全ての方向に対処できるよう、お互いに背を向け合い、円陣を組んだ・・・・。

しばしの静寂が訪れる。

刹那、近くの岩陰、３０メートルほど先の草原、道の脇の木の中から炎弾、氷塊、烈風が飛んだ。

どれも錬度の高いスキルで7人まで届くのに3秒とかからなかった。

しかしそのスキルは7人の周りで何かにぶつかり爆発した・・・。

【エア・フィールド】

見えない盾を討魔が張り巡らしていた。

一斉に7人は攻撃が飛んできた場所へスキルを飛ばす。

烈風や炎弾、水の刃、氷の刃などが攻撃の飛んだ場所を焦土と化す・・・・。

しかしそこにはなにも存在しなかった。

尚矢「っち、どこいった!?」

オプスキュリア「上だぁ!!!　身構えろ!!!」

敵は9人、空から舞い降り、光る剣のようなものを構えている。

剣徒「考えてるひまは無さそうですよ!　来ます!!!」

9人が7人に向かって走りこんでくる、7人もスキルでそれぞれの属性の剣を造り出し、それを受けた。

真癒と優菜は両手で必死に相手の剣を受けるので精一杯であった、しかし夜雲は走りこんで来た1人を一瞬で切り捨てた。

尚矢「うおっ！？　夜雲お前何者やねん！！！」

そういいながら尚矢も1人を切り伏せる。

剣徒には2人の兵士が突っ込んできた。

「僕は小さいときから親に剣を習わされて来たんですよ！　2人なんて舐めてるとしか思えませんね！！！」

剣徒はその両手に持った日本刀の形をした剣で2人を目にも止まらぬ速さで切り伏せた。

すぐに駆け出し真癒と優菜に掛かっていた2人を切り倒す。

優菜「す・・・すごいですううう！！！」

真癒「意外な特技ね！！！」

守武「剣徒ばっかりかっこいいとこ持ってきやがって！！！　ぼ、ぼくだってええええ！！！！！」

守武がブンブン無茶苦茶に剣を降り始める。

オプスキュリア「おいおい相棒、それじゃ絶対あたらねえぜ・・・・。」

尚矢「うお！！！　危ないって！！！　守武やめんかいな！！！」

守武「そこだぁ！！！」

すると守武の剣を尚矢が避けた先に尚矢を後ろから狙っていた敵を1人切り倒す。

守武「っふ、ふふふっ危なかったな尚矢よ。」

尚矢「まぐれやろがぁ！！！」

剣徒「あと2人ですよ！！！　畳み掛けましょう！！！」

しかし残りの2人はすでに潰走していた。

オプスキュリア「気配が完全に消えてやがる、奴らジャンプポータルなんか持ってやがるのか。」

守武「ジャンプポータル？」

オプスキュリアによるとジャンプポータルとは自分が登録した位置までワープできるというすぐれものだそうだ。

尚矢「それであいつらはどっかに飛んだわけか。」

真癒「しかしてそれほど強く無かったわねえ・・・。」

剣徒「そうでもないと思う、僕達が普通のスキルマスターならきっと苦戦したはずだ。」

真癒「まぁそうかもしれないわね・・・・。」

討魔「目的地はもう少しだ、また襲われないうちにさっさと行こう。」

尚矢「せやな。　はぁ～疲れた～・・・・。」

守武「ほんとに、奴らはいったい何者だったんだ？」

尚矢「まぁ、本物の『奴ら』に会えばそれも分かるやろう。」

～同日同時刻～

??「貴様ら、なぜ2人で帰ってきた？　残りの7人はどうした・・・。」

負傷した兵士「はい、敵をエンジェルズだと侮り奇襲まで掛けたつもりでしたが感づかれ対処されました。」

負傷した兵士「それでも腕では勝てると思っていた矢先、スコットが小さな少女にぶった切られたのです・・・。」

??「それで、仲間7人がやられたのを見てすごすご帰ってきたのか？」

負傷した兵士「・・・は・・・はい、作戦に失敗した罰は必ずやお受けいたしますフェルネウス様・・・・。」

負傷した兵士「そうでございます！　我々は最悪作戦の失敗を伝えなければならないと思い帰還したのであります。」

フェルネウス「そうかそうか、それはご苦労だったな、グスタフ、フレッド、安らかに眠るがいい・・・・。」

２人の兵士はその場で力尽きた・・・・。

フェルネウス「フフフ・・・２属石と精霊の力・・・欲しい・・・欲しいぞ！！！　フハハハハハハ！！！」

第1話　襲撃（後書き）

出来るときに更新しときますw

第2話　【風の門】

尚矢「しっかし・・・・・あの連中よう考えたら中々の錬度やったなぁ？」

剣徒「はい、スキルのレベルはかなり高かったと思います、でも連中はあくまで奇襲のつもりだったので接近戦までは対処しきれなかったのでしょう。」

オプスキュリア「確かに、奴らの錬度は並大抵のスキルマスターのそれとは違う、ただまともな訓練を受けてあのレベルなら接近戦なんてお手の物のはずだぜ。」

優菜「じゃ・・・じゃあ怪しいお薬とかそういう感じですか？」

オプスキュリア「まぁその類でもなきゃ遠距離スキルだけにあれほ特化できるとも思えねえしな。」

そんな話をしばしばしながら歩いていると巨大な門が見え始めた。

討魔「あれが目的地のようだ、周りに『奴ら』がいるかもしれない、みんな気を引き締めろ。」

尚矢「せやな、また無駄に精神力使うの嫌やし極力スキルは温存しよう。」

門までの距離はあと２００メートルというところ、広い道がずっと続いているだけで、妙な気配などなかった。

尚矢「なんだかんだで、なんも起こらんまま門に到着しましたね。」

剣徒「そうですね。」

オプスキュリア「いや、様子がおかしいぜ。」

守武「どのへんがだ？」

オプスキュリア「お前らいつも門の前に立ちゃあ頭の中に声が聞こえなかったか？」

真癒「確かに！　最深部の守護魔獣の声が頭に響いて、門が開いたわ。」

尚矢「考えてみりゃそやなぁ、そういやあれ？　この門毎度のようについてる鎖もないやん？」

討魔「じゃあ先にだれかが入ったってことだな。」

剣徒「となると大問題ですね。」

7人が門の前で立ち話をしていると空から氷の槍が降り注いだ。

尚矢「うわっ！　あぶない！！！　避けろ！！！」

しかし間に合わない、討魔がとっさに唱えた下級スキル【エアガード】で氷の大多数は防がれたが、残った1本が討魔の腕を貫いた。

尚矢「討魔！！！　大丈夫か！！！」

討魔「っく・・・・防ぎきれなかった・・・・お前達は無事か？」

真癒「みんな大丈夫よ！　いま傷を癒すわね。」

【アクア・ヒール】

みるみるうちに氷の槍は消え、傷も癒えた。

尚矢「しかしなにもんやぁ！？　いきなり攻撃してきたのは！」

オプスキュリア「気配は感じなかった、多分門に入ろうとする奴を排除するためのトラップだろう。」

尚矢「ならなおさらガサいれなあかんなぁ！！！」

オプスキュリア「おうよ！　中から禍々しい気配が漂ってるぜ！気をつけな！！！」

守武「でも、どうやって入るんだ？」

尚矢「決まってるやん。」

顔がとってもにやにやしている、まさかとは思うが・・・・。

剣徒「門をぶっ壊すしか無いでしょう。」

まさかでした。

7人が一斉にスキルをぶっ放す。

尚矢「ひゃっはあああぁぁぁぁ！！！！」

【エレメンタル・バニッシャー】

様々な色の巨大槍が門に飛ぶ。

【ルーン・エクスプロード】

白い光が門に当たって爆発する。

【ダーク・イノセンス】

漆黒の刃が門に斬激をかます。

【ローズ・テンペスト】

水晶状のバラが炸裂し門を突き破る。

尚矢「ふぅ、こんなとこか。」

討魔「意外とやわいな。」

剣徒「スキル温存できてないですね、もはや。」

守武「行こうか。」

門は土煙を上げながらその大きな入り口を開いた。

優菜「こういうとき男性には萌えますね／／／」

真癒「めずらしく頼もしく見えるわ。」

夜雲「・・・・・・・・。」

7人は門の中に向かって歩き始める。

第2話　【風の門】（後書き）

いやぁ、ながらく書けなかった分どんどん書いちゃいましたw

また暇を見つけて書きます！

第3話　『奴ら』

??「フェルネウス様、門内部に何者かが侵入しました、捕獲作戦を継続しますか?」

フェルネウス「構わん、2属石であろうが我らの前には無力、麒麟捕獲を続行する。」

フェルネウス達は麒麟のいる間の門の前まで来ていた。

フェルネウス「この先だな。　麒麟は。」

??「はっ、しかしこの門をどのように突破しましょう。」

フェルネウス「破壊するに決まっておろう。　貴様ら、下がっていろ。」

フェルネウスが門に向かって右手を突き出す。

フェルネウス「砕けろ・・・。」

激音を立てながら巨大な門が崩れ落ちる・・・・。

??「おい、いまフェルネウス様なんかスキル使ったか?」

??「分からない、幹部レベルの奴らはスキルとは違う呪術のようなものが操れるらしい・・・・。」

??「恐ろしい力だ・・・・スキルを使わずしてあの巨大な門を破

壊出来るものなのか？」

フェルネウス「何をしている、さっさと入るぞ。」

兵士達が急いでフェルネウスに着いて行く。

そこには閃光ほとばしる一体の霊獣がそこにいた・・・・・。

～そのころ7人は～

回廊の奥から激しい地響きと何かの崩れる音が聴こえてきた。

尚矢「何の音や！？」

討魔「きっと麒麟の間の前にある門が破壊されたんだ、急ぐぞ。」

7人は麒麟の間に続く長い一本道まで出た・・・・。

真癒「ここは・・・なんだか煙たいわね・・・・。」

剣徒「きっと砂埃でしょう、あの音だと門は派手に壊されたようですし・・・・。」

討魔「あそこだ！」

7人が到着するとそこは派手に積まれた瓦礫で道がほぼ塞がれている状態だった・・・・。

尚矢「こーれわひどい有様やなぁ～！　どうなっとんねん！」

守武「麒麟の間に続く道以外なにも残ってませんね・・・・・。」

討魔「ん？　なんか変な臭いがするぞ・・・。　どこか懐かしいような・・・。」

優菜「この臭い・・・火薬ですう！！！」

尚矢「ほんまや！　火薬の臭いがするで！！！」

剣徒「皆さん！　こんなものがありましたよ！」

剣徒が持っていたのは細い円筒のようなものに赤い薄紙が巻かれ、導火線のような物が付いてる代物であった・・・。

尚矢「こ・・・これは・・・。」

「「「「「「「ダイナマイト！？」」」」」」」

第3話　『奴ら』（後書き）

いやーw

今月は頑張りますw

皆さんのコメントとかが一つ一つ励みになりますので素直な感想、アドバイス等心から待ち望んでおります><

第４話　元いた世界とこっちの世界

～時間は守武達が急いで門に向かい始めるまでさかのぼる～

フェルネウス「貴様が麒麟か、貴様の力が欲しい、我らに同行してもらうぞ。」

『もう愚かな人間がやってくる時期になったか・・・・。』

『しかし貴様らはいままで来たガキ共とは言い分が違うようだな。』

フェルネウス「貴様の言う人間はここに試練とやらに来る力の無いスキルマスターだろう、我々は違う、私と来てもらう。」

『来てもらう？　聞き間違いだろうか、一体誰に向かって言っているのかな？』

フェルネウス「貴様以外に誰がいると言う、我は戯言は嫌いだ聞かないのであれば力を行使するまで。」

そういってフェルネウスは右手を突き出す、その瞬間爆音が鳴り麒麟の足から鮮血が吹き出る・・・・。

『っち・・・・やっかいな力を持ちよって・・・・それは外界の「兵器」だな、稲妻のようなスピードを誇り、それに比例した威力を持つ・・・・。』

『まぁ・・・・我がここで倒れるのは定め、その代わり試練の役目は引き継がれるであろう・・・・。』

フェルネウス「どういうことだ？」

『急がなくともすぐ分かる。』

～7人サイド～

剣徒「なぜダイナマイトがこの世界にあるのか、この奥に行けば分かるでしょう・・・・。」

尚矢「そうやな、いこか。」

直後奥の広い空間で銃声がこだました・・・・。

討魔「銃まであるのか、これはもはや確定だな。」

守武「そうだね。」

オプスキュリア「なんのこっちゃわからねぇ！　説明しやがれ！だいなまいとってなんだ！」

守武「この「試練」が終わったら話すよ。」

剣徒「でも敵も一人じゃないでしょうね。」

7人は集中する、敵は7人、そのうちひときわ強い気を発する者が一人、それ以外は下っ端と思えた、そしてその気は、道中7人を襲った9人と同じ気であった。

尚矢「じゃあ挨拶代わりに一発ダイナマイトでこの邪魔な瓦礫を吹

っ飛ばして堂々登場と行きますか！！！」

討魔「ならいい作戦がある、少しみんな耳を貸せ。」

～フェルネウスサイド～

突如聞きなれた爆発音と供に後ろで道を塞いでいた瓦礫が吹っ飛んだ。

フェルネウス「なっ！！！」

同時に二本の光る剣を持った影が疾風の如く駆け抜ける。

一瞬の出来事で混乱していた下っ端２人が瞬時に切り裂かれる。

息着く間も無く強力な火、水、氷、風、闇、聖のスキルが残りの４人も打ち倒し、フェルネウスの喉元に二本の剣が突きつけられた。

尚矢「いやぁ！　あっぱれやな剣徒！！！」

どうやら自分に剣を突きつけているのは剣徒と言う名らしい。

討魔「さすが、小さなころから暗殺を中心とした双剣技を叩き込まれただけあるな。」

フェルネウス「何のマネだ？　２属のスキルマスター共。」

尚矢「喉元に剣突きつけられてその言い草は無いんちゃうの？　もっとこう脅えてくれな！」

フェルネウス「私が脅える？　奢るなよ2属のマスター共、下っ端レベルは倒せても我を欺けるなど5億年ほど早いわ。」

フェルネウス「そもそも剣徒とやら、貴様さっきから何に剣を突きつけている？」

その言葉と供に剣徒が剣を突きつけていた「物」が煙のように揺らぎ、消える。

剣徒「なっ！！！」

剣徒はすぐにその場を離れ、6人の元へ合流する。

フェルネウス「我が名はフェルネウス、とある組織の幹部を務めている。　属石はヴィジョニングライト　幻影門　以後、お見知りおきを。」

そういい、わざとらしい礼をする。

オプスキュリア「幻影門だと！？　それは封印された属石を司る禁断門じゃねえか！　その血の流れるものはこの世から消されたはずだ！！！」

フェルネウス「この気・・・・強き闇の力・・・・これは精霊の声か？　確かに幻影門は禁断門と恐れられこの世からその存在を無いものとされてきた。」

フェルネウス「しかし、そのような門を発見し、この世界に復活させるのも我々組織の計画の一つ・・・・。」

フェルネウス「おっと、少し口が過ぎてしまったかな・・・・。我の用は済んだ、帰らせてもらうぞ。」

尚矢「まて！　なんでお前が俺達の元いた世界にある銃やダイナマイトを持ってるんや！！！」

フェルネウス「銃？　ダイナマイト？　貴様らの世界？　・・・・・・・・。」

フェルネウス「フフフ・・・・フハハハハハハ！！！　面白い、そういう事か！　ならばまたすぐにでも出会えるときがくるだろう！」

フェルネウス「貴様らは知らねばならない、既に動き出した歯車がもう取り返しのつかないところまで来ている事をな。」

そういって地面に転がっている「物」を肩に担ぐ。

尚矢「おい！　それは麒麟やろ！　どうするつもりや！」

フェルネウス「本当に我らのことは何も聞かされてないのか？　愚かなものだな。　自分に与えられた任務も遂行できず質問攻めとは。」

そういわれ7人は教官殿の言葉と任務を思い出す。

～教官殿「いまこの世界ではこの世に散らばる伝説の魔獣を閉じ込めた９０の門と未確認の門が９つある、いまその門を破壊し魔獣を従え世界を牛耳ろうとするやからの動きが活発化している。」～

～教官殿「今回の任務は『奴ら』の討伐、及び【麒麟】の保護だ、万が一逃げられた場合一旦戻って来い。」～

尚矢「おぉ・・・忘れてた、よっしほな本領発揮や！　幻だかなんだか知らんけどそんなスキルわいらの2属石に比べたらちょちょいのちょいやで！！！」

【クリスタル＝バニッシャー】

水晶の槍が四方八方からフェルネウスの体を貫く。

しかしフェルネウスの体は煙のように掻き消え、その場から忽然といなくなっていた。

尚矢「どこいった！？」

広い部屋にフェルネウスの声だけがこだまする。

フェルネウス「フフフ・・・・そう焦るな若きスキルマスターよ、我らが相見える日もそう遠くはない・・・・。」

フェルネウス「それまでに少しでも力をつける事だな。　フハハハハハハハハハ！！！」

フェルネウスのいた場所には麒麟から流れたまだ暖かい鮮血が溜っているだけであった・・・・。

第４話　元いた世界とこっちの世界（後書き）

更新！

誤字、脱字、アドバイス、要望等あればお願いします！

第5話　異常事態

教官殿「で？　要するに麒麟も保護出来ず敵の下っ端だけ蹴散らして主要人物には麒麟と一緒に逃げられましたってことか？」

7人は帰ってすぐ教官殿の部屋に報告に来た。

その7人がなにも持ち帰らなかったのを見た教官殿は怒り狂い、なんとか鎮圧しいまにいたるのである。

尚矢「で、でもですなぁ～・・・・。」

教官殿「でもじゃない！　何故保護し損ねたと聞いておるのだ！！！」

討魔「敵の主要人物の名はフェルネウス　ヴィジョニングライト　幻影門　だそうだが？」

教官殿「何？　ヴィジョニングライト　幻影門？・・・・だと？」

尚矢「そうです、あいつは確かにそういいました、わいの【クリスタル＝バニッシャー】も当たったはずなのに煙のように実態が消えました。」

教官殿「・・・・【クリスタル＝バニッシャー】は聖属性の上位スキル、闇属性のスキルなら感知して確実に当たるはずだな・・・・。」

守武「奴の気になる台詞は「貴様らは知らねばならない、既に動き

出した歯車がもう取り返しのつかないところまで来ている事をな。」
です。」

尚矢「奴らの計画がそこまで進んでるって事なんか？」

教官殿「その言い草だと相当な自信のようだな。　事実、麒麟はおろかお前達7人ですら傷一つ付けられなかったのだからな。」

剣徒「なんかちょっと嫌味っぽく聞こえるのですが・・・・・（汗）
」

教官殿「っは！！！　とは言っても結果的には作戦失敗なのだからな！！！」

尚矢「ぐりぐりえぐりよるで・・・・この教官殿・・・・。」

教官殿はしばらくブツブツ文句を言っていたが突然冷静になり、物思いにふけり始めた。

教官殿「しかし・・・・例の噂が事実だったとはな・・・・。」

真癒「噂？　噂ってなに？」

教官殿「この際だしお前達も『奴ら』と接触しているので話しておこう。」

教官殿「噂と言うかはむしろほぼ確信に近いことなのだが・・・・。
」

教官殿の話はこうだった。

ドミニオンズのメンバーは総勢１２名で方々から集められた情報や噂、スキルマスターに舞い込んだ極秘任務などを遂行する特殊機関であると。

そこにとある噂が舞い込んだそうだ。

禁断門が復活しその血もこの世界に既に何十名も復活しているという噂であった。

しかしさすがに極秘依頼の最前線に立つドミニオンズのメンバーは誰も信じなかった。

教官殿「しかし今回のお前達の報告でほぼ確信した。　私はこれからドミニオンズ・パーティーを開きメンバーを招集、すぐに厳戒態勢を敷こう。」

教官殿「その間貴様らは４つ目の門、【土の門】に向かえ。」

守武「そこは安全なんですか？」

教官殿「【土の門】はいままでの門とは桁違いのレベルの守護魔獣が守っている。　奴は大丈夫だろう。」

尚矢「バーニングドラグーンとかも十分ヤバかったと思うんやけどなぁ・・・・。」

教官殿「ああ、あいつはお前達がブチ殺しておいて何を言ってるんだ。」

守武「いや、殺したのはおれじゃなくてオプスキュリア・・・・。」

オプスキュリア「ああ？　何言ってんだやったのはお前の体だからやったのはお前だ！」

守武「んあ！？　なに勝手なこと言ってんだよ！！！　お前だろうよ！！！」

教官殿「うるさい！　とりあえずお前達は【土の門】に向かえ！」

その一括で口喧嘩は止まる。

教官殿「いいか？　これはかなりの異常事態だ。　はっきりいって世界の行く末がかかっていると考えろ。」

尚矢「そこまでですかいな！！！　じゃあ誰にも話したらあかんとか？」

教官殿「当たり前だろう！　これはドミニオンズの中の極秘情報となる、お前達が人に話せばお前達7人はS級門犯となり煉獄に落とさねばならない羽目になる。」

尚矢「ようわからんけど煉獄っちゅう響きは喜ばしくないなぁ～・・・・考えただけで背筋がゾッとするで。」

教官殿「まぁそのゾッとする背筋が剥ぎ取られる思いをするだろうな。」

尚矢「決して人には話しません。　神はんに誓います。」

教官殿「よしよしいい子だ。　じゃあ私はすぐにここを出る、お前達もすぐに【土の門】で試練を済ませ、身の心配を一応するように守護獣に言っとけ。」

オプスキュリア「あそこの守護獣には忠告しても無駄やろうねぇ。」

教官殿はその言葉を聞いてふっふっふと笑っている。

それを聞いてオプスキュリアもふっふっふと笑っている。

教官殿「じゃあな、私は先に行く。」

そう言って教官殿は部屋を出て行った。

7人もその後に続き、訓練所を後にした。

第5話　異常事態（後書き）

名前考えるのは難しいね・・・・・

更新遅くなるかも＞＜

第6話　四つ目の試練

7人は訓練所を出てすぐの街道で立ち止まっていた。

尚矢「そういや【土の門】の場所聞いてなかったなぁ・・・・どこにあるんやろ。」

討魔「マップを開いてみよう、広い範囲で検索をかけてみる。」

剣徒「検索とか出来るんですか！　便利ですねえ・・・・。」

討魔「むしろ他の5人が使えるスキル少なすぎるんだよ。　他に頼りになるのは真癒の回復くらいだ。」

尚矢「まぁ・・・・確かに・・・・。　真癒がいなかったら4人くらい欠けてそうやな。」

真癒「そ・・・・そんな褒めたって何もでないわよ！！！」

優菜「真癒さん照れてるですぅ～・・・・／／　意外と可愛いとこあるんですね・・・・。」

真癒「バッバカ！　可愛くなんかないわよ！！！」

討魔「あった、ここから西に約15キロってとこだな。」

尚矢「ほないこかぁ～・・・・。」

そういって7人は歩き始めた。

～そのころ【土の門】では～

『麒麟がやられたか・・・・。』

『今回はちいと厄介な相手が出来たようじゃのぉフローレンスよ・・・・。』

フローレンス教官「フフッ、今までに無い強大な敵だ。　貴様も自分の身に気を案じることだな。」

『私に身を案じろと？　馬鹿を言うな、麒麟は五大守護獣の中でも知識を司る存在、彼の持ち味は強さではなく博学さであるのじゃ。』

フローレンス教官「して、麒麟が『奴ら』に捕まるのは仕方ないと？」

『敵は幻影の門を開いて開放してしまうほど強大じゃ・・・・麒麟程度の戦闘力では火力不足というとこじゃろう・・・・。』

『して、フローレンスよ、今度の新入りはどうなのじゃ？』

フローレンス教官「ああ、あいつらは全員『宿精』だ。　既に一人はオプスキュリアと契約しもう一人にはウンディーネが顕現している。」

『ほう、それは珍しいのう・・・・。　まるでこの世界がその者達に力を与えたようじゃ・・・・何かを求めるようにのう・・・・。』

フローレンス教官「『奴ら』の行動が活発になり始めた時代にあの

7人とは、確かに偶然とは言いがたいな。　しかも異世界から連れられたと言う。」

『１０００年前と同じか・・・・。　ならばその者達もまた2属石か。』

フローレンス教官「お察しの通りだ、ケツァルコアトルよ・・・・。」

『お前はわしに忠告だけしにきたわけじゃなかろう？』

フローレンス教官「ああ、四つ目の試練として7人が時期ここにやってくる。　奴らになんとか対抗できるように鍛えてやってくれないか。」

『久しぶりの調教の依頼か、またそれもいいのう。　よぉし引き受けた、お主は早く行くべき場所へ行くがいい。』

フローレンス教官「ッフ、全てお見通しか。　敵わんよ、あんただけにはね。　じゃあよろしく頼む。」

そういって教官殿はジャンプポータルで飛ぶ。

『フフフ、久しぶりに全力で若者の潜在能力を引きずり出すとしようかの・・・・。』

～7人サイド～

7人はあれから2時間ほど歩いていた。

尚矢「討魔～もうそろそろちゃうの？」

討魔「ああ、あと1キロもない、しかしそれらしき建造物が見当たらないのだが・・・・どこだ？」

辺りは見渡す限りの草原である、また10分ほど進むと巨大としか形容出来ない『山』が現れた。

尚矢「うわっ・・・・なんやあの山・・・・西遊記かっちゅーねん・・・・。」

山の周りには霧が立ちこめいかにもといった雰囲気をかもし出していた。

討魔「どうやらあの山が【土の門】らしいな。」

守武「土の山じゃん。」

剣徒「しょうもない。」

尚矢「しっかしどっから入ればいいねん？」

討魔「まぁ前まで行けば分かるだろう。」

ちなみに女性人2人（夜雲を除く）は後ろでトボトボついてきている。

真癒「夜雲～あんたも女の子でしょ？　しんどくないの？」

夜雲「・・・・大丈夫。」

優菜「すごいですぅ・・・・底知れぬ体力・・・・。」

そうこういいながら歩いているとついに山の麓までやってきた。

下から見ると本当に巨大な山で、頂上は雲に隠れて見えないレベルである。

尚矢「頂上っちゅうか、山の中腹に行くか行かんかで雲を通り越してるってどゆこと？　でかすぎちゃう？」

守武「こういうの見るとやっぱ異世界だぁ～って感じするね。」

剣徒「確かに・・・・僕達帰れるようになるころには軽く３０歳は超えてる気がしますよ・・・・。」

守武達がこの世界に飛ばされてから既に３週間ほどが過ぎていた。

尚矢「で、門はどこやぁ？」

討魔「わからん、山道があるようだから進んでみよう。」

７人は山道を進み始めた・・・・。

第6話　四つ目の試練（後書き）

更新しまくりまっくす～！

文章評価とかつけていただけるととてもありがたいです＞＜

だめなところ、読みにくい点は改善しますので感想にクレーム、素直な感想等お寄せください＞＜

それが自分にとって励みになり、活力にもなるので＞＜

みなさんいつも僕なんかの小説読みにきてくれてありがとう！！！！

第7話　試練の山道

山道には大量の魔物が現れた、すでに7人は３０匹以上の魔物を倒しながらすすんでいた。

尚矢「どんだけ魔物沸いてんねん！！！」

剣徒「確かに、いままで普通に歩いてて魔物に遭遇することは無かったですね・・・・。」

しかしこれはただの魔物ではなく、ケツァルコアトルのしかけた罠であった。

そうとも知らず7人は試練にのめり込んで行く。

守武「また魔物の気配だ、来るよ！」

奥の巨石が立ち上がる・・・・！！！。

立ち上がった巨石を討魔のホークスアイで解析する。

討魔「こいつは【巨石の魔人】だ、打撃攻撃は聞かないようだ、魔法系スキルで戦うぞ！」

解析している間に巨大な岩の塊を４つ飛ばしてきた。

剣徒が【ロックガード】を放つ岩の壁が４つの岩を受ける。

しかし岩が巨大すぎて受けきれず２つが後ろの方にいた女性陣３人

に飛ぶ。

夜雲が薄く光る剣を造り出し瞬時に岩を切り裂く・・・・。

守武「大丈夫か！？　こっちも反撃だ！！！」

【ダークマター】守武の闇スキルが敵を時空の歪みに拘束する。

真癒が【アクア＝デストラクション】を放つ、【巨石の魔人】の体を鋭い刃のような水流が襲い掛かる。

岩石属性の【巨石の魔人】は真癒の水属性上位スキルで一撃で倒れた。

すると、魔物の倒れた場所に光るものが落ちている。

尚矢「ん？　なんか落ちとるで？　異世界ならではのドロップアイテムちゃうか？」

守武「おお！　それはいいな！　薬草とかか！？」

討魔「薬草だったら守武、お前が食えよ。」

守武「いやいやいやいや、俺達いままで食わせる側だったから躊躇なかったけどいざ葉っぱ食うってなったら抵抗あるよ！？」

討魔「いいじゃないかいままで散々食わしてきたんだろう、謝れよ、二次元の勇者様に謝れ。」

守武「うぅっ・・・・ゴメンよいままで不味い葉っぱとか飲んだら

攻撃力上がる劇薬とか飲ませてごめんなさい～・・・・・。」

討魔「馬鹿はほっといてさっさと確認しよう。」

そこに光っていたのは何かの鍵であった、サイズは普通の家の物とさほど変わらない。

剣徒「鍵・・・・ですか。」

尚矢「となるといまのは中ボスくらいのレベルってことかぁ？」

その時、７人の頭に声が響く。

『その通りじゃ、我が放った幾多の魔獣をなぎ倒し、７つの鍵を集め我の元へ来るがいい・・・・・。』

尚矢「お前さんが【土の門】の守護魔獣か？」

『フフフ、三回目はさすがに慣れたかの・・・・・。　その通り、わが名はケツァルコアトル、【土の門】を守りし者なり・・・・・。』

討魔「何故こんなめんどくさいことをする？　それともこれは既に試練なのか？」

『いずれ分かる。　我はある者に頼まれてお主らを強くせねばならん、しかし強くなるのはお主らじゃ、戦い続けいずれここに来る頃に答えは見える。』

剣徒「ある者？　もしかして教官殿かな？」

『さぁの、全ては我の元に、待っておるぞ。　健闘を祈る。』

尚矢「この鍵を7つ集めないと【土の門】に入れないっぽいなぁ・・・・。」

剣徒「そうですね、あと最低でも6体はさっきの魔物クラスが出てくるってことですね。」

討魔「打撃が聞かない設定だったな。　これからさきもさっきみたいな特性付きが出そうだな。」

尚矢「そうやなぁ・・・・今回の試練はちょっと骨が折れそうやなぁ。　ま、とりあずこの鍵はわいが持っとくわ。」

そういって尚矢が鍵をズボンのポケットにしまおうとしたとき、鍵から電撃が走り尚矢は鍵を投げ捨ててしまった。

尚矢「痛っ・・・・なんや?　電気が走りよったで!?」

剣徒「そういえば鍵は7つとか言ってましたね・・・・一人に一つの鍵って決まっているのかも・・・・。」

討魔「じゃあ・・・・真癒だな。」

尚矢「なんでや?」

討魔「魔物にトドメをさしたのは真癒だろう。」

守武「それだけの理由って・・・・簡単すぎないか?」

そういってる間に真癒が鍵を拾い上げ、ポケットに入れる。

真癒「持てたわ。」

尚矢「持てたんかいっ！！！」

討魔「ほらな、つべこべ言わずさっさと先に進もう。　俺達は一刻も早く強くならないといけない。」

そういって7人は歩き始めた・・・・。

～ケツァルコアトル～

『フフフ・・・・一つ目の試練は力の試練、たまたまクリア出来たようだが・・・・次はどうかのぅ・・・・。』

『世界は力だけで上って行けるほど甘くない・・・・今回は7人のチームワークとやらをとくと見せてもらおうかの・・・・。』

第7話　試練の山道（後書き）

更新！

改善点、クレーム、感想等どんどんお願いします＞＜

毎回読みに来てくれてる方々に深く感謝＞＜

第8話　盲目の試練

7人が山道を進んでいると風の刃が飛んできた。
7人はスキルで応戦しかろうじてそれをかわす。
尚矢「なんや！？　」
討魔がすぐにホークスアイで辺りをサーチする。
討魔「いたぞ！　そこの木陰だ。」
守武「木陰なんかなんもいねえぞ？」
討魔「なに？　見えないのか？」
そうこう言っているとまた複数の風の刃が飛んでくる。
尚矢「次は数が多い！！！　みんな一端散るで！！！」
7人は散った、真癒は優菜と夜雲、守武は尚矢と、剣徒は討魔のグループでその場から散る。
散る直前に討魔は敵が3匹いることを話しての編成である。
まずは討魔と剣徒のグループに動きがあった。
近くの岩陰から風属性の気が出ているのを討魔が確認した。

討魔「剣徒、あそこだ、あの岩陰に1匹いる。」

剣徒「あそこですか、どうします？」

討魔「下手に近づくのは危険だと思う、あいつを挟む形で両方からスキルで挟み撃ちってのはどうだ？」

剣徒「いいですね、それでいきましょう。

討魔は剣徒と自分に基礎スキルの【サイレントウォーク】をかける。

討魔「これで足音は大丈夫だ、無駄に物音を立てないように頼む。」

剣徒「では移動から1分後に同時にスキルということで。」

討魔「了解だ。」

二人は同時に動いた。

まず二人は相手に葉の音ひとつ聞こえないラインまで走る。

その後岩を中心として対角線上に挟む。

この時点で約55秒。

二人は場所に着いてすぐスキルを詠唱する。

【ローズ＝レストレイン】【ルーン＝スナイパー】

二つのスキルが同時に展開する。

その瞬間、目標は回避しようとしたが剣徒のバラのフィールドに拘束される。

直後、討魔の遠距離攻撃スキルが目標を射抜く。

その場から敵の反応が消え、小さな鍵がその場に残った。

2人は合流した。

討魔「この鍵はどっちの物になったんだろう。」

剣徒「多分討魔さんでしょう。　トドメを刺したのは討魔さんなので。」

討魔が拾うと何も起こらなかった。

剣徒「やっぱりですね、でもこうなると他の2匹にも鍵がでるんでしょうか？」

討魔「さぁな、もし出るならこれが終わった時点が鍵4つ、残るは3つだな」

剣徒「最後の3つは強い魔物が出そうですね・・・・。」

討魔「まぁ、試練なんだしそれほど甘くないだろうな・・・・。」

そういって2人は7人で決めた集合場所に向かい始めた。

尚矢と守武は小さな洞穴の中に身を潜めていた。

二人は周りを把握するスキルをもたないので洞穴に誘い込み一気に討つ作戦である。

守武「ほんとにこの作戦で大丈夫なの？」

尚矢「大丈夫や、敵が通ったら反応する聖属性トラップをしかけたからな！」

守武「で、かかったらどうするの？」

オプスキュリア「ばあか！　決まってんだろ！　トラップにかかったらその場所に向かって集中砲火だろう？」

尚矢「さすが精霊はん！　ようわかってるなぁ！」

そうこういっているとすぐに反応があった。

尚矢「かかった！　いくで！」

しかし敵も遅くはなかった。

すぐに風の斬激を飛ばしてくる。

尚矢が【セイクリッド＝ディフェンサー】で斬激を受け止める。

守武「ありがとう！　いくぞ！　オプスキュリア！」

オプスキュリア「おうよ相棒！　はずすなよ！」

【幻想奇襲・シャドウスレイヤー】

一瞬にして辺り一面を斬激が舞う。

それが終わると同時に小さな鍵が残っていた。

守武「倒したみたいだな。」

尚矢「せやな、ほなさっさと回収して集合場所いこや！」

守武「ほかのみんなは大丈夫かなぁ・・・・。」

尚矢「剣徒と討魔は大丈夫やろうけど・・・・女性人がちょっと心配やなぁ・・・・。」

そういって守武が鍵を拾い、集合場所へ歩き始めた。

第8話　盲目の試練（後書き）

久々こうしん！

お待たせしました＞＜

第9話　幻影の試練

集合場所についた剣徒と討魔は驚きの光景を目にした。
なんと既に女性人がそこに集まっていたのである。
討魔「早いじゃないか。」
剣徒「意外ですね。」
優菜「夜雲さんがねぇ！　ズバッと一瞬で切っちゃったんです！」
討魔「夜雲・・・・お前何者なんだ？」
夜雲「・・・・・・・・元暗殺者。」
剣徒「なんですって！？」
そんな話をしていると守武と尚矢も合流した。
尚矢「お！　みんな早いなぁ！　ん？どしたみんな驚いた顔して。」
剣徒「夜雲さんが元暗殺者だそうです。」
尚矢「はぁ！？　意味わからんで！！！　日本で暗殺者とかありなん！？」
夜雲「・・・・・・・私は外国のとある諜報機関で特殊な訓練を受けていた。」

夜雲「・・・・・・近接戦闘や射撃戦闘なら任せて。」

尚矢「こんな華奢な体つきで暗殺者なんて冗談もええとこやで！」

尚矢「スパイアニメの見すぎちゃうの？」

剣徒「尚矢さん、いくらなんでもその言い方はないでしょう。　事実、今回も敵を瞬殺してますし、この間の襲撃でも実力を見てるはずです。」

尚矢「・・・・・まぁ・・・・・確かに。　すまん、ちょっと動揺して口が過ぎたわ・・・・・。」

夜雲「・・・・・・・気にしていない。　私は『元』暗殺者、いまはただの高校生。」

守武「・・・・なんかすごい話聞いちゃったけど、ここは日本でもなければ地球でもない、俺達は仲間だろう？」

剣徒「守武さんのかっこつけぐせがまた出始めてる・・・・・。」

討魔「まぁ、こういうときは放置に限る。　女性人は夜雲が鍵を手に入れたんだな？」

真癒「そうよ、あとは優菜と、だれかしら？」

尚矢「俺や！」

剣徒「僕ですね。」

真癒「じゃあトドメを刺すのはこの3人ね。　他の人はアシストに周るわよ！」

そういって7人は山道をまた歩き始めた。

山道には大きな一本の道がある。

それのおかげで迷いはしなかったがその山道の長さに7人はバテ気味であった。

尚矢「はぁ～・・・・さっきの試練からもう３０分くらい歩いてるけどどうなってんねん？」

剣徒「確かに一向に先に進みませんね・・・・。」

真癒「あれ？　ここさっき通らなかった？」

尚矢「あら・・・・確かに見覚えあるような・・・・。」

少し茂みの中に入っていくと集合場所に使った広場があった・・・・。

尚矢「これは・・・・もしかしてもう試練始まってる感じちゃうか？」

剣徒「いわゆる迷路みたいなものですね・・・・。」

真癒「でもどうやって抜け出せばいいのかしら？」

するとどこからともなく声が聞こえてきた・・・・。

??「よくこれが試練だと気づいたな。」

尚矢「だれや!?」

??「私は第五の鍵の試練の守護者、ここから先はいま鍵を持たない者との1：1のスキルバトルで決着を着ける。」

尚矢「1：1やて!?　えらいびびりやなぁ?　さすがに7人も相手は無理やもんな!」

??「どう足掻こうが無駄だ、これは試練。　さぁ、早く我に挑む者を選べ。

剣徒「どうしますか?　僕が行きましょうか?」

尚矢「いやまて、残ってるのは剣徒、優菜とわいや、この試練は5番目、比較的楽なほうやろう。」

剣徒「ということは、優菜さんですね。」

優菜「ふえええええ!!!　なんで私なんですかぁ!!!　怖いですうぅ・・・・。」

剣徒「いま行かないと次はもっと怖いやつらと戦うことになるんですよ?」

尚矢「それに、優菜がスキル使ってるのわい見たことないかもしれん・・・・(笑)」

剣徒「確かに・・・・ここは一発かましちゃってください！」

優菜「うぅぅ・・・・分かりましたぁ・・・・・。」

??「決まったようだな。」

??「ではその娘を預かろう。」

直後、優菜の体が光り始める。

優菜「ええ！　なんですかこれぇぇぇぇ～・・・・・。」

そういって優菜の体は消えた。

??「貴様らはそこで待つがいい・・・・。」

尚矢「っち・・・・待つしかなさそうやな・・・・・。」

真癒「優菜ちゃん・・・・大丈夫かしら・・・・・。」

第五の鍵の試練が始まった・・・・。

第9話　幻影の試練（後書き）

更新できるときに更新する！

評価、感想、意見、クレーム等がんがんお願いします＞＜

第１０話　映し鏡の試練

優菜が飛ばされた先は訓練所の模擬試合場であった。

優菜「ふええ！！！　なんで私が訓練所に・・・・？」

??「フフフ、ここは作られた世界、いわば本物に良く似た偽者ってことですよ。」

優菜「だ、だれですかっ！！！」

??「え？　ここにいるじゃない、私はあなたよ・・・・優菜。」

優菜が闘技場の反対側を見るとそこにはガラスのようなもので出来た『自分』がそこにいた。

優菜「え？　私と同じ顔？　髪型・・・・声？」

??「そうよ、あなたは私、今回の試練で倒すのも私よ！！！」

優菜「えええええぇぇぇぇぇ！！！！！」

～そのころ、残された６人～

剣徒「優菜さん・・・・大丈夫でしょうか・・・・。」

尚矢「ほんまにまともに戦ってるとこ見たことないからなぁ・・・・。」

??「そうだな、さ、次の試練を同時進行するぞ。」

尚矢「さらっと会話はいんなぁ！！！」

??「いいツッコミだ。　さて、次はどっちだ?」

剣徒「僕が行こう、尚矢さん、最後の試練頼みます。」

尚矢「わいの実力過信し過ぎちゃうかぁ・・・・？　まぁ頑張るわ・・・・。」

??「では二人とも闘技場へ連れてゆく。」

そう聞こえるなり二人の体が光輝き、その場から消えた。

～優菜サイド～

先制攻撃は優菜だった。

【ウェイブモーション＝ライトニング】

波動の力を纏った稲妻がガラスの優菜を襲う。

その瞬間、スキルを放った優菜自身にも稲妻に打たれたようなダメージが通る。

優菜「きゃあああぁぁぁ・・・・！」

優菜「な・・・・なんで私がダメージを・・・・。」

？？「言ったでしょ？　あなたは私、私がダメージを受ければ、それは自分に向かって放たれたのと同じなんです。」

優菜「私は・・・・私は私です、あなたなんかとは違うっ！！！」

優菜（魔法系統がだめなら物理攻撃でっ・・・・・！！）

【ウェイブモーション＝ブレイド】

波動の力を纏った剣が現れる。

優菜「これならどうだっ！！！」

駆け出すと、相手も同じような剣をガラスのような物で造りだす。

剣と剣がぶつかり合う・・・・。

優菜が放つ手放つ手全てに対して同じ行動を返してくる。

優菜（このままじゃ戦いは終わらない・・・・なにか・・・・なにか弱点はっ・・・・。）

剣を振っていると、半透明は相手の体の向こう側に何かが見えた。

優菜（あれは・・・・鏡？）

優菜（こうなったら・・・・最後の掛けですっ！！！）

思いっ切り力を込めて剣を弾く、その瞬間に間合いをとり、相手の頭上を弧を描くように剣を投げる。

高速に回転しながら波動の剣が奥の鏡に突き刺さる・・・・。

??「あーあ、ばれちゃったかぁ。　さすがに簡単すぎたですかね？　でも楽しかったです・・・・。」

優菜「・・・・さようなら・・・・です。」

音を立ててガラスの優菜はそこに崩れ落ちた。

優菜「なんだか・・・・ちょっぴり寂しいですっ・・・・。」

小さな鍵を拾い、現れた光の扉を出るとそこには見慣れた４人の顔があった。

真癒「優菜っ！！！　無事試練をクリアしたのね！！！　大丈夫？　怪我は無い？」

優菜「はいっ！　全然大丈夫でしたよ！」

守武「なんかとても楽しそうだね。」

優菜「ちょっと戦うのが好きになっちゃったかもですっ！」

真癒「いったい・・・・なにがあったのよ・・・・。」

優菜「いろいろです！」

～剣徒サイド～

剣徒「ここは・・・・中々凝った作りですが僕の目はごまかせんませんよ。」

??「フフフ・・・・さすがに違和感があるかな？　若き剣士よ・・・・。」

そこは剣徒が小さな頃から通っていた剣道の道場であった。

剣徒「ヨタ話はいいです。　さっさと試練をはじめましょう。」

??「血の気があらいな。　どのようにして戦うかはもう察しがついているというところかな？」

剣徒「ええ、この場所で他になにかすることでもありますか？」

そう言って真紅に光る二降りの剣を出す。

??「なら話が早い。」

例の如くガラスのような物質でできた剣徒も剣を造りだす。

道場の中に入り、礼をする、三歩前へでて、蹲踞（そんきょ）、立ち上がる。

一瞬の事であった、二人の立ち位置が入れ替わる。

遅れたように剣戟の激しい音が道場内に鳴り響く。

剣徒「私の実力をそのままにした人形ですか。　趣味が悪いですね。」

??「まぁそういうな、楽しもうじゃないか。」

幾多の剣戟が繰り返される。

どれも全く同じタイミングで、同じ速度で、同じ角度で剣と剣がぶつかり合う。

剣徒「やっぱりこのままじゃ勝てないんですね。」

??「自分を超えない限り私には勝てぬ。」

剣徒（このままじゃ前に進めないって言いたいのかな？　笑わせるなよ、次の一手で決めてやる！）

左に持っている剣を少し低めに構える。

右手渾身の力を振り絞り、面を狙った激しい斬激が相手を狙う。

咄嗟に左手でガードしたガラス質の剣徒は余りの威力に右手も添えてしまう。

剣徒「ここだっ！！！」

ガラス質の剣徒の右腕と左腕の隙間から、左に持った剣で相手の顎を狙った鋭い突きをかます。

突きは相手を直撃し斜め４５。の角度で道場の端まで吹っ飛ぶ。

??「たいしたものだ・・・・戦いの中で新たな技を身に着けるとは・・・・。」

剣徒「いや、これは君がいたからこそできた技であった、君にしか通用しない技だよ。」

??「私専用か・・・・また剣を合わせられる日を楽しみにしよう・・・・。」

剣徒「そうですね。　ありがとう。」

ガラス質の剣徒は音を立てて崩れ落ちる。

剣徒は鍵を拾い、光る扉に入った。

もう優菜は帰っていたが、尚矢はまだのようだ。

討魔「おう、どうだった?」

剣徒「剣道の練習試合みたいなもんだったよ。」

真癒「なんかみんな楽しそうな顔してるー・・・・。　ちょっとうらやましいわ・・・・。」

剣徒「ははっ、いろいろ学ばされることがあったよ。」

優菜「私もですっ!」

~尚矢サイド~

尚矢「親父・・・・。　なんでお前がここにおるんや。」

？？「これがお前に与えられた試練だからだ。　私を超えぬ限り、この試練は終わらぬ。」

尚矢「父さんは１０年前に死んでる！！！」

尚矢「偽者なんかで父さんの真似事すんな！！！」

第１０話　映し鏡の試練（後書き）

更新♪

今日も頑張りましたｗ

ちなみに俺の愛読書のアヲネギ先生の作品とコラボすることになりました！

既に１話上がっているのでよかったら読んでください＞＜

【コラボ企画】チートな高校生が異世界でがんばるようです×【Ｇａｔｅ】～若き門番達の物語～

アヲネギ先生の作品をかじってからのほうがわかりやすいかも＾＾；

第１１話　因縁

尚矢の攻撃は激しかった。

戦い始めて１０分ほどたっていたが、この時点で数十発のスキルを叩き込んでいた。

??「おいおい、もう打ち止めか?」

尚矢「まだや・・・・まだ終わらせへんっ!!!」

尚矢「うおおおおぉぉぉぉ!!!」

【クリスタル＝バニッシャー】

聖属性の槍が父の形をした人形に向かって飛ぶ。

??「無駄といってるだろう!!!」

父もとい人形の前で槍が砕ける。

尚矢「なんや!　なにがあいつを守るって言うんや!」

??「貴様が抱える心の闇だ。　その闇を超えぬ限り貴様に光は訪れん。」

尚矢「心の闇・・・・やっぱ・・・・あいつの事か・・・・。」

尚矢には幼い頃妹がいた、二人で公園で遊んでいたとき、自分が蹴

ったボールが道路に飛び出し妹が急いで取りに行った。
その時運悪く妹は車に引かれてしまった。
すぐに病院に搬送されたが後日命を落とした。
尚矢はその事故を自分のせいだと今も深く自分を戒めているのであった。
??「お前が妹の死を受け入れない限り、貴様が仲間の元へ戻ることは無い。」
尚矢「俺はあいつの死は受け止めてるつもりや、なにがあかんねん?」
??「お前は妹を失ってから全ての物事を無理やりおしこめるようになった。」
??「今も、私を倒すために力だけでぶつかって来ている。」
尚矢「そうかもしれん・・・・どうしたらいいんや?」
??「お前の妹は死んだ。　お前はそれだけでいいのか?」
??「お前を慕っていた妹の気持ちを、今は微塵も考えようとせず、自分が事故に巻き込んでしまったと言う罪悪感だけを感じている。」
??「偽善者は言った、人は死して尚、心の中で生き続ける。」
??「私はこれはあながち間違いじゃないと思うがな。」

尚矢はその言葉を聞いた時岩で頭をぶちのめされたような感覚に見舞われた。

尚矢「そうか・・・・、確かにわいは今まで自分を戒めるためだけに自ら危険に飛び込み、暴力に身を任せてきた・・・・。」

尚矢「当たり前の事やけど、あいつを失ったことしか考えてなかった。」

尚矢「いつも笑顔で『兄ちゃん遊ぼう』って言ってくれたあの笑顔が、今もわいの記憶の中に焼きついてる。」

尚矢「あいつはいまもわいの心の中と天国から見守ってくれてるんや・・・・。」

尚矢「恥ずかしいとこみられてたかなぁ・・・・。　兄ちゃん、異世界で変われるような気がするわ！」

尚矢「また日本帰ったらお前の仏壇の前で異世界の土産話でもするかな・・・・。」

??「顔つきが変わったな・・・・それでこそわしの息子だ。」

??「もう忘れたりするんじゃないぞ？　いまの気持ちを噛み締めて生きるがいい。」

そういうと人形の父はその場に崩れ落ちた。

尚矢「父さん・・・・ほんまありがとう。　いままで恨んでゴメン

な、父さんも天国からアイツと一緒に見守っててくれ・・・・・。」

尚矢は鍵を拾い、光る扉を抜けた。

光る扉を抜けた先には、いつもの6人の顔があった。

真癒「遅いわよ！　心配したじゃない！」

優菜「ほんとです！　死んじゃったかと思ったです！」

討魔「ま、俺は心配など微塵もしてなかったがな。」

剣徒「さすが尚矢さん、ばっちり攻略したみたいですね。」

守武「おかえりーーー。」

夜雲「・・・・・先に進もう。」

尚矢「おいおいみんな相変わらずやなぁ！　ほな、ボスのとこへ行きましょかっ！」

守武「うわっ・・・・なんかいつもよりテンション高い・・・・。
　さては門の中でらぶらぶちゅっちゅ・・・・。」

尚矢「ちゃうわあああぁぁぁ！！！　もっと暗いお話やけど、お前ら聞いたら涙が止まらん深いい話なんや！！！」

真癒「すんごい気になるわ・・・・・。」

尚矢「まぁそんなんはまた休暇にでも！　いまはさっさと試練済ま

してまおうやっ！」

その言葉に促され、７人は歩き始めた。

第１１話　因縁（後書き）

あとがきっていつも悩む＞＜

でもいつも読んでくれる人がいるから僕は書き続ける！（文章評価をいただけるとちゅっちゅしちゃいます／／）

【コラボ企画】チートな高校生が異世界でがんばるようです×【Ｇａｔｅ】～若き門番達の物語～

ちなみにこっちもよろしくね♪

第１２話　新たな旅の始まり

７人はそれぞれ手に入れた鍵を持って山道を進んでいると、今回はちゃんと先に進むことができた。

行き止まりに着くと、そこには岩の祭壇があり、鍵をはめ込む場所が７つあった。

全て違った形をしており、どれをどこに入れたらいいかなど迷うことは無かった。

尚矢「よし、わいで最後やな！」

尚矢が最後の鍵をはめ込む・・・・。

すると驚いたことに行き止まりでそれまで何もなかった岩壁が消え、長く続く一本の階段になった。

尚矢「うおっ！　ついにラスボスって感じの空気がするなぁ～！」

守武「この階段長すぎでしょ・・・・。」

尚矢「まぁいままで上ってきた山道よりましやろ！」

そういって７人は長い長い階段を登り始める。

何分登り続けただろうか・・・・。

やっと頂上が見えてきた。

剣徒「あれは・・・・教会?」

討魔「なかなか洒落た造りだな。　西洋風のシックな教会のようだな。」

高い尖塔の目立つ大きな教会だった。

尚矢「あそこにわいらを試した張本人がおるんやな。」

優菜「どやしにいくんですかぁ?」

尚矢「いや、どやしたいところやけど、礼をいわなあかん相手やなぁ・・・・。」

優菜「私もですね・・・・・。」

剣徒「確かに、今回の試練は7人にとって意味のあるものでしたね、助け合い、心の弱さ・・・・・。」

尚矢「それを克服できたし、さらにみんなのことをもっと深く知れた。　ありがたいことやな!」

そんな事を話していると、教会の巨大な扉の前に到着した。

扉の前に立つと案の定、頭の中に声が響く。

『よくぞ最後の試練、感情の試練を乗り越えた。』

『さぁ、中に入るがいい。』

巨大な扉が重い音を立ててゆっくりと開く。

そこには巨大としか形容の出来ない巨大な龍がそこに鎮座していた。

バーニングドラグーンとは比較にならないほど大きい、イメージとしては高い尖塔の屋根に頭が届きそうな勢いである。

尚矢「でっか！！！　どんだけでかいねん！！！」

『お前達が生まれてくる何千年と昔から生きているのだから当然であろう。』

『しかし、お前達、よく今回の困難な試練を乗り越えた。』

『今回はフローレンスの差し金もあってちと厳しいものになっていたのだが、その顔つきを見れば分かる。』

『無事、自分の闇を乗り越えたようだな。』

尚矢「ふーん、教官殿の差し金やったんか・・・・どうりでやらしい試練やと思ったで・・・・。」

『そうでもしなければ試練にならんからな。　お前達はこれからもっと強大な敵と戦わねばならぬ。』

『そこでお前達7人にプレゼントをやろう。　１０００年ぶりに全ての試練を乗り越えたお前たちにな。』

すると7人の前に7つのネックレスのようなものが現れた。

『それは覇者のネックレス、代々この国に伝わる９９秘宝の一つ、なぜかこのネックレスだけ7種類存在するのだ。　お前達にということであろう。』

それは中に綺麗な光を持った7色のネックレスであった。

7人は一つ目の前に現れたネックレスを一つずつ首にかける。

『そのネックレスには様々な能力がある、それはお前たちが危機に陥ったとき、お前達をきっと救うだろう。』

尚矢「ああ、ありがとう、いろいろとほんまにありがとう。」

『礼には及ばん、お前たちは全て自分達の力で試練を乗り越えたのだからな。』

『さぁ、最後の洗礼を受けに【次元門】へ向かうがよい、お前たちの師がお前達を心待ちにしておる。』

優菜「ほんとにありがとですっ！」

剣徒「ありがとうございました。」

尚矢「ほなまたなぁ～！」

ケツァルコアトルは【次元門】の近くに続くジャンプポータルドアを出してくれた。

7人は別れを告げ、光る扉を抜けた。

『ったく・・・・あやつらはもっと年上をうやまうという事を学まねばならんのう・・・・！』

ポータルを抜けた7人は【次元門】の近くの広場に出た。

尚矢「おお！　こんな近くまで来れるんか！　便利なやっちゃなぁ～。」

真癒「ほんとねぇ～、前の休暇の時は歩いたから今回はとっても楽に感じるわ。」

守武「なつかしいなぁ～、元気かなぁ、四季に紅葉に雪乃・・・・・また会えたらいいのにね。」

剣徒「ほんとですね、元気にやってるといいですが・・・・。」

尚矢「まぁあいつらなら嫌でも元気にやってるやろ！　ほら、もう【次元門】は目の前や！」

少し歩くとすぐに門の前に来た。

真癒「晴れてるとこんなに綺麗なのにねぇ～。　あの時は暗かったから分からなかったわ。」

尚矢「ほんまやなぁ～あの時はえらい暗かったからなぁ～！」

そんな昔話をしていると聞きなれた怒鳴り声が聞こえた。

教官殿「遅いっ！！！　貴様らあの程度のしれんもちゃっちゃとク

リアできないのか！！！」

尚矢「あんなやらしい試練出しといてよく言いますわ！　それに簡単にクリアできたら意味ないですやん！」

教官殿「ま、まぁそれもそうだが。」

教官殿「さ、よくぞ最後の門に辿り着いたな、若きスキルマスター達よ。」

教官殿「いまから最後の洗礼を行う。　お前達、並んで目をつぶれ。」

7人は横一列に並び、それぞれ目をつむった。

教官殿の声が聞こえる。

教官殿「炎、水、風、土の試練を見事乗り越えしスキルマスターよ、いまここでお前達をこの国直属の正式なスキルマスターとし、この世界の治安を維持する任務を与える。」

教官殿「貴殿達の階級は本日付けで、下級【第八階級】アークエンジェルスへ昇級する。」

教官殿「若きスキルマスターに幸あれっ！！！」

洗礼が終わる。

教官殿「さて、目を開けてもよいぞ。」

7人が目を開けると少し安心したような顔のフローレンス教官が立っていた。

守武（ちょっと可愛いかも・・・・。）

尚矢（ほぉ、ようみたら意外と美人やないか・・・・。）

教官殿「守武、尚矢、なにをじろじろ見ている。　燃やすぞ。」

守武「なっ、なんでもございましぇええん！！！」

尚矢「いやあっ！　なんでもないで？　なんとなくや、なんとなーく！」

教官殿「・・・・まあよい、明日からはお前たちは自由行動だ、この世界を周るのもよし、王都でこの世界を知るもよし・・・・。」

教官殿「ただし、行動は7人で行うこと、まぁ王都などでは自由にすればいいが、私からの任務は7人で行くこと！」

「「「「「「「了解！！！」」」」」」」

～かくして7人は正式なスキルマスターとなり、世界を又に掛けた長き冒険が始まる～

～乱世の章　終～

第１２話　新たな旅の始まり（後書き）

や・・・やっと序章が終わった（@ｗ@；）

ここまで長かった＞＜

これからはもっともっともっともっと大きくて、笑いあり涙ありの作品を続けます！

これからも応援、激励、宜しくお願いします！！！

【コラボ企画】チートな高校生が異世界でがんばるようです×【Ｇａｔｅ】～若き門番達の物語～

こちらもよろしく！！！

評価や感想をもらえるとちゅっちゅします／／／

第1話　王都

教官の試練を終えた7人は一ヶ月の休暇をもらった。

その間に7人は訓練所から離れた、というか王都から離れたところにある訓練所から王都にあるスキルマスター専用の寮に移された。

もちろん男女別部屋である。

尚矢「しっかし、こっちの世界に来てから誰と寝るとか考えたことなかったけどよう考えたらチャンスがいっぱいやってんなぁ！」

守武「ぐふふっ・・・・僕はおにゃのこの寝顔をたあっぷり拝んで毎晩目の保養をだな・・・・。」

討魔「そんなことあの3人にしれたらお前命が何個あっても足りなくなるぞ。」

守武「心の奥底に閉まっておくよ。」

剣徒「守武さん・・・・ドン引きですよ・・・・。」

そういいながら訓練所でもらった着替えなどを寮の4人部屋で整理する4人であった。

そのころ女性3人は・・・・。

真癒「はあぁぁぁっ！　やっと女の子だけの生活だわ！　訓練所の時とかは男共のいびきがうるさくて疲れも取れなかったしね！」

優菜「そんなこと思ってたんですか・・・・（笑）　やっぱり真癒さんは一応女の子なんですねぇ～。」

真癒「一応ってなによ！一応って！」

夜雲「・・・・・性格が男勝り。」

優菜「あははぁ～・・・・。」

真癒「私は男勝りなんかじゃ無いわよおおぉぉぉ！！！　まぁいいわ、早く片付けて王都の様子を見に行きましょ！！！！」

優菜「そうですねぇ～ショッピングが楽しみです！」

真癒「そうね！　教官殿から決められた日ににもらえるって言うこの世界のお金ももらえたし！」

ちなみにこの世界のお金の単位は、主に金貨、銀貨、銅貨で取引されているらしい。

銅貨１０で銀貨1枚、銀貨５０枚で金貨1枚という具合だ。

スキルマスター本部に所属するスキルマスターには二つの月が重なる時期（４５日周期）で給金が出る。

階級によって額は違うが、働きによって報酬が変わることはないらしい。

いわば公務員と言ったところだろうか。

ちなみに7人は昨日付けで下級【第八階級】アークエンジェルスになったので今回の給金は銀貨３０枚であった。

もちろん、７人の１人づつに、銀貨３０枚が支払われる。

王都の最高級宿に一泊するのに大体金貨3枚と言っていたので、金貨1枚ともなればかなりの大金なのだということが分かる。

ちなみにスキルマスターには王都に【Ｇａｔｅ】スキルマスター本部（Ｇａｔｅ　Ｓｋｉｌｌ　Ｍａｓｔａｒ's　Ｇｉｌｄ：通称ＧＳＭＧ）がある。

寮はその敷地内に女子寮と男子寮に分かれて建っている。

当然、男女寮間の行き来は禁止だ、会うなら外で会えということだろう。

任務の遂行は基本的に上位階級のスキルマスターがせわしなく動いているようで、下位のスキルマスターは非常勤のようなものらしい。

下位でも、たとえば7人のようにドミニオンズ1位の教官殿に目をばっちり付けられていてなおかつ１０００年に一度の逸材となれば話は違うが。

尚矢「おーい守武！　そろそろ行くでぇ！　そんな部屋の隅っこで何してんねん。」

守武「ああ、ごめんごめん、ちょっと個人的に日記をなだ・・・・。」

剣徒「守武さん日記とか書いてるんですかっ！　どんな変態日記なのやら・・・・・。」

守武「違うお・・・・僕だって読者さんに伝えなきゃいけないことが・・・・・。」

討魔「なにを訳のわからないことを言ってるんだ、ほらさっさと行くぞ！」

そういって尚矢と討魔が部屋を後にする。

剣徒も守武も急いで後に続いた。

男性４人は王都のメインストリートに着いた時、その賑やかさに驚いた。

メインストリートの道幅は優に２０メートル以上あり、遠くにポツンと見える城がその長さを物語っている。

そこにはその広く、長い道を全て埋めるような勢いで人々が行き交い、その客をなんとか捕まえようと屋台を出している人々は声を張り上げる。

尚矢「どっひゃあぁぁぁ！！！！　でっかい道やなぁ！！！！　人多すぎちゃうか！？」

剣徒「それだけこの国の治安が良く、いかに繁栄しているかがよくわかりますね。」

守武「人が多いの嫌いだなぁ・・・・先に寮に戻ってもいいかな？」
討魔「俺も今日はまだ寝たりん、戻って寝たいのだが。」
そういって守武と討魔の息が合い、早々と帰ろうとする。
尚矢「こらこら待たんかいっ！　ちょっとは友達付き合いっちゅうもんがあるやろぉ！」
剣徒「そうですよ、１０分くらい一緒に行動して、そこから別行動にすればいいじゃないですか！」
そういうと、２人は嫌そうな顔をするものの、歩き始める２人は着いてきた。
メインストリートには様々な店や屋台が立っていた。
服を売る店、薬を売る店、食材を売る屋台から、見るからに怪しい店もあるが、そのバリエーションは多岐に渡る。
１０分ほど歩くと、４人は気分が悪くなった。
尚矢「あかん・・・・人混みに揉まれて気分悪なった・・・・・。梅田駅の阪急百貨店とかとはレベルが違いすぎるで・・・・・。」
剣徒「どんな例えですか・・・・・。　てっきり尚矢さんはエセ関西人かと思ってましたよ・・・・・。」
尚矢「エセ関西人言うなぁ！　確かにワイは兵庫やけど、気持ちは大阪府民なんや！」

討魔「どうでもいいが、帰らないか。」

守武に関しては近くの屋台のゴミ箱にリバースしている、心配した屋台のおばちゃんが背中をさすってやる始末である。

尚矢「しゃあない、また夜来よう！　街は夜が肝心やで！」

剣徒「そうですね、夕食も寮で取れますけど、食堂は高いと聞いたのでメインストリートでおいしい店を探すのもいいでしょう。」

討魔「そうだな、守武を拾って、さっさと帰ろう。」

そういって3人は守武の元へ向かう。

守武はだいぶ楽になったらしく、おばちゃんにもらった水を飲んでいた。

尚矢「おう、もうだいぶマシか？」

守武「おぉぅ、大丈夫だ、問題な・・・・ぉおぉおぼぇぇぇぇぇ・・・・。」

また盛大にリバースしなすった。

尚矢「はぁ・・・・こりゃあかんわ・・・・。　担いで帰ろう。」

また水をもらって飲み干した守武を尚矢が担ぐ。

４人はおばちゃんにお礼を言って寮に向かい始めた。

そのころ女性3人は・・・・。

真癒「いやぁ、やっぱり教官殿に貰った下着とかを片付けるのに時間が掛かったわ・・・・。」

かかったと言ってもあれこれ悩んだ挙句、最終的にタンスに押し込んだに過ぎない。

優菜は激しくツッコミたい衝動に駆られたが、そこは自分の仕事ではないと思いあえて黙っていた。

優菜「そうですね、さぁ、王都にショッピングに行きましょう！」

その言葉に促され、まだなにかしようとしていた真癒をなんとか連れ出した。

3人が部屋を出たのはもう日が傾き始めた頃であった・・・・。

第1話　王都（後書き）

新章突入だっ！！！

みんなぁ！　元気ですかっ！

いつも読みに来てくれてありがとう！

より多くの人に読んで貰うために、小説家になろう勝手にランキングのリンクをクリックよろしくですっ＞＜

第2話　疑惑

3人が王都のメインストリートに着いたころには既に日は傾き、夕方になっていた。

真癒「ちょっと遅くなったけど夕方の街っていいわよねっ！」

と、無理をして気分を上げている。

優菜「おぉ～！　いろんな屋台や店があるですよぉ！」

夜雲「・・・・・道が、長い。」

夜雲「・・・・・楽しそう。」

と夜雲がすこし微笑み、わくわくしてる素振りを見せる。

真癒「あら？　夜雲がわくわくしてる顔見るのこっちに来てから始めてね！」

優菜「やっぱり夜雲ちんもれっきとした女の子なんですぅ！」

そういうと夜雲はすこしムッとしたような顔をして。

夜雲「・・・・・私にだって感情はある、楽しいときは楽しみたい。」

真癒「以外ね・・・・、でもそうやって話してくれたほうがいいわ！　私たちももっと夜雲と仲良くなりたいしね！」

優菜「そうですよぉっ！　もっといっぱい喋って下さい！」

そういうと夜雲は少しだけ嬉しそうな表情を浮かべる。

夜雲「・・・・・心がけてみる。」

真癒「よかった、これでもっとコミュニケーションが取れるわね！」

そんな話をしながらメインストリートを歩いていると、精神防具（主にアクセサリー類）の屋台を開いていた気さくな親父に呼び止められる。

屋台の親父「おうっ！　そこの美女3人組！　俺が精神防具工房へわざわざ出向いて品定めしてきたアクセサリーを付けて見たいと思わねえかい？」

真癒「美女3人組ですって！　ちょっとだけ拠って見ようかなぁ～！」

そう言って真癒は2人を引っ張って屋台に近づく。

屋台の親父「おっと、暗くて服装が分かりにくかったが、あんたらスキルマスターかい？」

優菜「はい～そうですよぉ！」

屋台の親父「なら精神防具はかかせねぇっ！　これはだな、魔獣から毒系統の攻撃が仕掛けられた時に装備していたらその毒を・・・・・。」

相手がスキルマスターとわかるなり自分の店の売り込みを始める親父。

さすが、商売に生きてきた男だ。

屋台の親父「で、うちの店の目玉商品はこれだ！」

と言って紫の布で隠してあった装備をお披露目する。

そこには水色の宝石のはめ込まれたブレスレッドがあった。

屋台の親父「これはアクアマリンの腕輪という装備でな、アクアマリンは知っての通り水属性の属石で・・・・。」

と、また説明しかけたところで真癒が話をさえぎる。

真癒「っと、アクアマリンの説明はいいわ、あたしの属石はラピスラズリ＝アクアマリン、だからね！」

その言葉で屋台の親父が一瞬止まる。

屋台の親父「へ？　いまなんと？」

真癒「だ～か～ら～、私の属石はラピスラズリ＝アクアマリンだから、アクアマリンの説明はいらないって言ってるの！」

真癒「ようするに、それは貴重がどうかを聞きたくてねぇ・・・・。」

と真癒が独り言を言っていると。

屋台の親父「ま、まさか貴女方は今年の第２，０００回、ゲートスキル継承者のご一行で？」

そういわれ、３人は「ああそういえばそんなんだったな。」思い出す。

優菜「それがどうかしたんですかぁ？」

しかし屋台の親父の思考は中々自分の否を認めなかった。

屋台の親父「い、いえ～、ところでお嬢さん方、今年の継承者は７名と聞きましたが、本当に貴女方が継承者なのですかい？」

親父は思っていた、何も知らなさそうなこんな小娘３人が選ばれしスキルマスターなはずがないと。

ということはこの者たちは嘘を付いているので、自分がとっ捕まえれば、ＧＳＭＧからたんまりと礼金がもらえると。

しかしその儚き夢は一瞬で砕ける。

真癒「そうよ？　私たちが継承者だけど、なにか？」

しかし親父も引かない。

屋台の親父「何を言うかこの反逆者共めっ！　選ばれし継承者の名を軽々自分などと言うとはなんたる侮辱！」

ものすごい手ひらの裏返しようである。

屋台の親父「まだなにかあるというのならば証拠でも見せてみろ！
なければ即刻ＧＳＭＧまで引っ張ってって煉獄に案内してくれるっ！」

しかしそんな事を言われても困るのは3人である。

証拠？　なにかあるか？　チェインスキルは上位のスキルマスターなら操れないこともないことが分かっている。

となると・・・・。

真癒「じゃあ・・・・これでいい？」

そういって3人は覇者のネックレスを親父に見せる。

それをみた親父は一瞬目を疑った素振りを見せた後、顔から血の気が引いてゆく。

屋台の親父「そ・・・・それはあぁぁぁ・・・・！！！」

見間違えるはずも無かった。　昨年の国の秘宝展覧会で7つ並ぶ覇者のネックレスを1時間も凝視していたのだから。

屋台の親父「も・・・・申し訳ありませんでしたあぁぁぁぁ・・・・。」

屋台の親父「選ばれし継承者様を反逆者呼ばわりした挙句、捕らえて煉獄になどと・・・・この私の命、どうかここで切り捨てなさっ

てくださいませ・・・・。」

などと屋台の親父が喚き出したので、3人はめんどくさくなった。

真癒「いいのよ、誰にでも間違いはあるわ。」

優菜「しかたないですねぇ～。」

夜雲「・・・・・めんどくさい。」

そういうと親父は泣きじゃくって地面にこすりつけた頭をあげ。

屋台の親父「なんと深き慈愛のお心！！！　このご恩一生忘れはしませんっ！！！」

真癒「じゃあ私たちは行くわ。　もう勝手に人を反逆者なんて言っちゃだめよ？」

屋台の親父「はいっ、貴女方から頂いた二度目の人生かみ締めて生きてゆきますっ！！！」

その言葉を背中に聞きながら歩いていた3人を親父が走って追いかけて来た。

走って追いかけて来た親父はアクアマリンの腕輪をどうかお礼にと、真癒に手渡したのだった。　そしてまた何度も何度も礼を言って、屋台へ戻っていった。

真癒はそれを腕に付け、すこし上機嫌に歩き出すのであった。

第2話　疑惑（後書き）

８月３１日、学生は明日から学校ですかね！

僕は２４日から学校にいってますが・・・・ｗ

怒涛の展開が起きたこの夏もこの投稿で８月最後になります。

学生のみなさんは新学期に気合をいれて！　社会人さんは新たな気持ちで残暑を乗り切ってください！

そしてひまがあったら僕の小説でも読みに来ちゃってください＞＜

だれかが読んでくれることが僕にとっての一番の励みです！

ではまた９月に！

第3話　力量

寮に戻って守武を寝かせたあと、尚矢と討魔と剣徒は3人でまたメインストリートへ行くことにした。

尚矢「そろそろ腹減ってきたしメインストリートでなんか食べ物屋でも探そかぁ～。」

剣徒「守武さんはどうします？」

討魔「なにか買って帰ってやればいいだろう。」

尚矢「そやな、ほな行こか！」

そういって3人は部屋を後にした。

寮を出て、5分も歩けばすぐにメインストリートの入り口に辿り着く。

夜のメインストリートは二つの月の光で煌々と照らされ、妖美な雰囲気が漂っている。

尚矢「おおぉ～！！　これは雰囲気でるなぁ！！」

剣徒「いいですねぇ～、さすがは異世界、日本のギスギスした空気は無いですね！」

討魔「当たり前だ、むしろ日本人の物事の視野が狭すぎるんだ。別の国の人間は日本人ほど自己中心的な考えをしていない。」

そんな話をしながら食事の出来る店を探していると、5分ほど進んだところに中からいい臭いのする食堂を見つけた。

尚矢「おっ！　なんかここよさげやん？」

剣徒「そうですね、それほど高くなさそうですし、ここにしますか！」

中に入ると丸い机が8個ほど並んでおり、その机を囲むようにイスが4つ置いてある。

奥のほうにカウンターがあり、店主と思われるおばちゃんが立っていた。

おばちゃん「いらっしゃい！　どこでも好きな場所に腰掛けておくれ。」

店は意外と繁盛しているらしく、空いてる机は2つしかなかった。

3人はカウンターのすぐ前の席に腰掛ける。

するとカウンターのおばちゃんが出てきてメニューを渡してきた。

おばちゃん「決まったら呼んでおくれ。」

3人はメニューを見始めた。

文字は頭の中で日本語に変換される。

メニューの内容は・・・・。
日本語に変換されるも3人のしらないものばっかりだった。
仕方なく3人はおばちゃんにこの店で安くて一番おいしいものを頼むという甘えに走った。
そして出てきたのは・・・・。
尚矢「案の定・・・・グロテスクやな・・・・。」
剣徒「守武さんがいたら、見ただけでリバースしたかもしれませんね。」
討魔「確実だな。」
しかし3人は訓練所のサロールの料理を既に攻略していたので料理はおいしく頂けた。
そもそも、見た目は良くないが味は中々いけるのがこの世界の料理だ。
ちなみに3人で腹いっぱい食った支払いは3人で当銀貨3枚だった。
剣徒「あれじゃ安いのかどうかわかりませんねぇ・・・・。」
尚矢「まぁ、わいらが金無いっていうのもあるけどなぁ。」
討魔「守武への差し入れはどうする？」

そんな話をしながら歩いているといつのまにか少し外れた人通りの少ない道に入っていた。

どうやらそういうお店の並ぶ道らしく3人は引き返そうとした。

すると、5人の良い印象は持てない男が前から歩いてきた。

先頭の男「よぉ兄ちゃん達ぃ、ここは子供が歩いちゃいけないとこなんだぜぇ？」

尚矢「ははっ、すまへんなぁ、話しながら歩いてたらいつの間にやらこんなとこに来てもうて、いまから戻るとこなんですわ。」

剣徒「そうなんです、ちょっと邪魔なんでどいてくれませんか？」

先頭の男「おうおう言うねぇ兄ちゃん！　いま自分達がどういう状況か分かってそんな口聞いてんのかぁ？」

討魔「邪魔だと言っている。　さっさとどけ。」

すると後ろの4人の男が笑い転げる。

後ろの男「おやっさぁん！　どけだとよぉ！　俺達をだれかしらねえんじゃねえかぁ？」

先頭の男「そうだなぁ、えれぇ舐めた口聞いてくれんじゃねえかぁ、ならいっちょ社会の歩き方って奴を教えてやるよ。」

そういうと5人が腰に下げていたサーベルを一斉に引き抜く。

先頭の男「俺らはこの町の裏の顔でちょっと名を上げた盗賊だぜ？
その舐めた態度いま叩き直してやらぁ！」

先頭の男「おめえらぁ！　やっちまえ！」

後ろの４人が一斉に剣を構え、走ってくる。

剣徒は剣を日本出し、２人の前に立つ。

下っ端「おいおい！　１人で相手してくれるとよぉ！　ご親切なこった！」

そういって１人切り掛かってきた下っ端１人の首が宙に舞う。

頭「なんだと！？　まぐれだまぐれ！　３人でかかれ！」

３人が一斉に切り掛かる。

正面の上段から切り掛かってきた男の剣を左の剣で受け止め、右の剣で上半身と下半身を真っ二つに切り裂く。

直後、右と左から振り下ろされた剣をバックステップで避け、剣を振り下ろした下っ端２人の間を風のように切り抜ける。

下っ端２人はその場に崩れた。

剣徒はそのままの動きで頭まで一気に駆け寄り、頭の持っていた剣を跳ね上げ、首元に剣を突きつけた。

剣徒「まだ、なにか言うことはありますか？」

頭「てめぇら・・・・一体何者なんだ・・・・・。」

討魔「名乗るほどの身分ではない。」

尚矢「安月給の雇われスキルマスターやわ。」

頭「スキルマスターッ・・・・・！！」

頭の胴体がそこに倒れる。

剣徒「この世界ではスキルマスターって珍しいんですかね？」

尚矢「どうやろなぁ～、まぁ盗賊程度がなれるもんじゃなさそうやな。」

討魔「無駄に時間を食った。　さっさと飯でも買って守武に届けてやろう。　そろそろ起きたころだろう。」

3人はメインストリートに向かって歩き始めた。

そのころ守武は・・・・・。

守武「ふあぁぁぁっ・・・・・。　あれ？　みんなどこ行った？　ってかいつの間に寝てたんだろう・・・・・。」

リバースした後の記憶が無い守武であった。

第3話　力量（後書き）

さぁ9月だよおおおお！！！

だれか突っ込んでくれるかな？w

速攻じゃねえかっ！！！

そうです、いま超楽しくかいてますw

読者のみなさん9月もがんばっていきましょおおお！！！

小説家になろう勝手にランキングのほうのクリックもよろしくお願いします＞＜

励みになります♪

第4話　忠告

3人が寮のまで帰ってくると真癒と優菜と夜雲が待っていた。

尚矢「おう！　女性陣！　どうしたんやぁ？」

真癒「ええ、みんなもう晩御飯は食べた？」

尚矢「おう、いま街の食堂で済ませてきたとこやで～！」

そういったところで真癒があることに気づく。

真癒「あら？　守武はどうしたの？　一緒じゃないの？」

3人は守武が人ごみに激しく酔い、度重なる嘔吐で意識を失ったので寮に寝かせてあるという話を伝えた。

優菜「それは大変でしたねぇ～！　でも夕方のことならそろそろ起きてるんじゃないんですかね？」

剣徒「それもそうですね、ちょっと見に行きましょうか。」

尚矢「せやな、差し入れもあるしちょっと行って来るわ。」

真癒「4人に頼みたいことがあるから守武を連れて戻ってきてよね！」

尚矢「わかった～、ほないってくるわ～。」

３人はそう言って男子寮に入っていった。

３人が部屋に戻ると守武はもう起きて椅子に座ってほうけていた。

尚矢「おう、守武もう起きてたんか。　これ、いま街で買ってきたお前の晩飯や、見た目悪いけど味はいけるでぇ～！」

守武「あぁ、おかえりみんな。　でもいまはちょっと食欲ないわ・・・・。　夜風に当たりたい気分だ。」

剣徒「ちょうどいいですね、下で女性陣が待ってますよ、なにやら僕達４人に用事があるみたいです。」

守武「おにゃのこがっ！？　では行こうすぐ行こう。」

討魔「相変わらずだな。　ま、せいぜいボロが出ないように努力するんだな。」

守武「その辺には抜け目ないから問題ない。」

そう言って胸を張ってみせる。

尚矢「いや・・・・自慢するとこちゃうから・・・・。」

４人は女性陣の待つ男子寮の前に出た。

尚矢「おう、待たせたな。」

真癒「もう、遅いわよ！」

尚矢「ははっ、ごめんごめん、で？　用事ってなんなんや？」

そう言うと真癒は顔を赤らめて・・・・。

真癒「その・・・・私達まだ晩御飯まだだから一緒にどうかなぁって思ったんだけど・・・・。」

真癒「食べたならまぁいいわ！　あなたたちの言った食堂に案内しなさいよねっ！」

尚矢「なんやそんな事かいな、まぁ守武も夜風に当たりたいって言ってるし散歩がてらちょうどええか。」

真癒「ああっ、そうだったわね、守武もう大丈夫なの？」

守武「え？　ああ、もう大分マシだよ、結構寝たしね。」

真癒「ならよかった。　さ、行きましょう！」

その言葉に導かれ7人は歩き出した。

守武「最近の真癒やたらツンデレ臭がするね・・・・。　イイッ！！！」

尚矢「お～い守武！　はよついてこな迷子なるでぇ！」

守武「あ、待ってよぉ～・・・・。」

5分も歩くと、すぐにメインストリートに着いた、もう夜も更け、夜11時くらいだろうか。

人も少なくなってきたメインストリートをさらに5分ほど歩き、食堂の前までやってきた。

尚矢「あらら、閉まってるで。」

真癒「ここなの？」

剣徒「間違いないですね。」

優菜「えぇ～・・・・もうお腹ぺこぺこなのにぃ～・・・・。」

尚矢「しゃあないなぁ、まだ屋台はいっぱいあるんやし歩きながら探せばええやん。」

真癒「もぉ～・・・・仕方ないわねぇ～。」

そう言って7人はまた歩き始めた。

さきほど歩いた時は店を中心に見ていたので気づかなかったが、屋台にも意外とおいしい料理が安値で売っていた。

色んな物を物色しながら歩いていると、またメインストリートから外れ、次は行き止まりにでた。

真癒「なんか暗いとこにでたわね・・・・。」

暗いといっても二つの月明かりが明るく照らしているのだが、行き止まりで目の前は壁なのでどうしても暗いイメージを持ってしまう。

尚矢「ま、いろいろ食べ歩いたしそろそろ寮に戻ろか。」

真癒「そうね。」

そう言って道を引き返そうとしたとき、不意にどこからか声が響いた。

『以外と若いんだね、フェルネウスが目を付けたスキルマスターって。』

尚矢「フェルネウスやて！？　どこや！？」

『ははっ、僕はフェルネウスじゃないよ、まぁ仲間のようなものだけどね。』

討魔「お前達は一体何者なんだ？」

『あれ？　フェルネウス君は自己紹介だけしかしなかったのかい？　自己中だなぁ。』

『まぁ、これから正式に敵になるんだから教えてあげるよ、僕の名前はトロヴァドゥロス。』

『しがない吟遊詩人さ。　そして、僕がこの身を捧げている組織の名前が・・・・。』

そういって黙りこくる。

尚矢「なにもったいぶっとんねん！　さっさと教えんかい！」

『ああ、いま思い出したよ、組織の名前は【アルモニア＝プロドティス】この世界に飽きた者が集う場所さ。』

尚矢「自分の組織も忘れとったんかい・・・・・。」

討魔「一体どれくらいの規模の組織なんだ？」

『さぁ、何人いるかなんてしらないけど、僕はこの組織での階級で堕天使第六柱って呼ばれてるよ。』

討魔「そうか、で？　何をしにきた？　やるなら全力でやるまでだが。」

『おいおい、血の気が荒いのは嫌いなんだ、今日はちょっとした下見さ！　次の重月の日にまた会おう。』

そう言い残して、声は聞こえなくなった。

尚矢「いまのどういうことや？」

真癒「正式に敵になるって言ってたわね・・・・・。」

剣徒「次の重月の日にまた会おう・・・・・。　次に月が重なる日に『奴ら』が行動を起こすってことですかね。」

尚矢「そりゃまた大問題やな・・・・・。　教官殿に伝えたほうがええんちゃうか？」

教官殿は7人の訓練を終えてからすぐにＧＳＭＧに戻っているのだという。

討魔「そうだな、今日はもう遅いから明日、朝食を街で取ってそのままの足でＧＳＭＧにたずねてみるのがいいだろう。」

尚矢「せやな、じゃあ今日は寮に戻って寝ますかぁ～。」

７人は来た道を戻り始めた。

第４話　忠告（後書き）

１日１話ペースで頑張っていきます！

ランキングのほうもクリックお願いします＞＜

いつも読みに来てくれてありがとう＞＜

第5話　報告

教官殿「なるほど・・・・。　ようするにお前たちは人気の少ない道で『奴ら』改め【アルモニア＝プロドティス】の幹部に出会ったのだな。」

尚矢「出会ったというよりかは一方的に話しかけられただけやけどなぁ・・・・。」

7人はあのあと寮に入って睡眠を取り、朝からメインストリートで食事を済ませて教官どののところに昨夜の報告にきていた。

教官殿「で？　そやつはなんと言ったのだ？　戦闘にはなったか？」

剣徒「いえ、以前出会ったフェルネウスに言われ僕らの事を見に来たといった口調でした。　なので姿も見ていませんし戦ってもいません。」

教官殿「本当に一方的なやつだな。　他に気になることは言っていなかったか？」

尚矢「それがやなぁ・・・・。　トロヴァドゥロスはこう言ってたで。」

『まぁ、これから正式に敵になるんだから教えてあげるよ、僕の名前はトロヴァドゥロス。』

『今日はちょっとした下見さ！　次の重月の日にまた会おう。』

教官殿「正式に敵ななる？　下見？　次の重月にまた会おう・・・・・？」

その台詞で教官殿は全てを察したようだ。

教官殿「これはまずいことになった、次の重月まではあと何日だっ！？」

尚矢「ええーと・・・・ちょうどおとといが重月やったからあと43日くらいか？」

教官殿「43日か・・・・まだそれなら対策を練ることは出来る・・・か。」

そうつぶやくと教官殿は部屋を飛び出して行ってしまった。

尚矢「あっ教官殿！　どこ行きますね～ん！」

しかし返事は無い。

討魔「どうするんだ？　ここで待つか？」

尚矢「いや、ありゃあ多分しばらく帰ってけえへんフラグやで。」

真癒「ならカフェで話でもしない？　男女共同館にあるカフェにおいしいスイーツがあるらしいのよ！」

男女共同館は男子寮と女子寮のちょうど間に立つ、いわば男女の社交場である、書物を置いているところもあれば、食事からおやつまで何でも揃う。

寮のユニットバスに飽きた者のために大浴場まであるという優遇ぶりだ。

さすがは公務員といったとこだろうか。

尚矢「おおー、確かにあそこには一回行きたかったんや！　行こか！」

優菜「行きましょう行きましょう！」

守武「うむ、悪くない。」

剣徒「いいですね、なにかあるとしてもまだまだ先ですし、どちらにしても教官殿の連絡待ちですしね。」

真癒「そうね。　その通りよ！」

夜雲「・・・・・書物。」

討魔「どれだけ危機感の無い奴らなんだ・・・・。」

そういいながらもついて行く討魔であった。

男女共同館に入ると同年代と思われるスキルマスターから年配のスキルマスターまで、思い思いの場所で過ごしていた。

レストルームで昼寝をするもの、書物を読むもの、仲間と話をするもの、様々であった。

尚矢「ほげえぇぇ！　広っ！　んでもって豪華な造りやなぁ！」

真癒「ほんとねぇ～！　綺麗だわぁ！」

剣徒「これはこれは・・・・楽しそうですね・・・・。」

7人は自由行動を取り、約2時間後にカフェに集まることにした。

尚矢と討魔と剣徒と守武は大浴場へ向かった。

大浴場には露天風呂もあり、とても日本を思い出させる造りだった。

真癒と優菜は共同館内にあるありとあらゆる施設を見て周った。

書物を自由に読むことが出来、借りるところも出来る図書館で夜雲を見つけた。

真癒「あ、夜雲こんなとこにいたんだ。　何読んでるの？」

夜雲「・・・・・世界の暗殺百選。」

優菜「真癒さん、他のところ周りましょうか！」

真癒「そ・・・・そうね、まぁ趣味は人それぞれだからね！」

真癒「じゃあ夜雲、後でね！」

そういって2人は図書館を出てゆく。

そのころ男性4人は浴槽に浸かりながら日本に思いを馳せていた。

尚矢「気持ちええなぁ～・・・・。　日本の温泉もこんな感じやったなぁ～・・・・。」

守武「そうだねぇ・・・・。　ああ、こうやって湯につかってるとめっちゃ懐かしい・・・・。」

討魔「確かに、懐かしいな。　そういえばこっちに来て日本の事をちゃんと考えた事は少なかったかもしれん。」

剣徒「でも普通の人なら混乱してホームシックになりますよね？それに比べて誰もそんな風にならず前向きに生きてる・・・・なぜでしょうか。」

そう言われるとそうである、４人が盗賊に襲われたときも、７人の時に襲撃されたときも、人を殺す事になんのためらいも7人は持たなかった。

尚矢「それりゃあ多分この世界に連れてこられた俺達は日本の普通の家庭からかけ離れた、なにか暗い過去を持った7人やとわいわ思ってるけどな。」

剣徒「暗い過去・・・・。　夜雲さんのようなものですか？」

討魔「そうだろうな。　夜雲の過去なんて俺達が割り切って忘れてるような過去なんて比にならないものだしな。」

守武「暗い過去ねぇ～・・・・。　特に無い気がするけど心のどこかで感じてるんだろうなぁ。」

しかし４人は誰も他の過去を聞こうとしなかった。

それが正しい行為で、相手にとって一番の方法だとわかっていたからである。

自分の過去は自分で乗り越えないといけないことも、４人には分かっていただろう。

１時間ほど大浴場で体を休めた後、４人はレストルームで１時間ほど昼寝。

真癒と優菜も歩きつかれて女性用のレストルームで寝ていた。

さすがにレストルームはよからぬ事を考える者がいるので男女別に分けられている。

当然、大浴場もだ。　いくら男女共同館といっても分けるべき場所は分けてある。

６人は約束の時間まで昼寝を楽しみ、夜雲は書物を読みふけった。

第5話　報告（後書き）

さて、僕も今日は疲れたのでレストルームへｗ

皆さん台風に気をつけてください！

僕の住んでる大阪は今夜直撃だそうです＞＜

そんなときは家で小説を読みましょう。

え？　なにを読めって？　決まってるでしょう、Ｇａｔｅですｗ

ではおやすみなさい＞＜

勝手にランキング現在１４位！　皆さんの熱い思いが届いてます！

クリックは見るたびに押しちゃってください＞＜！

ありがとう！

第6話　錬度

夜雲はみんなに言われた時間に言われたカフェの前で待っていた。

しかし、１０分待っても２０分待っても誰も来ない・・・・。

夜雲「・・・・・。」

寂しくなってきたのでレストルームに起こしに行くことにした。

案の定、真癒と優菜はレストルームで深い眠りについていた。

ちょっとやそっとじゃ起きないので、スキルで起こしてあげる事にした。

【オニキス＝アイシクル】で小さな氷柱を作る。

それを2人のおでこにぺちぺちする。

ぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺち

真癒「すーすー。」

優菜「すやすや。」

次はちょっと強めに叩いてみる。

べちべちべちべちべちべちべちべち

真癒「んんっー・・・・すーすー。」

優菜「むにゃむにゃ・・・・すやすや。」

いらっときた。

真癒と優菜の悲鳴と氷の割れる音が静かなレストルームに鳴り響く。

レストルームは真ん中に壁があって天井が繋がっている、いわゆるアニメの銭湯方式なので、２人の悲鳴は男性陣にも届いた。

尚矢「んんっ・・・・なんの声やぁ？　あ、そういえば1時間寝るつもりやったけど・・・・いま何時や・・・・。」

時計を見ると例の如く針が３０分ほど進んだところにあった。

尚矢「ああっ・・・・寝過ごしてもうてる・・・・。　はよいかな。」

尚矢はいまだ寝ている守武、剣徒、討魔を叩き起こした。

剣徒「ああーよく寝た・・・・。」

守武「もう朝か？」

討魔「寝過ごしたか・・・・。」

レストルームを出ると何故か少し塗れた真癒と優菜と、ちょっと楽しそうな夜雲が立っていた。

尚矢「おう、起きたか。」

真癒「起きたか。じゃないわよお！」

優菜「こっちは冷たいし濡れるし大変だったですぅ・・・・。」

剣徒「そうですか・・・・どんまいです。」

真癒「他人事だと思って！！！」

とりあえず7人はカフェに行くことにした。

真癒と優菜は男女共同館の館内着に着替えていた。

カフェで得体のしれない人気スイーツとやらを注文したあと、真癒が話を切り出した。

真癒「あのね、昨日の出来事なんだけど、前のフェルネウスの時も私達は手も足も出なかった。　そこで、みんなでスキルの錬度を上げたいの。」

討魔「ほう、山篭りか。」

剣徒「古いですよ討魔さん・・・・。」

真癒「王都に闘技場があるの知ってる？　そこだとスキルの試合をランダムな相手と行って、勝てば賞金が貰えるシステムなんだって。」

守武「それって競馬みたいなの？」

真癒「そう！　お客さんもどっちが勝つか賭けて、当たったらお金が貰えるシステムよ。」

尚矢「要するにそこで稼ぎながらスキルの練習もして、戦略とかも学ぶってことやな！　一石二鳥やな！」

剣徒「まぁそんな簡単においしい思いが出来るとは思わないですけどねぇ・・・・。」

真癒「まぁ、私達は実質下から2番目の階級だけど、2属石で選ばれしスキルマスターよ！　きっとある程度の敵には勝てるはずだわ！」

守武「まぁ実際いままでもそんな感じで色んな奴に勝てたけどねぇ。」

事実、守武に関しては闇の精霊と契約も交わしているので、上位のスキルマスターとも、技の錬度は負けなかった。

しかし7人は教官殿に打ち負かされる守武と、自分達の攻撃にもろともしなかったフェルネウスを見て、自分達はもっと向上心を持つべきだとどこかで思ってもいた。

尚矢「確かに・・・・まともに練習もしたこと無かったなぁ・・・・。」

討魔「まだ使った事のないスキルがかなりあるしな。」

真癒「名前だけじゃ効果の分からないスキルとかも試して見たいわ

！」

剣徒「じゃあ明日少し闘技場を覗いて見ましょうか！」

尚矢「せやな！」

そこで話はまとまった。

それから間も無く、グロテスクな容姿のスイーツが運ばれてきた。

7人は味は絶品見た目は最悪スイーツに舌鼓を打つのであった。

第６話　錬度（後書き）

更新だぜええ！

最近このサイトを教えて書き始めたリア友がいるんですが・・・・。

たった１０話書いただけでお気に入り件数が１６件、総合評価ポイントが９１ポイントと一瞬で抜かれました・・・・。

ちょっと落ち込んでます・・・・。

でもいつも見に来てくれる皆さんがいるので僕はあきらめません

いつか奴を見返す日がくるまで。

第7話　闘技場

おいしいスイーツを堪能した7人はその後、寮に戻り就寝した。

尚矢は明け方に目がさめた。

尚矢「もう・・・・朝かぁ。　休暇に入ってからだいぶ溜ってた疲れが抜けてきたなぁ・・・・。」

そんな独り言を漏らしていると・・・・。

討魔「お前も目が覚めたのか・・・・。」

尚矢「お、えらい早起きやな。　どうしたんや?」

討魔「いや、どうしたと言われても・・・・多分昨日昼寝したからあまり眠れなかったんだろう。」

尚矢「ああーっ、そうやな、多分わいもや。」

そう言って寝るにも寝れずボーっとしていると剣徒も起きてきた。

剣徒「ふあぁぁぁ・・・・。　あれ?　尚矢さん討魔さん、起きてたんですかぁ・・・・。」

かなり眠そうな声である。

尚矢「ああ、なんか目が覚めてもうてな。」

討魔「俺もそんなとこだ。」

3人とも起きて座ってるだけで特にすることも無くボーっとしていた。

時間は空が白み始めたくらいで、部屋の中も若干涼しかった。

すると尚矢がとある提案をする。

尚矢「今日闘技場行くんやろ？　体動かすかもしれんし散歩でも行かんか？」

2人はそれはいいと話に乗った。

守武は起こしてみたが全く起きる気配が無かったので放置してきた。

討魔「返事が無い、ただの屍のようだな。」

剣徒「懐かしいですね（笑）」

尚矢「わいもようデータ消えまくってたわ（笑）」

3人はメインストリートに向かって歩いた。

すごいことに、メインストリートは昨日の様子とは一変、ゴーストタウンのような状態であった。

尚矢「全然人おらんやん・・・・。」

剣徒「そんなに早い時間なんですかね？」

討魔「この国の人は朝が弱いのかもな。」

明け方なので綺麗な空気と冷たい風が心地よい。

３人は３０分ほど歩いた、外はかなり明るくなってきて、人もちらほら見かけるようになった。

尚矢「ああーっ、店も屋台もなんも無いなぁ～、そろそろ戻るかぁ？」

剣徒「そうですね、守武さんも起きてる頃でしょう。」

３人は寮に戻った。

守武はまだ寝ている。

討魔「まだ屍があるぞ。」

尚矢「ほんまやな、起こしてあげないと。」

剣徒「そうですね。」

３人は最高に悪い顔になる。

守武は激しい寒さで目を覚ました。

見れば薔薇色の槍が自分のベッドを包み激しい突風で吹雪のような物が自分を取り囲んでいる。

寒い寒すぎると、さすがに身の危険を感じた守武は攻撃に転じた。

【幻想奇襲・シャドウスレイヤー】

なるべく力を抑えて、周りを取り囲む槍と吹雪を消し去った。

そのままベッドの上に立ち上がり、臨戦態勢をとった。

しかしそこに敵はおらず、にやにやするいつもの3人がいた。

剣徒「おはようございます守武さん。」

尚矢「起きたか！」

討魔「寝すぎだ。」

3人は笑いを必死にこらえている。

守武はその瞬間寝起きドッキリだということに気づいた。

守武「もぉ～・・・・。　いくらなんでも激しすぎるよぉ・・・・。」

なんの騒ぎかと、近くのスキルマスターが部屋を覗きに来る始末である。

それに対して尚矢は。

尚矢「うるさくしてすいまへーん！」

などとへらへらしてる。

守武「で・・・・なんでこうなる羽目になったの・・・・。」

尚矢は朝から3人が何故か目が覚めて3人で散歩に行ったこと、そして帰ってきても守武が起こすことになったことを伝える。

守武「で？　なんでスキルで起こすの！？」

尚矢「そりゃあ朝のテンションって奴やな！」

後ろの2人も満足気に頷いている。

なんとも哀れな守武の寝起きであった。

その後、約束の時間に男女共同館で真癒、優菜、夜雲と合流し朝食を取った、守武の話をネタにしてさんざん笑った後、闘技場に向かうことになった。

尚矢「そういや闘技場ってどこにあるん？」

真癒「メインストリートを半分くらい行ったら大きな十字路に出るの、そこを右に行くと闘技場があるのよ。」

剣徒「結構遠いですね・・・・。」

寮はメインストリートの入り口から少し離れたところにある。

要するにただでさえ長いメインストリートを普通より長く歩かなければならないということだ。

結局、７人は３０分ほど歩き、やっとの思いで闘技場についた。

尚矢「おおおお！　でかいなぁ！」

真癒「さすがは闘技場が認知されてる世界・・・・、力の入り方が違うわね。」

剣徒「ここで戦うんですね。　わくわくしますね！」

討魔「これは、どんなスキルマスターが現れるか楽しみだ。」

守武「でけええぇ・・・・。」

優菜「どこが入り口かわかりませんねぇ。」

夜雲「・・・・・おっきい。」

闘技場はまんまギリシャにあるコロッセウムのような円形闘技場だった。

７人は人の入っていく入り口らしきところに入っていった。

７人が入った後、受付の係員が札をあわてて立てに来た。

【Ｓｋｉｌｌ　Ｍａｓｔｅｒ'ｓ　Ｅｎｔｒｙ】～参加者受付～

第7話　闘技場（後書き）

いやぁ・・・・最近1話を書く時間がどんどん長くなってる・・・・。

今日に限っては7時間くらいかけて書いてるw

みんな評価&クリックお願いします＞＜

アドバイス等もお願いします！

第8話　7人の罠

闘技場に入ると受付のようなところで2人の女性が客の相手をしている。

色んな男達が今日倍率の高い相手は誰だとか、弱くて金額の高い相手は誰だとかを、受付嬢に聞いている。

尚矢「なぁ・・・・ここ観客席へ向かえなさそうなんやけど・・・・。」

討魔「そうだな、これは多分選手のほうの入り口だろうな。」

すると大柄な男が近づいてきた。

男「おぅおぅ若い兄ちゃん達ぃ、ここは子供が来るとこじゃねえぜぇ？　闘技場だぁ、人が殺しあうんだぜ？」

尚矢「どっかで見た絡まれ方やなぁ・・・・。」

剣徒「あのぉ、入り口を間違えたんでよかったら観客席への行き方を教えてくれませんか？」

男「観客席だぁ？　舐めたこと言っちゃいけねえぜ！！！　ここに来たからにはか弱い兄ちゃん達に頑張ってもらわねえとなぁ！！！」

剣徒「ええ・・・・僕・・・・剣も握ったことないのに・・・・。」

その言葉で6人は剣徒が何をたくらんでいるか悟った。

この7人はなんだかんだで似たもの同士なのであった。

尚矢「そ・・・・そうですぜ兄さん・・・・わいら田舎から出てきたばっかりで右も左もわからんのですわぁ・・・・。」

男「そうかぁ、それはちょうどいい！　ここで戦って勝ったらお金が手に入るんだぜぇ？」

討魔「それは・・・・本当ですかっ！！！」

もはやキャラ崩壊である。

尚矢「どうする・・・・？　女もおるけど・・・・大丈夫か？」

真癒「お・・・・お金のためなら仕方ないわね・・・・。」

男「話が分かるじゃねえかぁ！　じゃあさっさと手続きしちまいな！」

剣徒「あのぉ・・・・よくわからないんですけど・・・・。　一体なにをすれば・・・・？」

男「出てきた相手を倒せばいいだけだよ！　武器でもスキルでもなんでもありだぜ！」

剣徒「わかりました・・・・。」

男「っち、なんも知らねぇなら俺が変わりに手続きしてきてやるよ。」

そういって男は去っていった。

尚矢「剣徒も考えること鬼畜やなぁ！」

剣徒「これのほうが楽しいでしょう！」

守武「え？　え？　なんのこと？」

真癒「え？　いままで気付かなかったの！？」

守武「知らないよぉ・・・・。　何の事か分からなかったからとりあえず黙ってたんだよぉ・・・・。」

そんなことを言っていると男が近づいてくる。

剣徒「とりあえず、守武さんは黙っててくださいっ！」

男が戻ってきた。

男「おう！　お前ら、可哀想だから俺達小さな猟兵団やってんだが、俺達が相手してやるよ！　殺しはしねえよ！」

剣徒「ほっほんとですかっ！　ありがとうございます！」

男「おうよ、こっちは5人でいいから、お前らはなんか武器でも借りて来たらいいぜ！」

武器を借りるとこまで丁寧に教えてくれて、男は大股で去っていった。

尚矢「で？　どうすんねん？」

剣徒「まぁ、前半ちょっと防戦一方になってですね、負けそうになった時に・・・・。」

その作戦は１０分間ほど入念に行われた。

作戦がまとまって7人は受付嬢に武器を借りに行った。

受付嬢「なににしますか？　刀剣から鈍器、槍などなんでもありますが。」

尚矢「ええと・・・・誰でも扱える剣を7本頼んます。」

すると受付嬢は本当にファンタジーの主人公が使っていそうな鉄の剣を7本出してくる。

受付嬢「これでよろしいでしょうか？」

尚矢「ああ、ありがとさん！」

そう言って7人は立ち去ろうとする。

受付嬢はさきほどのやりとりを見ていたのでさすがに心配になったのか。

受付嬢「あのぉ、防具はよろしいのでしょうか？　さすがに剣だけでは厳しいと思いますが・・・・。」

すると尚矢だけが振り返り、にっこりと笑って。

尚矢「大丈夫ですわ。」

そういって手をフリフリする。

受付嬢はキザだと思いつつ、半身本当に大丈夫かと思いながら他の客の相手を始めた。

尚矢「まぁ装備はこれでええやろ。　あとは時間まで待つか！」

しばらく話をしながら待っていると男がやってきた。

男「おう、そろそろ時間だぜぇ？　早く闘技場の入り口に行きな！」

入り口は二箇所ある、西側ゲートと東側ゲートに分かれていて、7人は東側ゲートだと教えられていた。

7人は東側ゲートに立った。

大きな扉が開き、何千人という観客が耳をつんざくような声で叫んでいる。

『ガキがこんなとこ出てくんじゃねぇ！！！』とか『ガキなんてさっさとやっちまえぇ！！！』とか叫んでいる。

尚矢「えらい舐められてるなぁ・・・・。」

剣徒「まぁ仕方ないですよ。」

討魔「まぁこれもあと少しの我慢だろう。」

守武「よく聞けば楽しいこと考えるねぇ。　わくわくするよ。」

優菜「緊張します。」

真癒「いいわねぇ・・・・。　きっと気持ちいいわ。」

夜雲「・・・・・楽しみ。」

7人は前に進み始めた。

第8話　7人の罠（後書き）

いやぁ、怖い話きらい！

こわいおーこわいおー。

更新です！

ついに４０部だ！

これからもがんばります！

評価等もよろしくです＞＜

第9話　地獄絵図　其の壱

相手は5人の猟兵団、こちらは世紀のスキルマスター（いまは田舎から来た右も左もわからない少年達）という鬼畜な組み合わせの試合が始まろうとしていた。

両チームは闘技場の東側と西側に対峙した。

試合の司会進行の声が会場中に鳴り響く。

『レディース　エン　ジェントルメェン　ボーイズ　エン　ガァールズ、よくぞいらっしゃいました！　本日の第一試合が間も無く始まります！』

『本日の第一試合はなんとっ！　入り口を間違えて出る事になってしまった哀れな少年少女7人と、それを哀れみ殺しはしないと宣言したお馴染みリベウス猟兵団のスタメンの試合でございます！』

『おおっとぉ？　少年少女の装備はレンタル武器の鉄の剣だぁ！防具もつけていませんがこれで大丈夫なんですかね。』

会場から野次が飛ぶ。　『さっさと殺っちまえ！』とか『リベウス猟兵団やさしいぃ！！！』など、様々である。

さきほどの男「おいおい兄ちゃんたち、いくら殺さねぇつってもその装備は舐めすぎじゃねえかぁ？」

尚矢「いやいや・・・・わいら重い装備つけるくらいなら精一杯の力を出して戦いたいんですわ・・・・。」

剣徒「それに、僕以外のみんなは6人がかりで村を襲ってきた魔物を1匹倒したことがあるんです！　だから少しは剣を扱えるはずです！」

すると会場がどっと笑いに包まれる。

『ぎゃははは！　6人がかりで魔物1匹だとよ！』とか『早く終わって次の試合に行こうぜぇ！』などと叫んでいる。

『では時間がもったいないので1回戦行ってみましょう！！！　試合開始ぃっ！！！』

7人は念のため、女性陣を3人後ろに配置し、男性陣4人を前に展開した。

さきほどの男「まぁ当然の展開だねぇ！　俺達も女子供に剣を向けるのは気が引けちゃうからねぇ！」

男は先頭から突っ込んできた、後の4人も男の後ろから続く。

7人は敵があと10歩ほどのところに来たとき、男性陣4人は四方に、女性陣3人は固まって東ゲートのほうへ潰走する。

さきほどの男「おいおいついに怖気づいたのかぁ！？　おい、お前ら1人ずつ男をマークしろ！　俺は女3人をやる！」

猟兵団の残りの4人が四方へ散った尚矢、守武、討魔、剣徒を追う。

初めに追いつかれたのは守武であった。

男が剣を振り下ろしてくる、守武は剣の経験が無いのでリアルに焦りながら受ける。

守武「うぁ・・・・ちょ、危なっ！」

男は容赦無く剣戟を放ってくる。

2発、3発と剣と剣がぶつかり合う金属音が響く。

ついに守武は剣を跳ね上げられ、へたりこんだ股の間に剣を突き立てられた。

猟兵団の男「殺しはしねえからこれでお前はゲームオーバーだなガキんちょ。」

守武「は・・・・はい・・・・。」

そのころ、尚矢も剣徒も討魔も、そして女性陣も防戦一方を装い、すでに限界が来ていた。

そこで尚矢が合図を出す。

尚矢が持っていた短剣を空高く投げる。

猟兵団の男は一瞬それに気を取られる。

戦意喪失のフリ、をしていた7人は一斉に東ゲートの前に集まり、さきほどと同じ陣を組む。

猟兵団は一瞬驚く素振りを見せるものの、すぐに追撃にかかろうとする。

すると一陣の風が猟兵団の持っていた剣やら槍を巻き上げる。

さきほどの男「な、なんだこの風は・・・・・。」

猟兵団の男「うあああぁぁ！　剣が風に巻き上げられた！」

尚矢「いやぁ・・・・・。　そろそろお宅らの相手するんも疲れましてねぇ・・・・・。」

さきほどの男「なんだと？」

剣徒「さすがに剣で弱いフリするのは骨が折れましたよ・・・・・。　錬度が低いにもほどがありますね。」

討魔「カスだな。　お前ら。」

ひどい言われである。

さきほどの男は思った、なぜだ？　こいつらはさっきまで防戦一方だったはず、なぜこんなにも強気なんだ・・・・？

そこで男は気づく、あの風の正体に。　しかし自分の意思はそれを認めようとしない。

さきほどの男「ははっ、てめぇら何を強気になってんだぁ？　カスだと？　てめえらなんざ素手でも小ざかしい虫けらのように扱ってやるよ！！！」

そういって猟兵団5人が殴りかかってくる。

尚矢「ククッ・・・・遠い、遠すぎるで・・・・・。」

さきほどの男「なにがだぁ！？　おらぁ！！！」

尚矢にむかって鋭い右ストレートをかます。

しかし当たらない、なぜだ？

尚矢「お前らザコとわいらとの実力差が離れすぎっつっとんのじゃ！！！」

尚矢は殴りかかってきた男の後ろに既に周りこんでおり、聖なる槍を首元に突き付けていた。

さきほどの男「お・・・・おおおお前らスキルマスターッ・・・・！！！！」

会場全体がざわつき始める。

『スキルマスターだと？』『あのガキ共が！？』『そういえば今年のスキルマスターはまだ成人にも満たないって聞いたぜ。』などと動揺の色が隠せない様子だ。

『おおっとぉぉ！！？？　これは一気に形成逆転だぁ！！！　まさかこの少年達はスキルマスターという事を隠して戦っていたようです！』

尚矢「じゃあお兄さん、たあぁっぷりと楽しもか・・・・。」

尚矢が飛びっきり悪く、禍々しい笑顔を放つ。

すると槍を突きつけられている男以外の猟兵達が一目散に潰走しはじめた。

第9話　地獄絵図　其の壱（後書き）

地獄絵図　其の弐　に続く。

第１０話　地獄絵図　其の弐

守武「逃がさないよ？」

【ヘル＝ブラインド】

逃げ出した猟兵の視界が全て闇になる。

それだけで４人の猟兵はパニックに陥った。

討魔「おいおい情けないな、さっきまでの威勢はどこへやら。」

【フライ】

風属性の魔法で４人を空に放り上げる。

剣徒「あははっ、闘争は楽しまないと！」

【ローズ＝ネット】

バラの網が４人を絡め取る、当然棘が刺さり、猟兵達は悲鳴を上げる。

真癒「痛いの？　お姉さんが回復してあげるわ。」

【アクア＝ヒール】

４人の傷が癒える、そしてそこにまた棘がささり悲鳴を上げる、癒える、悲鳴、癒える、悲鳴、癒える、悲鳴、癒える、悲鳴、癒える、

悲鳴。

さきほどの男「もうやめてくれぇ！！！　頼む、俺達が悪かったんだぁ！！！」

優菜「なにを言っているんですかぁ？　あなたのお仕置きがまだじゃないですか！」

【ウェイブモーション＝ライトニング】

波動の稲妻が槍を伝って男の体を流れる。

男が悲痛な声を上げる、しかし威力は制限してある。

真癒がすかさず癒す、稲妻、癒す、稲妻、癒す、稲妻、癒す、稲妻・・・・。

夜雲はただそれを見て少し楽しんでいるだけである。

会場はあまりに酷い扱いに言葉を失っている。

その空気を読んだのか司会進行が。

『リベウス猟兵団が戦闘不能の為試合終了！！！　7人チームの勝ちぃ！！！』

そのアナウンスで7人はスキルをやめる。

全ての盲目も解除し、体の傷も癒してあげた。

尚矢「ま、これくらいならいいやろ。」

討魔「うむ、馬鹿にはいい薬だ。」

剣徒「楽しかったですねぇ。」

守武「いいねぇ、新たな才能が開花しそうだわ。」

真癒「ウフフ・・・・可愛いかったわぁ・・・・あの悶える顔・・・・。」

優菜「ああいうのされたら・・・・／／／」

夜雲「・・・・・みんな楽しそうだった。」

その台詞をニヤニヤしながら吐く7人を見て会場中がドン引きしていた。

『で・・・・では両チームはそれぞれ入場したゲートより退場してください。』

『いやぁ・・・・なんとあのような少年少女がスキルマスターとは・・・・。』

会場の空気がかなり沈んでいたので司会進行はさっさと次の試合に行くことにした。

『で、では第2試合を開始しまぁす！！！』

そのころ退場した7人は・・・・。

尚矢「いやぁ、楽しかったなぁ！」

討魔「剣徒は本当に鬼畜だ。」

剣徒「すいません・・・・悪ノリってやつですね！」

真癒「鬼畜よ鬼畜・・・・まぁ楽しかったからいいわ。」

受付に行くとさきほど心配していた受付嬢が7人が帰ってきたのを見てホッとした表情を見せる。

受付嬢が大丈夫かと聞いてきたので試合の全貌を話すと少し晴れ晴れした表情になって。

受付嬢「こちらが今回の賞金でございます。」

そういって小さな皮の袋を渡してくる。

中には銀貨が５０枚入っていた。

尚矢「これって中々の大金ちゃう？」

受付嬢「はい、リベウス猟兵団は今日まで最強のチームでしたからね、そもそも闘技場なんてスキルマスターが来ることは滅多にありませんし、来ても5人など相手に出来ない者ばかりですから。」

7人はそうなのかとなんとなく納得した。

受付嬢にまた遊びに来ると別れを告げ7人は男女共同館で汗を流す

ことにした。

報酬は銀貨５０枚なので１人７枚、提案者の剣徒だけ８枚渡して仲良く分けた。

７人は談笑しながら男女共同館への道を歩き始めた。

第１０話　地獄絵図　其の弐（後書き）

３０００字超えたから読みやすく２つに分けました（・ω，・キリッ

あー疲れたｗｗ

意外と長くなってしまった（・ω・、

最近ユニークは増えてきたけどお気に入り登録件数が１件減ってたｗｗｗ

泣いちゃう（；ω；、

頑張って更新するんで見捨てないで（；ω；、

第１１話　説教

あの後男女共同館で夕食をたんまり食べ、大浴場で体を癒し、レストルームで心地よい安眠をし、寮に戻ってなお睡眠を取った7人は朝からＧＳＭＧに呼び出されていた。

教官殿「で？　なんだこの記事は。」

そういって１枚の新聞のような物を机の上に叩きつける。

そこには『民間人を装ったスキルマスターが闘技場で拷問騒ぎ！！！』などと書き立てられていた。

まぁ嘘ひとつない事実なのだが。

尚矢「いや、これはあのですな、猟兵団の頭に目を付けられて無理やり引っ張り出されたんですわ。」

真癒「まぁそれでちょっと苛めちゃおかなーって・・・・。」

教官殿「じゃあなぜ初めからスキルを行使しなかったのだ？」

剣徒「いやぁ・・・・だって相手の人自身満々でかなり上から目線だったので、この際ちょっとからかってからスキルでばーんとですね・・・・。」

教官殿「お前らの大好きな悪戯心とかいうやつか。」

７人はそう言われえへへぇ～などと笑っている。

教官殿「えへへぇ出はないっ！　確かにリベウス猟兵団は態度が大きく、この辺では少し有名だからと融通もきかず、厄介でめんどくさい連中だが・・・・。」

ここまで言うなら7人の肩を持ってくれてもいいんじゃないかと思う7人。

しかし口には出さない。

尚矢「連中がなんです？」

教官殿「あいつらはあいつらで国に正式に雇われた猟兵団なのだ。」

教官殿「それを我らGSMG所属のスキルマスターが精神崩壊にさせて使い物にならなくなったとあってはこちらの面目丸つぶれではないか！！！」

リベウス猟兵団はいわば7人と同じ公務員だったらしい。

しかし7人が死ぬよりも辛い精神攻撃をかましたおかげで精神崩壊を起こし使い物にならなくなったそうだ。

教官殿「まったく・・・・確かに奴らは国の他の猟兵団や騎士団からも忌み嫌われていたので国からの追求は無いが・・・・。」

そこまで言って、息を吸って。

教官殿「貴様ら7人の今後一切の闘技場での戦闘を禁止する！！！」

7人にとってこれはついさっき買って貰ったゲームの画面を目の前で叩き割られたような衝撃であった。

画面が真っ暗のゲームで何をしろと言うのだろうかこの鬼教官殿は。

あれか、画面が割れてもめげずに「このゲームブラックスクリーンっていうゲームやねん！」と開き直るあれか。

7人は激しく抵抗した、それは辛いと。

しかし帰ってきたのはあまりにも有名すぎるあの言葉であった。（りたーんず）

教官殿（イー○ック）「大丈夫だ。　問題ない。」

そのかわり観客として観戦するのと、また来ると言ってある受付嬢に事情を説明しに行っていいという許可だけを貰った。

その後残りの休暇を考えて過ごせと言われ、7人は男女共同館に向かった。

本当に起きてすぐ呼び出されたので食事も取っていなかったのだ。

7人はいつものカフェでモーニングを食べながらどうやってスキルの練習をするかの話し合いを始めた。

尚矢「あーあー・・・・誰やねんあんな記事書いたのは・・・・。」

剣徒「なにも悪いことはしてないのにですよ！　ほんとに、頭にきます。」

まぁしていたことは拷問だがそこに誰も突っ込まない、いや突っ込めない。

なぜかって？　夜雲以外共犯者だからだよ。

夜雲は滅多に口を開かない、がしかし今回は珍しく今回の出来事に一言。

夜雲「・・・・・あなたたちの昨日の行いはなかなか外道なんて通りこしたものだった。」

夜雲「・・・・・私のいた暗殺の世界でもあれほどの拷問を見たことがない。」

そういわれ６人はすごーく後悔の念が押し寄せてきた。

なにせ元本職の暗殺者にいままでに見たことのない外道と言われたのだから。

真癒「ま・・・・まぁ、もうあんな酷い事はしないわよ！」

優菜「そ、そうですぅ！　昨日はちょっとやりすぎちゃっただけですぅぅ。」

尚矢「せやせや、仕方ない仕方ない、でもこれでお金稼ぐ術が１つ減ったけどどうする？」

真癒「そうね、スキルが練習できてお金も稼げる一石二鳥無いかしら・・・・。

そういうと机に突っ伏して興味無さ気に寝ていた守武がばっと起き上がり・・・・。

守武「それならＧＳＭＧのクエストをやればいいんじゃないかな。」

「「「「「クエスト？」」」」」

守武は周りを観察すること（女の子を探すこと）が趣味なため、割と周りに注意しながら歩いている、何も見逃さぬように。

守武はＧＳＭＧにスキルマスター用のクエスト掲示板があったと６人に話した。

近くに受付もあり、クエストボードのクエスト内容が書かれた依頼用紙を受付に持っていくスキルマスターを見たそうだ。

とりあえず７人は気が進まないものの、ＧＳＭＧに行ってみる事にした。

尚矢「さっき怒られに行ったばっかりのＧＳＭＧにまた行くの気が引けるけど、とりあえず午後がひまやし１個か２個クエスト受けてみるかぁ・・・・。」

７人は朝食を食べ終え、ＧＳＭＧに向かった。

第１１話　説教（後書き）

よっし更新！

友達に負けないように頑張るっす！

ユニークの方、新規の方々、これからもよろしくおねがいします！

第12話　クエスト

7人はＧＳＭＧのクエストボードの前に立っていた。

尚矢「ほげええぇぇ・・・・。　色んな依頼があるんやなぁ・・・・・。」

クエストボードには国中から寄せられた依頼書が隙間なく張られていた。

内容は様々で、大型モンスターの退治や物を運ぶ仕事、さらには要人護衛の任務など様々である。

全ての依頼に推奨階級が表記してあり、指定階級以下のスキルマスターはその依頼を受けることができない設定になっている。

剣徒「受けるならやっぱり戦闘系が一番ですよね。」

討魔「そうだな、経験も積めるしスキルを試すことも出来るしな。」

真癒「でも大型モンスターって怖いわよ・・・・・。」

守武「バーニングドラグーンとか戦ったじゃん。」

真癒「うぅ・・・・確かに・・・・・。」

そんなことを話していると尚矢が中々良い依頼を発見したようだ。

尚矢「お、これなんかどうや？」

尚矢が持ってきた依頼書の内容はこうであった。

依頼内容：田畑を荒らすブラッドウォルフの群れの討伐　報酬：銀貨３５枚　推奨階級：下級【第九階級】エンジェルス以上

討魔「ほう、集団戦闘か。」

尚矢「指定の田畑もこっから近いみたいやしちょうどええやろ。」

７人はその依頼でいいと意見が一致し、受付に持っていった。

受付嬢「クエストの受注ですね、初の受注ですか？」

尚矢「へ？　なんでわかりますねん？」

受付嬢が言うにはクエストは基本的には依頼書を見て、その場に行って依頼主から詳しい内容を聞いて、依頼を達成してから依頼書を受付に持ってくるということだ。

そういうことならと、さっそく７人は王都の東門から街道に出て、田畑を目指す事にした。

尚矢「依頼の田畑があるのは・・・・イーストベルタ村の村長さんの田畑らしいで。」

真癒「なんでわかるの？」

尚矢「依頼書の裏に詳しい地図とかが書いてあるからな。」

どうやらイーストベルタはすぐ近くの村らしい、７人が東門を出て２０分もしないうちに村が見えてきた。

討魔「あれがイーストベルタ村だな、思ったよりこじんまりしているな・・・・。」

剣徒「こう見るとやっぱりここは異世界なんだなぁって実感しますね、小さいときにやったゲームの村そっくりですもんね。」

そう、この村のイメージは某名作ファンタジー・ドラ〇エの村をイメージしてもらえるとありがたい。

村に入ると農民の格好をした人々がちょこちょこ行き来している、村には宿屋や教会、道具屋まである。

尚矢「ほげえぇ・・・・つくづくドラ〇エと一致するなぁ・・・・。」

守武「これはテンションがあがる！！！」

真癒「ドラクエってなによ？」

尚矢「ちょっ！　名前出すのやめんかいっ！　せめて間に〇を入れんかい！」

真癒「なんでよ・・・・。」

尚矢「知らんかもしれんけどいろいろあるんやっ！！！」

真癒「わかったわよ・・・・めんどくさいわねえ・・・・。」

そんなことを村の入り口で騒いでいると、３０代半ばと思われる農夫の一人が近づいてきた。

農夫「おいお前ら、この村になんのようだ？　入ってくるなりそんなとこで騒ぎやがって。」

剣徒「あ、申し訳ありません、この度王都に寄せられた依頼書を見て来たものですが、よければ村長さんの家を教えてもらえませんか？」

農夫「ああ、なんだおたくらスキルマスターなのか！　なかなか来なくて困ってたぜ！」

剣徒「と、いいますと？　あなたは・・・・。」

農夫「そうだ、俺がこのイーストベルタ村の村長をやっているジンだ、よろしくな！」

ジン「しかし、お前ら若いみてえだが本当にスキルマスターなのかい？」

尚矢「そやで、わいらは正真正銘のスキルマスターや。」

ジン「うむ・・・・ならなにか証拠を見せてみろ、一応確認しておきたいのでな。」

そう言われると7人はすごく見せ付けたい衝動に駆られたが、村を焦土と化すのはまずいので簡単なスキルを見せることにした。

守武は闇の剣を出した、尚矢は聖なる槍を出した、討魔は強い風を吹かせた、剣徒は薔薇の双剣を出した。

ジン「なんか手品みてえだな・・・・。　ほかにねえのか？」

すると真癒はジンの体力を回復した、優菜は波動でマッサージをしてやった、夜雲は汗をかいていたジンを冷やしてやった。

ジン「おお、これは肌で実感できるな。　でもこんなスキルじゃブラッドウォルフは倒せないと思うぜ？」

この言葉を聞いた守武は村の外にあった林を一瞬にして焦土と化した。

ジン「うおおおお！！！　なにやってくれてんだ貴様らあああ！！！」

守武「信じないから悪いんじゃん。」

ジン「まぁあれは村の外だから別にいいがな・・・・。」

ジン「お前たちがスキルマスターだと言う事はわかった、歓迎しよう。」

7人はジンに連れられて村長宅へ招かれた。

ジンいわくブラッドウォルフは3日置きに村の西側にある田畑を荒らしに来るらしい、村人では大量の魔物を相手に出来ず困っていたらしい。

7人はジンに小さな小屋を提供してもらい、3日間そこに滞在することとなった。

小屋は2階建てで、1階にベッドが4つ、2階にベッドが3つあった。

尚矢「意外としっかりしてるなぁ！　小屋っちゅうから荒れた倉庫かなんかかと思ってたわ！」

真癒「そうね、しっかり出来てて中も綺麗だわ。」

守武「僕は2階で寝るよ。」

真癒「なんでそうなるのよ！」

守武「え、なんとなく・・・・。」

剣徒「やましい気持ちが見え見えですね・・・・。」

真癒「寝るとき縛ってもいいならそれでもいいけど、どうする？」

守武「やっべ俺高所恐怖症だったわ。」

真癒「そうなの、それは仕方ないわね。」

その日は村の近くをうろうろして、村長の家で歓迎会が行われ7人は眠りについた。

7人の休暇が終わった。

～静寂の章　終～

第１２話　クエスト（後書き）

お久しぶりです、最近完全に物語が浮かばず少しスランプでした。

とりあえず章末だったので静寂の章を終了します。

次の投稿はなるべく早く書きますが、いつになるかは未定です＞＜

たまに確認しにきていただけるとありがたいかな＞＜

では久々のＧａｔｅをどうぞ！

第1話　朝の散歩

守武は朝早く目が覚めた。

時刻的には朝5時すぎというところだろうか。

守武「んんっ・・・・もう朝か？」

窓を見ると少し空が白み始めた明け方であった。

守武「なんでこんな時間に・・・・日本にいるときはこんな早くに目覚めることもなかったのにな・・・・。」

しばらくボーッとしていたがあまりに退屈で守武は動き出す。

守武「上で女子達が寝てるんだよな・・・・、いや止めとこう命が惜しい。」

オプスキュリア「よう相棒、おはよっさん。」

守武「ああ、お前がいたな、朝早く目覚めちゃってひまなんだわ。」

オプスキュリア「そうか、なら話でもしよう。　一つ聞きたいことがある。」

守武「聞きたいこと？」

オプスキュリア「お前いつまでその変態キャラで自分を偽るつもりだ？」

守武「っ！！！」

オプスキュリア「なぁに驚くこたぁねぇ、今の俺は相棒と一心同体、相棒が何考えてるかなんて自分の感情のように流れ込んでくる。」

守武「っは、そうだよな、さすがにお前にはお見通しか。　でもその問いには答えかねるな。」

オプスキュリア「相棒がどう振舞うかは自由だ、ただなんで隠すか気になったってだけだ。　悪い事聞いたな。」

守武「いいんだよ、ぐりーんだよ。」

オプスキュリア「しょうもねえ。」

守武「朝のクリアな空気でも吸いに散歩にでも行くか。」

オプスキュリア「そりゃあいい、目が覚める。」

そんな話の流れで守武は村長のジンから借りた小屋から出て小さな村の中を一周した。

魔物は周期的には今晩やってくる予定だった。

村から出て昨日自分が消し去った林の方まで歩いてくると何かを打撃するような激しい音が聞こえてきた。

守武「？　なんの音だ？」

オプスキュリア「さぁなぁ、さしずめ【アルモニア＝プロドティス】の手先ってとこか？」

守武「そりゃあまずいねぇ、殺っちゃう？　」

オプスキュリア「まぁまぁ、そう早まらずに覗きに行こうぜ？　もしかしたらかわい子ちゃんが激しくやってるかもしんねえ！」

守武「ほう、それはいい、ぜひとも覗きに行こう。」

もう少し林のあったほうへ進むと巨大な岩山があった。

近くまで来ると一人の大柄な男が岩に拳を叩きつけていた。

大柄な男「はあああぁぁぁっ！！！　セイヤァァァァッ！！！」

怒号を上げながら男が拳を岩山に叩き付ける。

その瞬間山のような岩山は轟音を立てながら崩れ落ちた。

守武「なっ！！！　拳であんなでかい岩山を！？」

？？「だれかいるのか！？」

オプスキュリア「まぁずい、でもこの声最近聞いた気がすんなぁ・・・。」

仕方なく守武は隠れていた物陰から出てその男に近づいていった。

？？「なんだ！　スキルマスターの兄ちゃんじゃねえかぁ！！！」

守武「あれ？　ジン村長では？」

ジン「そうだ、えらい早起きだな！　最近の若いもんは怠け者ばっかりだと思っていた、さすがは選ばれしスキルマスターだけあるな。」

守武「いやぁっ！　それほどでもぉ！　当然ですよ当然、周りの面子がダメダメすぎるんですよ！」

ジン「ははっ！　頼もしいリーダーだな！」

守武「そ、それはそうとジンさんめっちゃ強いじゃないですか！！！　あんな巨大な岩山を一撃で・・・・。」

ジン「ああ、その話だがいま見たことはできれば誰にも話さないでもらえねえかぁ？」

守武「いいですけど、なんでですか？」

ジン「まぁお前たちスキルマスターには追って話そう。　とりあえず村に戻るか。」

そういってジンは村に向かって歩き始める。

オプスキュリア「あの気、ただものじゃねえなぁ。」

守武「あ、やっぱそういう感じの人？？」

オプスキュリア「ま、その内分かるだろう。」

ジン「おーい兄ちゃん！　置いてくぞぉ！　朝食の準備手伝ってくれよな！」

守武「ああっ、はい～。」

2人は村に向かって歩き始めた。

第1話　朝の散歩（後書き）

お久しぶりです、えれえハードなスランプからやっと抜けました。

更新されないにもかかわらず毎日覗きに来ていただいたユニークの方、本当にありがとうございます！

これからも頑張って更新していくので新章を楽しんでください！

第2話　静かな村の騒がしい朝

村に戻った村長と守武はまだ寝ている6人のための朝食を作り、守武は小屋に戻った。

小屋に戻ると6人とも起きていてそれぞれ着替えをしたりしていた。

真癒「あら、守武出かけてたの？　てっきり寝てるかと思ってたわ。」

討魔「珍しいなお前がこんな早くに起きているなんて、今日は天地でもひっくり返るんじゃないか？」

尚矢「ほんまやな！　守武ぇ・・・・寝てる女の子にとは・・・・中々マニアックな事するなぁ！」

真癒「なんですって！？　守武！！！！　死になさい！！！！」

真癒が水流の剣を作りものすごい勢いで突っ込んでくる。

守武「いいいぃぃやあぁぁぁぁぁっ！！！！」

部屋中に鈍い音が鳴り響いた。

～時はさかのぼり１０分前～

守武に朝食の調理を手伝って貰ったジンは余った時間で一人くつろいでいた。

ジン「いやぁ・・・・しかしこうも早く俺の『拳』を見られちまうとはなぁ・・・・。」

そんなことを一人考えていると守武と別れてから割と時間が経っていることに気づく。

ジン「そろそろ兄ちゃん達を呼びに行くかな。」

ジンは小屋まで歩いていき、扉をノックした。

しかし返答はなく中から守武の悲鳴が聞こえてきた。

ジンは間髪入れず部屋に飛び込んだ。

ジン「どうしたぁ！　だいじょうぶぅうぉっ！！？？」

目の前には水流の剣を構えた狂気の少女が突っ込んできた、守武は自分の足元で腰を抜かしている。

ジン「っち！！！」

ジンはすかさず拳を構える。

刹那、鈍い音が部屋中に鳴り響いた。

真癒「・・・・え？」

ジンは右手一本で水流の剣を受け止め、打ち消した。

ジン「なんだぁ？　こんな朝早くから小屋で暴れやがって！」

しかし部屋の中の空気は完全に凍っていた。
そこでジンはまたも自分の『拳』を見られたことに気付く。
ジン「あー、なんだ、若いのも分かるがはしゃぐのはそこそこにしときなよな。　じゃ。」
そういって小屋を出ようとする。
しかし何も知らない6人はそれを認めない。
尚矢「村長はん、いまの・・・・なんや？」
ジンは気にした風もなく。
ジン「なに、努力のたまものってやつだなっ！　ははははっ！」
剣徒「ジンさん秘密を隠せないタイプですね。」
討魔「焦ってるのがバレバレだな。　こうも分かりやすい人間って本当にいるもんなんだな。」
夜雲「・・・・ある種貴重価値。」
剣徒「話してくれますよね？」
6人の顔は笑っているが目は笑っていなかった。
ジン「っは、どっちにしろ話すつもりだったけどよぉ、まぁ先に朝

食でも取ってゆっくり話そうぜ。」

守武「僕の誤解も晴らしてください。」

ジンは状況的に守武が勘違いで襲われたと理解した。

ジン「守武の兄ちゃんは朝からお前らの分の朝食作りを手伝ってくれてたんだ、決してやましいことはしてねえぜ。」

それを聞いた6人は疑問の表情に変わる。

6人は同じことを考えていた。

（守武がそんな早くから起きて朝食のお手伝い？）

守武はさらに自分の言動が怪しまれてるのを感じまた騒ぎ出す。

守武「なんで信じてくれないんだよ！　人間たまには朝早く目が覚めることだってあるだろ！」

6人はそれを聞いて（まぁそれもそうか。）と納得する。

真癒「守武・・・・その、ごめんなさい、私の早とちりだったみたいね。」

守武「おほぉ・・・・いつもツンツンしてる真癒が謝るなんて・・・・！」

真癒「わっ、私だって悪いことしたときくらい謝るわよっ！！！」

真癒「元はと言えば尚矢が紛らわしいこと言うからじゃないの！！！」

尚矢「まぁそやけどやなぁ・・・・守武の話を聞かんかったんは真癒やしなぁ・・・・。」

真癒「なんで素直に謝らないのよ！！！」

そこからまた2人でギャーギャー騒いでるのを笑顔で眺めていたジンは時間を思い出す。

ジン「まぁまぁ！　誤解は晴れたんだしさっさと飯食わねえと冷めちまうぞ！？」

その言葉で6人は静まり、着替えを始めた。

ジン「じゃあ俺は守武と先に家に行って準備しとくから、着替えが済んだらさっさとこいよ？」

「「「「「「はーい」」」」」」

イーストベルタ村の1日目が始まった。

第2話　静かな村の騒がしい朝（後書き）

2話目投稿！

前は更新に追われ焦って無理に書きすぎてました。

これからはゆっくり書きたいと思いますw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3758t/

【Ｇａｔｅ】～若き門番達の物語～

2011年12月24日04時00分発行